滅亡から虚空へ

続・滅亡の日

麻原彰晃の「黙示録大預言」完全解読

This book is the record of the events that Jesus Christ revealed. God gave him this revelation in order to show his servants what must happen very soon. Christ made these things known to his servant John by sending his angel to him, and John has told all that he has seen. This is his report concerning the message from God and the truth revealed by Jesus Christ. Happy is the one who reads this book, and happy are those who listen to the words of this prophetic message and obey what is written in this book! For the time is near when all these things will happen.

滅亡から虚空へ

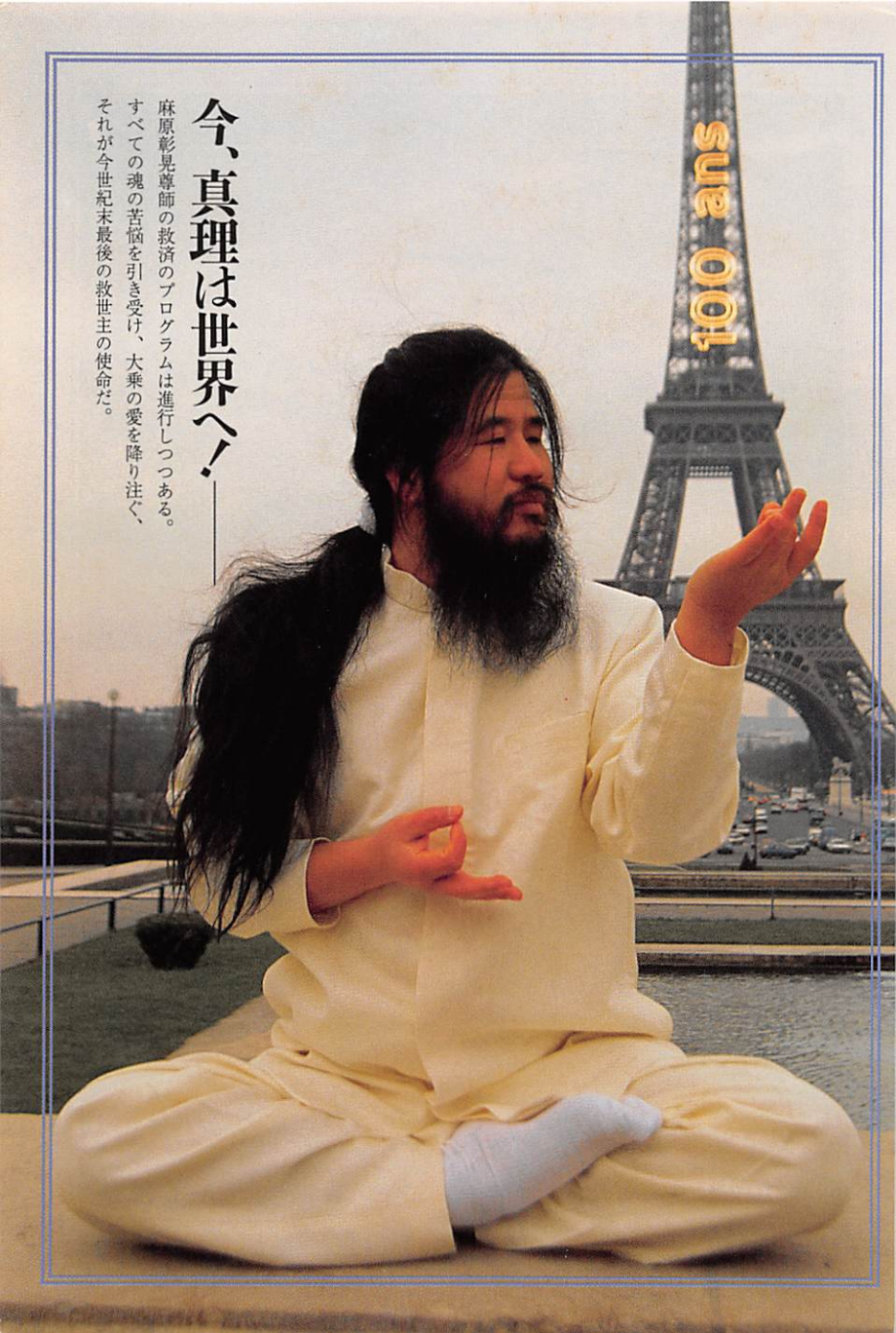
続・滅亡の日

麻原彰晃の「黙示録大預言」完全解読

オウム出版

今、真理は世界へ！——

麻原彰晃尊師の救済のプログラムは進行しつつある。
すべての魂の苦悩を引き受け、大乗の愛を降り注ぐ、
それが今世紀末最後の救世主の使命だ。



集え、光の子供達よ!——

光り輝く白い衣をまとったその姿は、神の栄光を受けた超人類の証なのだ。

はじめに

『滅亡の日――麻原彰晃「黙示録大預言」の秘密のベールを剥ぐ』が、一九八八年末に出版されている。皆さんは、もうお読みになってくださっただろうか？

本書がいざ出版となって、何よりも私が驚いたのは、オウム真理教の信徒の皆さんばかりではない、一般の人々の関心の高さだ。これには、『ヨハネの黙示録』のハルマゲドン（人類最終戦争）の破局までの預言の全貌が明らかにされていたわけだが、多くの書店で発売当日に売り切れてしまったのである。そして、在庫切れは三週間近く続いた。私がこの『滅亡から虚空へ』を脱稿した三月に入っても、ベストセラーに名を連ねているということである。

想像以上に多くの人々が、〝滅亡の日〟の到来を意識しているものとみて間違いないだろう。人間だったらだれでも第六感というものを持っているといわれるが、それが働いているのかもしれない。

そうなると、当然のことながら、「いかにしたらハルマゲドンに生き残れるか」あるいは「ハ

ルマゲドン以降にはどのような世界が存在するのか」などということをも、知りたいという気持ちが高まっていることであろう。

本書は、まさにその要望に応えるべき手掛かりとなるべきものである。

『ヨハネの黙示録』では、ハルマゲドン以降も預言が続く。今回もその預言を解明していきながら、様々な角度からの考察を加えてみた。『滅亡の日』と本書を合わせて読むことによって、ヨハネに『黙示録』を書かせた神の大いなる救済計画が浮かび上がってこよう。

なお、皆さんの頭の中に、既に『滅亡の日』の内容が入っているということを前提として書き進めるつもりなので、まだ読んでいない人はぜひ読んでおいていただきたい。

ところで、最近になって、ある仏典の伝承に面白い話があったのを思い出したので、ここでご紹介しておこう。

それはこういう話である。

マハーパジャーパティーは、釈迦牟尼（しゃかむに）の養母であった。実母であるマーヤ夫人が、釈迦牟尼を生んで七日後に亡くなったため、その妹のマハーパジャーパティーが父王の後妻として、釈迦牟尼を我が子のように慈しんで育てたのである。

また、ヤソーダラーは釈迦牟尼の妻の一人であった。釈迦牟尼の出家前、二人の間にはラーフ

ラと名付けられた息子が生まれている。

さて、このマハーパジャーパティーとヤソーダラーをはじめとする何人かの女性達が、釈迦牟尼に出家を願い出たときのこと、釈迦牟尼はそれを拒絶した。それは、女性でも男性と同様に解脱する力を持っていることを認めてはいたものの、その障害となる女性の本性やカルマの悪さを見抜いていたからである。

拒絶された女性達を見て哀れに思った仏弟子アーナンダは、釈迦牟尼に出家を許可してあげるよう何回も懇願した。それによって、やっとのこと、女性の出家が認められたのであった。

だが、このとき釈迦牟尼は、アーナンダにこう語ったと伝えられている。

「女性が出家することによって、千年続くはずであった正法が五百年しか続かないことになった。」と。

おそらく、人間を解脱させるサットヴァのエネルギーが一定であるのに、カルマの悪い女性が出家してそのエネルギーを使ってしまうと、予定よりも早くエネルギー不足が起こってしまう、それによって正法も廃れてしまう、ということを言っているのだろう。

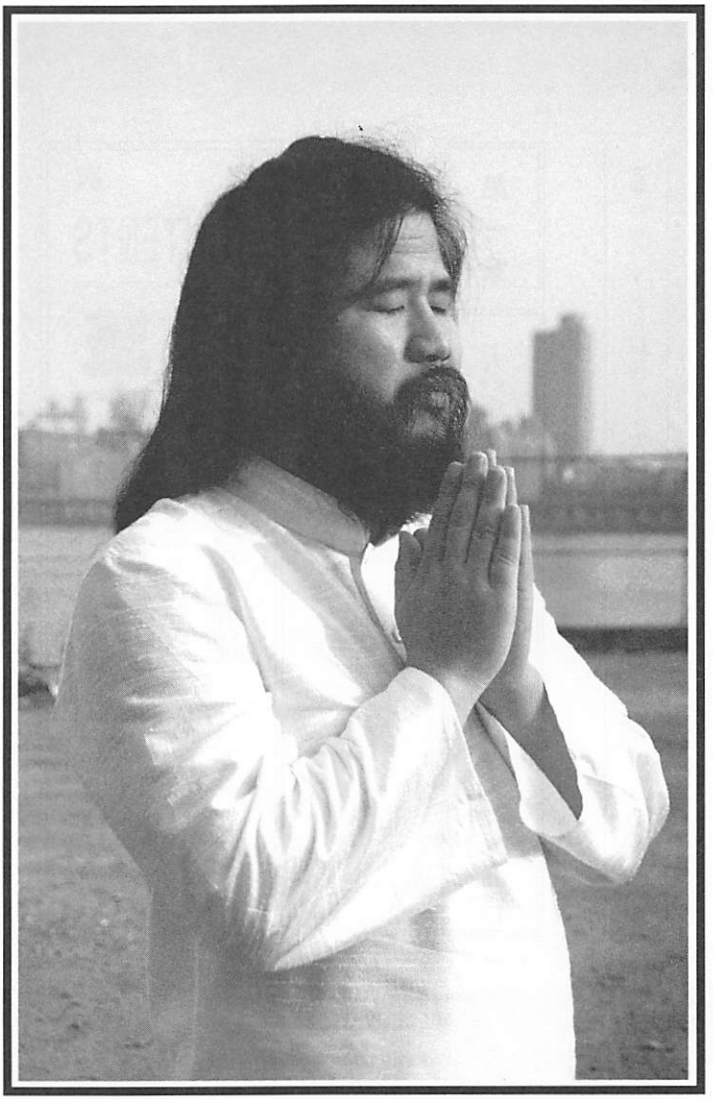
女性のカルマが悪いというのは、私も感ずる大方の傾向である。こんなことを言うと、女性読者のひんしゅくを買いそうであるが、嫉妬深いところ、執着するところ、無責任なところなどは男性の比ではあるまい。いかがであろうか?

もちろん、並みいる男性以上の能力を持ち活躍する女性も確かに存在することは、釈迦牟尼も私も認める事実である。ただ残念なことに、ごく一部にすぎない。

さて、ここで釈迦牟尼が「正法が五百年しか続かないことになった」と言っていることに注目してみたい。釈迦牟尼が正法を展開し出してから五百年後、いったい何が起こっているのであろうか？そうなのだ。ちょうどイエス・キリストの生誕と一致しているのである。

『滅亡の日』で、私が『黙示録』の有名な〝獣の数字〟がバイブル、つまりキリスト教を表わしていると書いたことを思い出していただきたい。この釈迦牟尼の言葉も、キリスト教がそのエゴイスティックな宗教理念によって、世界を破滅へと導いていくことを暗示していたのだとしか思えないではないか。釈迦牟尼の神通力からいえば、未来予知は当たり前のことなのかもしれないが、この一致には驚かざるを得ない。

それでは、シヴァ神からの示唆に富む『滅亡の日』の続編ともいうべき本書から、今あなたに必要なことが何なのか、ということを読み取っていただきたい。そして、あなたの人生に取り入れていっていただけたら幸いである。



目次 CONTENTS

滅亡から虚空へ

麻原彰晃の「黙示録大預言」完全解読

終末・滅亡の日

はじめに

第一章　大いなるバビロンの崩壊　15

◉◉ハルマゲドン以後——大淫婦と赤い獣　16

●大淫婦イギリスの登場
●大英帝国、その悪業の歴史
●〝赤い獣〟とは……
●驚異の適中率――尊師の予言の輪郭

◉◉第八の獣の正体――滅ぼされる大淫婦

●ヨーロッパで興亡した七つの帝国
●ナチス系帝国の復活
●『わが闘争』――甦るヒトラーのイデオロギー
●大いなるバビロン――血に酔いしれる女

36

◉◉神の裁きは下される――避けられないカルマの清算　50
●救済に命を懸けて
●バビロンは倒れた――イギリスの滅亡
●血の歴史が生み出した女王エリザベス
●そして、すべては海に沈む……

第二章　神の大宴会が始まる　67

◉◉真理はここに！――奏でられる神々の旋律　68
●王の王、主の主――裁きの方は白い馬に乗って

●神エホバは存在しない！
●「アァメン」――その言葉の真実
●弟子達よ、真理のもとに集え！

◉◉小羊の婚姻の時――天の軍勢は戦いに備えて　82

●シャクティーを得た小羊――転輪聖王の登場
●限りないシヴァ神の恩恵
●転輪聖王カルキの伝説
●ゾロアスター教に見るタントラの原形

◉◉アフラの伝記――曲解された信仰の歴史　98

●最高神アフラ・マズダーの肖像
●アフラとダエーヴァの変遷

●釈迦牟尼に見る世界観――欲六界の構図
◉◉シャンバラの系譜――それは救済の光　110
●その名は、マイトレーヤ！
●今明かされる天界の全構造
●宇宙の実相――そしてシヴァ神の救済
●シャンバラ――光をコントロールする
●光を発する！――甘露水の驚異
●マハー・シューバラとしてのシヴァ神
●〝天の軍勢〟の勝利

第三章　そして、虚空の時代へ　133

●●審判の時は来りて――裁かれた魂の行方 134
●千年王国の後に――顕現する天界と地獄界
●欲六界が一つになる――仏典の記述
●復活の秘儀をここに明かす！
●転生譚――少女シミのエピソード
●二分化されるすべての魂
●●飛翔！――ラトナサンバヴァの世界へ 154
●〝新しいエルサレム〟は花嫁のように
●それは、虚空の楽園
●公開！　ラトナサンバヴァの世界
●聖なる都――限りない神の栄光のもとに

●見よ！　裁きの時は近い

第四章　救済のシナリオ

●正確に『聖書』を訳すために
●ゴグ、マゴグの解釈――まずは観念を取り除くこと
●魂の二極化――宇宙が破壊された後の世界
●神の名の意味合いは？
●真理の系統――一つの大きなルーツ
●後世の加筆を探る――徹底した資料の吟味
●第一次大戦の補記
●いきなりジェットエンジン？
●これからどうしたら……
●時を超える――〝不死〟への福音

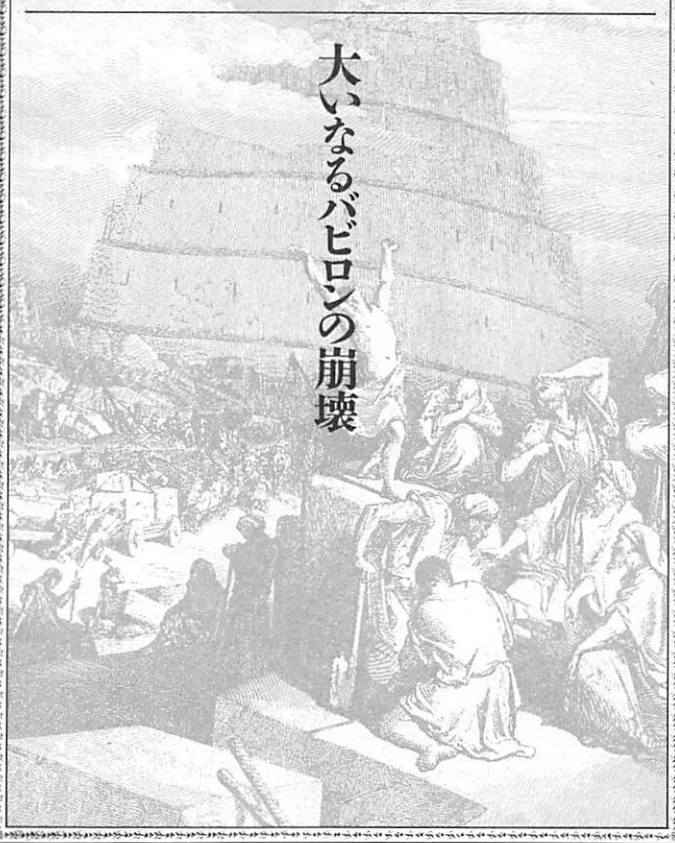
●新たなる時代の予感――超人類の子供達の出現
●大破局まであとわずか――運命の選択は今！

※本文中の『ヨハネの黙示録』は、日本聖書協会発行の『聖書』から引用させていただきました。

■デザイン：望月美雪／石橋由香／西口佳子子／松本良美／仮井昭裕／森長春美／亀本保頼
■カバーデザイン：マハー・カッサパ
■オペレーター：木下千津

第一章

大いなるバビロンの崩壊



ハルマゲドン以後——大淫婦と赤い獣

◉◉大淫婦イギリスの登場

それでは、いよいよ新展開、ハルマゲドン以降の世界の動向を見ていくことにしよう。

それから、七つの鉢を持つ七人の御使のひとりがきて、わたしに語って言った、「さあ、きなさい。多くの水の上にすわっている大淫婦に対するさばきを、見せよう。地の王たちはこの女と姦淫を行い、地に住む人々はこの女の姦淫のぶどう酒に酔いしれている」。御使は、わたしを御霊に感じたまま、荒野へ連れて行った。わたしは、そこでひとりの女が赤い獣に乗っているのを見た。その獣は神を汚すかずかずの名でおおわれ、また、それに七つの頭と十の角とがあった。この女は紫と赤の衣をまとい、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものと自分の姦淫の汚れとで満ちている金の杯を手に持ち、その額には、一つの名がしるされていた。それは奥義であって、「大いなるバビロン、淫婦どもと地の憎むべきものらとの母」というのであった。わたしは、この女が聖徒の血とイエスの証人の血に酔いしれているのを見た。

この女を見た時、わたしは非常に驚きあやしんだ。すると、御使はわたしに言った、「なぜそんなに驚くのか。この女の奥義と、女を乗せている七つの頭と十の角のある獣の奥義とを、話してあげよう。あなたの見た獣は、昔はいたが、今はおらず、そして、やがて底知れぬ所から上ってきて、ついには滅びに至るものである。地に住む者のうち、世の初めからいのちの書に名をしるされていない者たちは、この獣が、昔はいたが今はおらず、やがて来るのを見て、驚きあやしむであろう。ここに、知恵のある心が必要である。七つの頭は、この女のすわっている七つの山であり、また、七人の王のことである。そのうちの五人はすでに倒れ、ひとりは今おり、もうひとりは、まだきていない。それが来れば、しばらくの間だけおることになっている。昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八のものであるが、またそれは、かの七人の中のひとりであって、ついには滅びに至るものである。あなたの見た十の角は、十人の王のことであって、彼らはまだ国を受けてはいないが、獣と共に、一時だけ王としての権威を受ける。彼らは心をひとつにしている。そして、自分たちの力と権威とを獣に与える。彼らは小羊に戦いをいどんでくるが、小羊は、主の主、王の王であるから、彼らにうち勝つ。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る」。

御使はまた、わたしに言った、「あなたの見た水、すなわち、淫婦のすわっている所は、あらゆる民族、群衆、国民、国語である。あなたの見た十の角と獣とは、この淫婦を憎み、みじ

めな者にし、裸にし、彼女の肉を食い、火で焼き尽すであろう。神は、御言が成就する時まで、彼らの心の中に、御旨を行い、思いをひとつにし、彼らの支配権を獣に与える思いを持つようにされたからである。あなたの見たかの女は、地の王たちを支配する大いなる都のことである」。

（第一七章）

この第一七章では、第一六章で描写されているハルマゲドンの後、なおも存続しているイギリスの歴史が、それ以前にさかのぼって預言されていたのである。

「イギリスはまるで、つばの広い帽子をかぶって、ドレスを着た女性みたいな地形をしていますね。この帽子のつばのところなんて、フィヨルドが発達していてフリルが付いているみたい。」というK大師の言葉に、私もハッとした。〝水の上にすわっている大淫婦〟はイギリスだったのだ。

「ヨーロッパの一国であろうとは思ったが、イギリスだったんだね。イギリスは水に囲まれた島国であるし、女性のような地形をしているとなればもう間違いない。さすがはイメージ力のK大師だ。また、イギリスは女王の国でもある。女性が王位に就いたときに繁栄するといわれているほどだ。現在もエリザベス女王が王位に就いているし、首相も女性――これらの事実を考えてみると、水の上に座る女というのはぴったりの比喩だね。そして、この女がどうして大淫婦といわれているのかは、次を読むことによって明らかになってくるわけだ。」

Faeroe Is.
tlantic
cean
Bergen
Stavanger
UNITED
KINGDOM
Aberdeen
Glasgow
Edinburgh
North
Sea
Belfast
Newcastle
Dublin
Liverpool
Leeds
IRELAND
Manchester
Sheffield
Birmingham
NETHERLANDS
Cardiff
London
The Hague
Rotterdam
Bristol
Antwerp
BELGIUM
Lille
Brussels
Rouen
Paris
Nancy
Strasbourg
Nantes
FRANCE
Bay of
Biscay
Berne
Lausanne
Geneva
Lyon
Bordeaux
Milan

第一二章（『滅亡の日』で解読済み）においても、〝ひとりの女〟が出てきた。この女が中国の象徴であったわけである。そのため、一度はここに登場する大淫婦が中国のことではないかとも考えてみた。

しかし、それだと疑問が残ってしまう。なぜならば、第一二章では中国が二〇〇四年末あるいは二〇〇五年初頭に滅亡することをも預言していたからである。そうなると、ハルマゲドン以降の中国の存続はまず考えられない。『黙示録』の預言は、これまでにも寸分の狂いもなく現実化しているのだ。

となると、今までに一度も預言に姿を見せていなかった、ヨーロッパの一国のことではないだろうか？　そう思って、ヨーロッパに目を向けてみた矢先のK大師の言葉――これがヒントになって、これがイギリスを暗示しているという確信を得たのであった。

◉◉大英帝国、その悪業の歴史

そもそも、人類の歴史を見てみるならば、預言にもイギリスが登場しない方がおかしいのである。特に産業革命以後、イギリスが世界に与えた影響はそれほど大きかった。

私はこれを好影響と言っているのではない。完全に悪影響だ。あこぎに第三世界の植民地化を推し進め、大英帝国圏を形成していったのだから。

例えば、産業革命で、イギリスは国内においては労働者階級に悲惨なる犠牲を強いた。一日十四、五時間に及ぶ長時間労働と劣悪な生活条件は、労働者階級の平均寿命を十五～十九歳という異常な低さに引き下げたという（参考＝一八三〇年代末の工業都市『日本大百科全書』）。高い死亡率の主な原因を挙げるならば、赤痢・チフス・結核・コレラなどの劣悪な生活環境が引き起こす伝染病や、労働者家庭の乳幼児の死亡率が高かったことである。現代の日本に生きる私達には、想像もつかないような生活であったことをうかがい知ることができよう。

また、産業革命を謳歌する産業ブルジョアジー（資本家階級）も、労働者階級の犠牲の上に生まれた。もちろん、割合からいったら少数だ。産業革命による資本主義の確立が、貧富の差を大きくしたのである。

では、対外的にはどうだっただろうか？　十六世紀からスペイン・ポルトガル中心に、中・南米で植民地収奪が行なわれてきたわけであるが、十七世紀になると、イギリス・オランダ・フランスを中心とする奴隷貿易が盛んとなった。

これは、国内の工業製品をアフリカに売り、その代価として奴隷を買う。買った奴隷を今度はアメリカ大陸などの大農場の労働力として売り、そこで砂糖やタバコを買って、自国に持ち帰って売るという方法で行なわれた。いわゆる三角貿易である。

イギリスで、この貿易による利潤が産業資本へと転化したことが、他国に先駆けて産業革命が

起こった一因となっている。

奴隷貿易の〝商品〟となった黒人達は、哀れなものだった。アフリカの平和は破壊され、奴隷狩りが行なわれた。そして、奴隷海岸などと勝手にヨーロッパ人によって名付けられた港から、船にぎゅうぎゅう詰めにされて送られていくのである。〝輸送期間〟は六週間～二十週間であったそうだが、これは天候次第。約三分の一はこの期間に、病気・自殺・懲罰によって死んでいったといわれる。かろうじて生きたまま港に着いた奴隷達にも、苛酷な運命が待ち受けていたということは言うまでもなかろう。それだけでなく、彼らの悲運は、その子孫にまで及んでいくのである。この奴隷達も、イギリスが自国の発展のために犠牲としてきた存在だったのだ。

ちなみに、他国を含めた全奴隷貿易を通じて、一億人近い黒人が、彼らの故郷アフリカから連れ去られたと考えられている（参考＝『新講 世界史』）。

イギリスの情け容赦ない後進国利用は、その後、一層その度合いを強める。各国の間に展開された激しい植民地争奪戦で、圧倒的な勝利を収めることによって、イギリスは多数の植民地を支配するに至った。特に、十八世紀後半からイギリスで産業革命が進行したことが、原料供給地とイギリス製品の市場としての役割を植民地に求めるという方向へと向かわせる。その成功によって、イギリスは「世界の工場」と呼ばれるほどの経済大国にのし上がったのである。しかし、この産業革命の発展に伴う植民地の拡大、これがまた、植民地の文化や産業構造を破壊していくの

である。

その代表的な例として、イギリス―インド―中国間で行なわれた三角貿易が有名である。これは、中国の茶をイギリスに、イギリス製品をインドに、インドのアヘンを中国にという構造で成り立っていた。当時、イギリスで喫茶が流行していたのだが、茶の輸入の代価として多額の銀を独立国である中国に支払うのを押さえたかったイギリスは、インドで強制的に作らせたアヘンを中国に密輸することを考え出した。イギリスの思惑はうまく当たり、密輸量は急速に増え、銀は逆にイギリスに流れ込むようになったのである。中国では、財政悪化・アヘン中毒患者の急増に悩まされることとなった。

これが原因となって、アヘン戦争が中国―イギリス間に起こるのであるが、勝利したのはもちろんイギリスであり、講和条約等を通じて中国を半植民地化してしまうのだ。現在日本人旅行者に人気の香港（ホンコン）も、このときイギリスが中国から〝奪い取った〟戦利品である。

◉◉〝赤い獣〟とは……

これまでに述べてきたことなどを通じて、イギリスが悪いカルマを積み続けたことは間違いない。それは、日本の場合とは比べものにならないほどの量だろう。それなのに、いまだ何の清算も受けずに存続している。カルマの理論で、そんなことがあり得るはずがないではないか。必ず、

日本に原爆が落とされたという以上に、恐ろしいカルマの清算を受けるべきときがやってくる。すなわち〝さばき〟である。それが、これからの預言に示されているのだと考えられよう。

『御使は、わたしを御霊に感じたまま、荒野へ連れて行った。わたしは、そこでひとりの女が赤い獣に乗っているのを見た。その獣は神を汚すかずかずの名でおおわれ、また、それに七つの頭と十の角とがあった。この女は紫と赤の衣をまとい、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものと自分の姦淫の汚れとで満ちている金の杯を手に持ち、その額には、一つの名がしるされていた。それは奥義であって、「大いなるバビロン、淫婦どもと地の憎むべきものらとの母」というのであった。わたしは、この女が聖徒の血とイエスの証人の血に酔いしれているのを見た。』（一七・三～六節）

このイギリスの象徴としての女には、読んでみればわかるように、何とも言い難いほどの俗悪なる形容がなされている。イギリスの歴史をひもとくことによって、それらの意味はおのずと理解されよう。

まず、〝荒野〟であるが、これは精神的に殺伐（さつばつ）とした状態が表わされているものと思われる。その中にいるのが、取りも直さずイギリスなのだ。

イギリス（女）は赤い獣に乗っていた。その獣には七つの頭と十の角とがあった。御使はヨハネに説明して言う。

【七つの頭は、この女のすわっている七つの山であり、また、七人の王のことである。そのうち五人はすでに倒れ、ひとりは今おり、もうひとりは、まだきていない。それが来れば、しばらくの間だけおることになっている。昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八のものであるが、またそれは、かの七人の中のひとりであって、ついには滅びに至るものである。あなたの見た十の角は、十人の王のことであって、彼らはまだ国を受けてはいないが、獣と共に、一時だけ王としての権威を受ける。】（九～一二節）

と。

「このように説明してくれてても、ますます何を言っているのだか、わからなくなってしまうような感じですね。本当に〝赤い獣〟〝七つの頭〟〝十の角〟というのは何なんでしょう？」

「いや、私にはこれらが何の象徴であるのか今はっきりとわかったよ、M大師。」

「ええ？」

「これは実に明確な預言だ。既に歴史上成就していることも、そしてハルマゲドン以降に成就す

るに違いないことも含まれている。では、M大師、最初にヨーロッパ大陸の出っ張り、つまり半島となっているところを列挙してくれないか。」

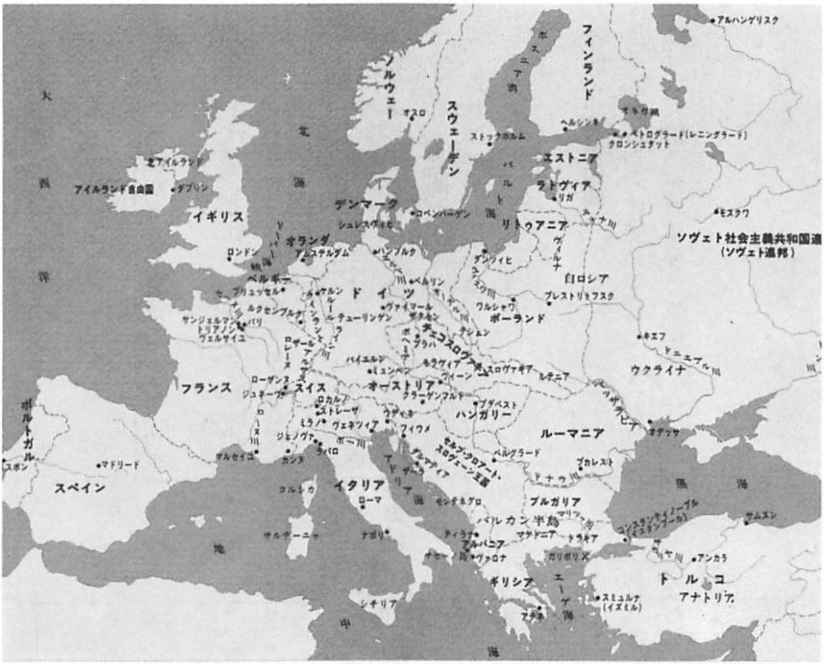
「わかりました。スペインのイベリア半島、イタリアのイタリア半島、ギリシャのペロポネソス半島、ブルガリアのバルカン半島、フランスのブルターニュ半島、デンマークのユトラント半島、スウェーデン・ノルウェーのスカンジナビア半島――主な半島としてはこの七つです。あ、尊師、七つですよ。では、七つの頭というのは……！」

「そのとおり。女が乗っている赤い獣とはヨーロッパ大陸のことであり、その七つの頭とは七つの半島のことなんだ。十七世紀以降、イギリスは植民地化、産業革命などを通じて、世界の政治・経済のリーダーであり続けた。その頃の世界といったら、ヨーロッパ中心であるから、ヨーロッパ大陸に乗っていると表現したとしても、きわめて妥当だ。」

「本当にそうですね。では七人の王というのが、そこに栄えた国を指しているということになりますか。」

「そうなるね。ただ、〝その七つの半島の上に栄えた〟という限定はしなくてもよいと思うよ。ヨーロッパ大陸全体を一つのエリアと見ているわけだから、その中で興亡した国々としていいだろう。」

「尊師、ちょっとお聞きしたいのですが。」


フィンランド
ノルウェー
スウェーデン
エストニア
ラトヴィア
リトゥアニア
デンマーク
イギリス
オランダ
ベルギー
ドイツ
ポーランド
白ロシア
ソヴェト社会主義共和国連
(ソヴェト連邦)
ウクライナ
フランス
スイス
オーストリア
ハンガリー
ルーマニア
チェコスロヴァキア
ポルトガル
スペイン
イタリア
ブルガリア
ギリシア
トルコ
アナトリア
アイルランド自由国
ロンドン
パリ
ベルリン
ワルシャワ
モスクワ
キエフ
オデッサ
プラハ
ウィーン
ブダペスト
ベルグラード
ブカレスト
ローマ
マドリード
アテネ
オスロ
ストックホルム
ヘルシンキ
リガ
ダブリン
コペンハーゲン
ハンブルク
アムステルダム
ブリュッセル
ルクセンブルク
ミュンヘン
ジュネーヴ
ミラノ
ヴェネツィア
ナポリ
アンカラ
アルハンゲリスク
バルカン半島
黒海
大西洋
北海
地中海

「何だ、K大師?」
「文章上、そういう取り方に無理があるのではないか、と思いまして。」
「どこが?」
「はい、あの、ここなんですけど。これだと、〝七つの頭〟イコール〝七つの王〟という感じに受け取れるんです。だから、七つの半島上の国でなければならないんじゃないのでしょうか?」
「M大師もそう思うか?」
「そうですねぇ。文章ではそうなっていますが、いつも最終的には尊師のお言葉が正しいということを思い知らされてきていますから、尊師のお考えをそのまま採った方が安全でしょうね。何しろ、優れた直感というものがおありですから。」
「まさに直感なんだよ、これは。それに私は、文章を百パーセント信じているわけじゃない。預言のもととなっているアストラル・ヴィジョンには、ズレがあるものであるし。」

◉◉驚異の適中率——尊師の予言の輪郭

「予言といえば、天皇崩御の日が、尊師の予言していた日とピタリ一致しましたね。K大師、確か九月の段階で、尊師は『天皇の死の発表は新年の土日を利用して行なわれる』とおっしゃってましたよね。」

「そうなんですよ。だから、ニュースを聞いたときは、前もって決まっていたことが起こった、という印象でしたね。尊師、尊師が前から言われていたように、実際の天皇の死は昨年中のことで、それが秘されていたんでしょうか？」

「私の直感ではそういうことになっている。」

「『マハーヤーナ』NO16の『麻原尊師の予言を解明する』という記事ですね、尊師の予言は九五パーセントの確率で現実化していると検証されていましたけど、この適中率は驚異的なものですね。」

「九五パーセントか……。じゃあ、このハズレた五パーセントは、アストラル・ヴィジョンのズレを、受け取り側である私が修正できなかったために起こったと言えるね。でも、もうじき一〇〇パーセントの適中率になるよ。シャクティーパットをしなくなって、エネルギーが回復してきているから。」

『一九八九年以降にする予言は百発百中となる。』

これは一九八七年六月に予言していたことであったが、奇しくも私以外にシャクティーパットのできる大師が誕生し、私はシャクティーパットをしなくなった。そのため、エネルギーは充実し、直感や予言も、とみに冴えてきているのである。一九八九年以降、つまり今後の予言は、思っ

たとおり百発百中となることは間違いないだろう。

予言は、たいていはセミナーでの説法中に発表されている。そして、一部は側近に語ったことだ。また、『マハーヤーナ』に私が『大宇宙占星学』を連載し始めてから、その欄に書いた予言は膨大な数であろう。それらの予言を、編集部が丹念に調べてくれていたのだという。さぞ大変な作業だったことだろう。この中から、どれだけ私自身、自分の直感を信頼し予言として発表しているのか、ということをご理解いただきたく、参考のために一部その記事を引用させていただこう。

『「今年の終わり頃に、三原山が爆発するぞ。」

一九八六年三月、本栖湖での修行中におっしゃった、麻原尊師の言葉は現実化した。予言適中である。

八六年十一月十五日、三原山は噴火した。地球創世を思わせるマグマの壮観に、観光客は集い酔いしれた。だが、人間の愚かさをあざ笑うかのように、十一月二十一日三原山は大噴火を起こし、島民は避難を余儀なくされたのだ。そうした光景は、いまだ私達の記憶に新しいところである。

「三原山は再噴火するよ。」

翌八七年十一月十六日、やはり尊師のお言葉どおり三原山は再噴火した。幸いにも、この再噴

火が島民に及ぼす影響は少なく、私達は胸をなで下ろしたものだが、尊師の予言の正確さには、戦慄を覚えざるを得なかった。

麻原尊師の予言は、続々と適中した。私達はその度に驚き、尊師への「信」を強めていくのだった。

すぐ現実化した予言の一つに、八七年夏の干ばつについての予言がある。これは、八七年四月から五月にかけての、秩父で行なわれた「短期集中セミナー」の際に、尊師が語られたものである。

「今年は、干ばつがあるよ。」

その言葉どおり、八七年の夏は、気象庁が〝梅雨入り宣言〟をしても一向に雨が降らないという事態になったのだ。

さらに、尊師はこう続けられた。「しばらくの間、〝火の星〟の配置が悪い。暑さに気をつけなくてはね。」

これも適中した。八七年七月下旬、関東地方では日射病・熱射病で倒れる人が続出したのだ。

為替相場の予言も、目を見張るものがある。八七年五月の秩父のセミナーにおいて、尊師はこうおっしゃった。

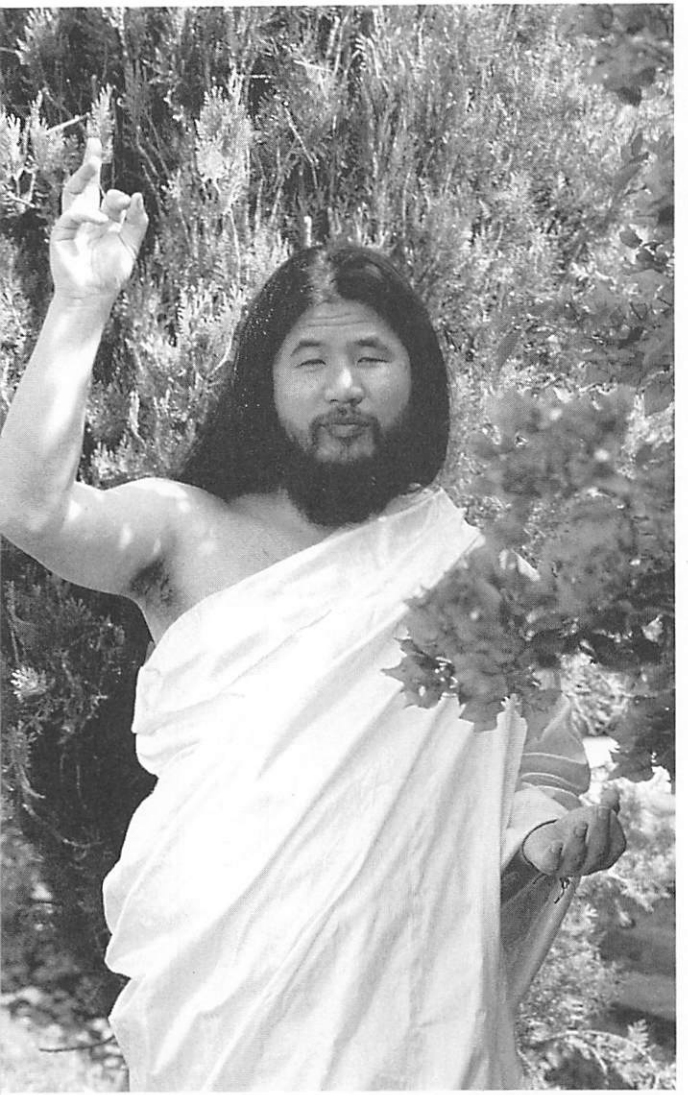
「一九九〇年には、一ドル一〇〇円台になるだろう。」

これは、奇異な印象を与えた。なぜなら、このときの円相場は一ドル一四〇円台であり、相場は安定するだろうといわれていた時期だったからである。つまり、一〇〇円という数字は程遠いものに思われたのだ。しかし、八八年十月現在、一ドルは一二五円前後を推移し、その見解は大勢を占めるものとなっている。

さらに、八七年十月には《トワイライトゾーン》一月号（十二月発売）発表の原稿の中で、「八八年は一二〇円台に突入する」と予言なさっているが、原稿執筆時に一四〇円台を推移していた円相場は、八七年十二月十一日に早くも一二八円を記録したのである。全く商社にお勤めの方には、うらやましいほどの能力だ。」

その他の適中例――昨年分（『大宇宙占星学』より）

・東京都東部地震。これは要注意日までもが一致。
・伊豆半島東方沖群発地震。
・広島、島根の集中豪雨。千葉の大雨。中国の集中豪雨。
・微弱な地震の続発。
・六～八月の航空機事故の続発。
・七～八月の船舶の事故の続発。



なお、念のため付け加えておくと、『大宇宙占星学』での予言が秋から全くないのは、私が自分の修行の時間をつくるために休載させていただいているからである。

第八の獣の正体——滅ぼされる大淫婦（だいいんふ）

◉◉ヨーロッパで興亡した七つの帝国

さて、話をもとに戻さなくては——。このような私の直感を頼りに、七つの国はヨーロッパ全体で興亡した国として、M大師に調べてもらった。その結果、次の国々ではないかということになったのである。帝国——つまり、強大だったというだけでなく、他の国々を侵略した国々が、ちょうど現在までに六つ。そのうちの五つが滅亡、一つが存続しているのだ。『黙示録』の預言そのままである。

1. ビザンチン帝国（東ローマ帝国）
2. 神聖ローマ帝国
3. スペイン王国
4. フランス帝国
5. イギリス帝国

6．ドイツ帝国
7．（まだ誕生していない）＝もうひとりは、まだきていない。

このうち、イギリス帝国が今も国として存続しているのだ。私が、ローマ帝国とフランク王国を除外したのは、ローマ帝国の場合、その成立は紀元前三世紀でヨハネ以前だったこと、フランク王国の場合は、フランスの前身となる過渡期の王国であったことからである。

それでは、これから誕生するという第七の国とは何であろうか？　私は、もはや、単独で新しい国が誕生する可能性はないと考える。それはどういうことかというと、いわゆる連合国としてしか勢力を持つことができないのではないかということだ。ヨーロッパに連合国ができると私が考える理由は、ヨーロッパ共同体（EC）という基盤が既に存在しているからである。

そこで、私は次のような条件を考慮して、該当すると思われる国をピックアップしてみた。

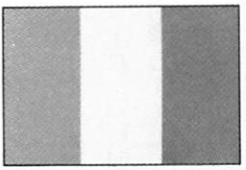
①主にEC加盟国である。
②国旗に赤色がその象徴として使われている。
③他国に強大な影響力を及ぼし得るほどの国である。
④七つの半島を含む、大陸上に存在している。
⑤西側自由主義国陣営の国である。

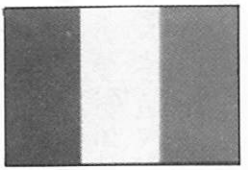
以上の条件から、私は、フランス、イタリア、西ドイツ、ポルトガル、スペイン、スイス、オーストリア、ノルウェー、デンマーク、オランダ、ベルギー、ルクセンブルクの十二カ国を選び出した。このうち、オランダ、ベルギー、ルクセンブルクの三国はベネルクス三国と呼ばれる。そこで、これを一国と数えると、合計で十カ国となる。この十カ国が連合国としてヨーロッパ大陸に君臨することになろう。

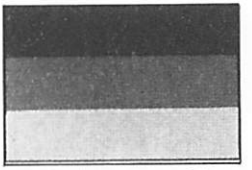
なぜなら、この十カ国が〝赤い獣〟であるからだ。〝十の角〟ということで、この獣が主権を十持っていることがわかる。これまでも〝角〟という言葉が主権を表わしてきていたことは、皆さんも覚えておられよう。そして、〝赤〟という色から、国の象徴である国旗に赤が含まれている十カ国が浮かび上がってくるのである。また、イギリスの国旗は赤を含んでいるが、イギリスは大陸から離れた島国であるということと、大淫婦として登場することから、ここでは除外する。

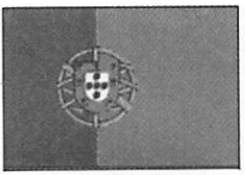
この解釈に至るには、ちょっとした経緯がある。実は、本書を出版する前に、私が監修している『マハーヤーナ』誌上にこの部分を『続・滅亡の日』として一部掲載したのであるが、その際に〝赤い獣〟をEC加盟国の中の十カ国を指すというふうに解釈したのである。ところが、そこで編集上の手違いがあったのか、加盟国に誤りが生じてしまったのである。

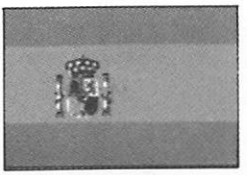
後日、それに気付いた編集部からの連絡で、私はこのことを知った。そのとき、私は直感的にこの箇所の解釈を再度検討し直す必要を感じた。

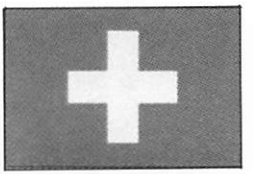

フランス共和国

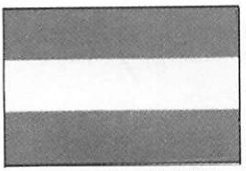

イタリア共和国

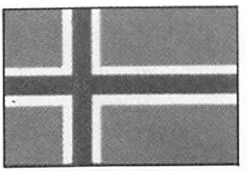

ドイツ連邦共和国

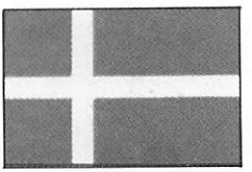

ポルトガル共和国

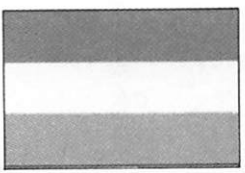

スペイン

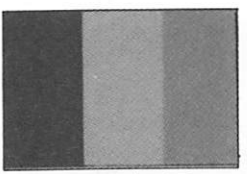

スイス連邦

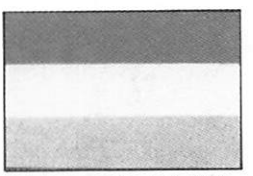

オーストリア共和国


ノルウェー王国


デンマーク王国


オランダ王国


ベルギー王国


ルクセンブルク大公国

ヨーロッパの国であること、国旗に赤が象徴的に使われていること、この基本路線を原則として再考してみたのである。その結果、得られたのがこの解釈だったのである。

さて、『黙示録』では、この第七の国はしばらくの間しか存在しないとしている。そして、『昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八のものであるが、またそれは、かの七人の中のひとりであって、ついには滅びに至るものである』とされる第八の国が、一時だけ先に挙げた十カ国と共に王となるのだという。また、十カ国が『自分たちの力と権威とを獣に与える』のだとも書かれている。

この第八の国はいったい何であろうか。他の国が〝王〟と表現されているのに対し、この国は〝獣〟とされているのだ。それも、過去の王の中の一人であると。

◉◉ナチス系帝国の復活

ここで、大胆な推測に挑んでみたい。私はこの謎の第八の国が、ドイツ・ナチスの残党の流れをくむグループを中心として形成されるのではないかと思うのである。私がそう推測する根拠を挙げるならば、ナチスがあのまま滅びるわけがないからである。

まず、ナチスは海に陸に空に、最新兵器を開発してきたという頭脳を持っていた。その性能は、第二次世界大戦時の連合国側に比べて、ケタが違うほど優れていたといわれるほどである。

もし、

「優れた最新兵器を持っていながら、どうして負けたんだ？」

と聞かれたなら、私は、

「わざと負けた形跡がある。」

と答えるであろう。ナチスの総統ヒトラーは、スターリングラードの戦い（一九四二年十一月～四三年一月）前後から、現実を無視した異常とも言える指令を出し、敗戦を重ねていったとされている。これは、勝てるはずの戦いにおいても、自ら敗戦を演じていたのだとも受け取れるではないか。また、自殺したとされる彼の遺体も、はっきりと彼だと確認されたわけではなく、その死を疑問視する向きもあるのだ。

だったら、なぜ負けなければならなかったのか？　それは、『滅亡の日』でも触れているように、彼には未来予知の力があったからである。彼は世界の歴史の流れを読み、そのシナリオどおりに一人の登場人物としての役割を演じようとしたのだ。そして、その一方で、体力・知力ともに普通の人間よりはるかに優れた若者を選び出し、超エリート集団の養成を手掛けていたという史実もある。

しかも、彼は『今世紀末の大破局が〝救いの超人や神人〟を生み出す』と予言している。彼は、ナチス系統から〝救いの超人や神人〟が生まれると信じていたのだろう。彼が育てた超エリート

集団の子供や孫が、その役を務めるのだと。

だが、『黙示録』はその可能性を冷酷にも否定する。『ついには滅びに至るものである』と。ヒトラーの遠大なる計画は、ハルマゲドン後、ナチス系帝国を誕生させるものの、ここに至って挫折するらしい。果たして、これからの歴史はこの推測どおりの展開を見せるのかどうか、興味あるところである。

なお、『黙示録』では、『彼らは小羊に戦いをいどんでくるが、小羊は、主の主、王の王であるから、彼らにうち勝つ。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る』と預言されている。これは、小羊側（これもよく出てくるように救済者の象徴である）がナチス系帝国と〝ヨーロッパ十カ国〟を打ち破り、最終的勝利を得るという意味である。すなわち、こちらの方が救いの超人、神人となるということだ。

◉◉『わが闘争』――甦るヒトラーのイデオロギー

私が第八の国について書いた数日後のこと、偶然にも西ドイツから驚くべき情報が入った。情報提供者は、オウム・西ドイツ支部開設のため、ボンに行っているティローパ大師である。ぜひともここに付け加えておきたい。

西ドイツでは、日本の場合と同じように、第二次世界大戦後の教育で、それ以前の帝国主義的

イデオロギーは完全に否定されてきた。特に、ドイツ帝国主義の象徴たる、ヒトラー否定という色彩が強い。だから、戦争を知らない世代は、教育によってアンチ・ヒトラーに育て上げられているとみてよい。

私が、以上のことを前提として皆さんにお知らせしたいというのは、次のことである。

ヒトラーは、『わが闘争』という本を遺している。これには、ヒトラーの世界観、社会批判、ナチスの政策などについて書かれており、ゲルマン民族の大帝国を成立させることにまで言い及んでいる。敗戦以前の一九四三年までに九八四万部が売れた（参考＝『日本大百科全書』）というから、大ベストセラー・ロングセラーだったわけだ。ちなみに、教育レベルが高まったといわれる現代日本でさえ、十万部程度売れればベストセラーに数えられているのだから、どれだけ彼の著書が大衆の支持を受けて人気を得たかがご理解いただけよう。

ところが、これは戦後処理の一環としてだと思われるが、『わが闘争』は発禁処分とされた。戦争に導いたイデオロギーが、ぎっしり詰まっているとなれば当然である。そして、因縁めいているが、その発禁処分の期限が切れるのが、なんと一九九九年（!）なのだという。

発禁処分の解けたこの年、アンチ・ヒトラーの世代が初めてこれを読んだとしたら？　ヒトラーのナチス・イデオロギーに共鳴する人間が続出する可能性を否定することはできまい。しかも、一九九九年にはハルマゲドンが勃発し、社会情勢が大混乱に陥っていることが予想されるのだ。

ナチス・イデオロギーに救いを求めるようになるかもしれない。

また、現代でも昔を知るドイツ人がよく、

「今もヒトラーが生きていたら、こんなに失業者が増えなかっただろうに……。」

などと、昔日のドイツを引き合いに出して言うのだそうで、潜在的なヒトラー人気は衰えを見せていないらしい。

これらのことを考えてみると、ハルマゲドン後にナチスが不死鳥のごとく甦るというのも、あながち絵空事だとは思えなくなってくるではないか。ヒトラーの構想には、大ゲルマン帝国の建国が含まれているのだ。

特に私は、発禁処分が一九九九年に解けるということに運命を感じるのである。

◉◉大いなるバビロン——血に酔いしれる女

イギリスは大淫婦と表現されている。この国は前にも触れたように、植民地獲得、その利用、またそれに先立つ産業革命等において、ヨーロッパの確固たるリーダーであった。そして、それは言い換えれば、物質的、経済的豊かさをもって、人間を神々から引き離して堕落させていくことのリーダーであったのである。だからこそ、大淫婦なのだ。

また、姦淫によってできた子供も多くいる。それは、カナダ・アメリカ・オーストラリアをはじ

めとする、もともとイギリスの植民地として成長していった国々である。

ヨーロッパである〝獣〟は、『神を汚すかずの名でおおわれ』ていると描写されているが、これは神の意にそぐわない行為をしてきたということ。彼らの宗教であるキリスト教も、神の意にそぐわないものであったと言えよう。

『この女は紫と赤の衣をまとい、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものと自分の姦淫の汚れとで満ちている金の杯を手に持ち、その額には、一つの名がしるされていた。それは奥義であって、「大いなるバビロン、淫婦どもと地の憎むべきものらとの母」というのであった。わたしは、この女が聖徒の血とイエスの証人の血に酔いしれているのを見た。』（四～六節）

これがヨハネの見たイギリスの姿である。これまでに書いてきたことを念頭に置いて読んでみれば、この描写がだいたい何を指しているのかおわかりになることと思う。

紫と赤の衣――これは色に意味が含まれている。紫とはぶどう酒の色である。『ヨハネの黙示録』では、前にもぶどう酒を悪業（カルマ）に満ちた状態の暗示として使っていたが、ここでも同様に考えてよい。イギリスは悪業に満ちているということである。また、赤は血の色だ。自国の繁栄のために、冷酷な殺りくを繰り広げてきたイギリス――そのイギリスの血塗られた本性を

表わしているのが、この赤なのである。

〝金と宝石と真珠で身を飾り、憎むべきものと自分の姦淫の汚れとで満ちている金の杯〟を手に持っているというのも、イギリスの様子にいかにもぴったりではないか。繁栄によって得た豊かな富に、おごりを極めているのだ。そして、その富は、憎むべきものと自分の姦淫の汚れとで満ちているというのである。バビロンというのは昔の大きな都で、繁栄と享楽に酔いしれていた。そのことから、ここではそのような状態の象徴として使われている。

「あなたの見た水、すなわち、淫婦のすわっている所は、あらゆる民族、群衆、国民、国語である。」（一五節）

という文章があるに及んで、この水がイギリスの周囲の海を示しているだけでなかったことに気付く。

かつて、イギリスには航海法という制定法が存在した。これは、イギリス海運業の発達と貿易保護、そして王室収入を目的とし、必要とあらば他国と戦争を起こしてでも、次々と制海権を手中に収めていったというものである。例えば、当時ヨーロッパの海運を支配していたオランダを航海法によって排斥しようとして、第一次イギリス―オランダ戦争（一六五二～五四）を起こし、

航海法の更新やアフリカへの進出等をめぐって第二次イギリス―オランダ戦争（一六六五～六七）を起こしているのだ。当然、これがイギリス重商主義を支える存在となり、植民地獲得、大英帝国成立というプロセスに多大なる貢献をすることとなった。つまり、イギリスは七つの海を制することによって繁栄していったのだと言えるのである。したがって、イギリスに座られている「あらゆる民族、群衆、国民、国語」と表現されているのが、被支配側、つまり植民地や半植民地というわけだ。

こんなイギリスの行く末についても預言がなされている。「十の角と獣とは、この淫婦を憎み、みじめな者にし、裸にし、彼女の肉を食い、火で焼き尽くすであろう」と。これは、ハルマゲドンの後に誕生するヨーロッパ大陸の例の二カ国が、イギリスをこのようにして滅ぼすであろうと言っているのである。

神の裁きは下される——避けられないカルマの清算

◉◉救済に命を懸けて

「滅亡の日」をもう一度思い出してみよう。その解読によると、人類には最後の大破局ハルマゲドンを含めて、七つの災いがもたらされるのであった。ハルマゲドン以前の六つとは、癌、海洋汚染、放射能汚染、干ばつ、エイズ、そして石油危機である。

この石油危機は、今までに体験してきた二度の石油危機程度のものではない。私はこう書いた。

『石油は限りある資源なのだ。約六〇パーセントは中生代（二億四七〇〇万年前から六五〇〇年前）の地層から産出されており、これは、この気の遠くなるような長い期間をかけて、太古の海や湖の底にたまったプランクトンや藻類から石油が生成されてきたことを示しているのである。したがって、石油がなくなったらもうおしまい。どんなに頑張っても、人間の手で石油を作り出すことなどできないのだ。

アメリカとソ連、そして日本という三国だけで世界石油の半分を消費しているといわれる。こ

のうち、アメリカは自国産の石油では足りずに三五パーセントを輸入、世界最大の石油輸入国となっている。しかも、八四年の資料によると、あと九年でアメリカが自国に有している埋蔵量が底をつくとされる（参考＝『石油連盟・内外石油資料』一九八四年版）。

ソ連は、自国産で需要を満たしているものの、同じようにこのままでは一四年分しか埋蔵量を持たない。日本に至っては、現在でも需要の九九・八パーセントを輸入に頼っている。

それに対して、クウェート二六七年、アブダビ一一一年、サウジアラビア一〇二年、イラク一〇〇年、イラン六一年など、中東の産油国は圧倒的な可採年数を誇っている。

近い将来、石油を全く持たないアメリカ、ソ連、日本等の先進諸国に対して、豊富な石油を有して発言力を増した中東の産油国という構図ができ上がるのは間違いない。』

以上のことは、『ヨハネの黙示録』での第六の災害の解読結果なのである。が、この記述を改めて振り返ってみたとき、私はハッとした。

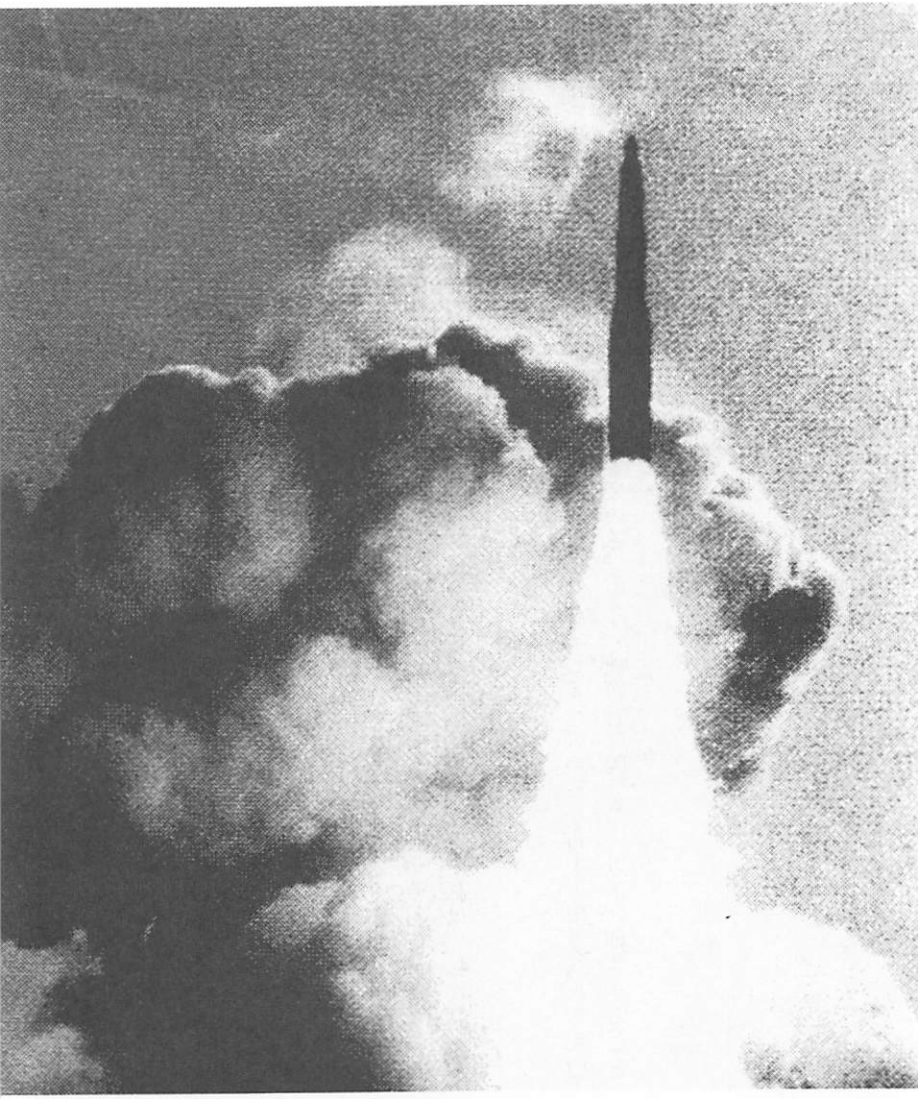
「どうかなさったのですか？」

K大師が声を掛けた。

「私自身、今になって気付いたんだが……。私はこれと同じ予言をしていたことになる。」

「……？」

「編集部が調べてくれていただろう、私の予言を。M大師、『マハーヤーナ』を出してくれ。――ここだ。読んでみてごらん。」
「はい。――一九九九年八月一日前後が運命の分かれ目だ。この日はハルマゲドンが勃発する日なのだ。世界経済が行き詰まり、生きていけないという窮地に陥ったときに、世界的規模の戦争が始まる。アメリカ、ソ連、中近東を中心とするイスラム諸国、日本が、正面切ってぶつかり合う、激しい戦争となるだろう。」
「尊師、アメリカ、ソ連、日本、中近東と、そっくりそのままに一致しているではありませんか！しかも、石油と世界経済というのは密接な関係がありますし。」
「そうなんだよ。今読んでもらった予言は、私がかつて『トワイライトゾーン』という雑誌で発表したものなんだ。この予言は、『大宇宙占星学』による星の配置状態を中心に導き出したものだったが、これほど一致しているとは、ね。」
「恐ろしいくらいですね。未来が決まってしまっているということですからね。」
「M大師、次も読んでみてごらん。」
「――だが、九九年に始まるこの戦争も、しばらくの間、核兵器は使われない。二〇〇三年十月三十日から十一月二十九日までの間に、核兵器による決定的な破局が訪れる。そのピークは十一月二十五日。恐ろしい開発と改良が続けられた、高性能なSDI兵器が、地球の破壊に拍車をか



けることになる。」

「だから、ソ連と中国の滅亡時期を『黙示録』は二〇〇四年としているんだ。中国の場合、中東とソ連、日本、アメリカに完全に挟まれた状態だから、どう考えても被害は大きいはずだしね。」

「これほど運命が決まっているのだとしたら、救済は可能なのかしら？　心配になってきますね。」

「K大師、私がこう言ったことがあるだろう。まず、ハルマゲドンは回避できない。しかし、オウムが頑張って多くの成就者を出すことができれば、その被害を少なくすることができる。ハルマゲドンで死ぬ人々を、世界人口の四分の一に食い止めることができる、と。そして、残りの四分の三の人口の中のどれだけが生き残れるかは、オウムの救済活動次第だと。私は、私に与えられたこの使命に命を懸けているんだよ。」

「それは、未来は努力次第で変化させられる、ということでしょうか？」

「そうだ。ただ、今のところ私の救済計画が完全に遅れてしまっているから――生き残れる人口の割合がだんだん少なくなってきてしまっている。もう、被害者を四分の一以下に押さえることは無理になってしまった。」

◉◉バビロンは倒れた——イギリスの滅亡

『ヨハネの黙示録』によると、この第一七章に書かれているように、ヨーロッパ大陸がハルマゲドン後に残ることになっている。しかし、それもしばらくの間のことで、十の角と獣に象徴される二カ国がイギリスを滅ぼすことになっている。そして、この二カ国もその後に滅びてしまうのだという。

イギリスの滅亡については、次の第一八章で詳しく、また違った角度から語られている。

この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた。彼は力強い声で叫んで言った、「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。そして、それは悪魔の住む所、あらゆる汚れた霊の巣くつ、また、あらゆる汚れた憎むべき鳥の巣くつとなった。すべての国民は、彼女の姦淫に対する激しい怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と姦淫を行い、地上の商人たちは、彼女の極度のぜいたくによって富を得たからである」。

わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた、「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ。彼女の罪は積り積って天に達しており、神はその不義の行いを覚えておられる。彼女がしたとおりに彼女にし

返し、そのしわざに応じて二倍に報復をし、彼女が混ぜて入れた杯の中に、その倍の量を、入れてやれ。彼女が自ら高ぶり、ぜいたくをほしいままにしたので、それに対して、同じほどの苦しみと悲しみとを味わわせてやれ。彼女は心の中で『わたしは女王の位についている者であって、やもめではないのだから、悲しみを知らない』と言っている。それゆえ、さまざまの災害が、死と悲しみとききんとが、一日のうちに彼女を襲い、そして、彼女は火で焼かれてしまう。彼女をさばく主なる神は、力強いかたなのである。彼女と姦淫を行い、ぜいたくをほしいままにしていた地の王たちは、彼女が焼かれる火の煙を見て、彼女のために胸を打って泣き悲しみ、彼女の苦しみに恐れをいだき、遠くに立って言うであろう、『ああ、わざわいだ、大いなる都、不落の都、バビロンは、わざわいだ。おまえに対するさばきは、一瞬にしてきた』。また、地の商人たちも彼女のために泣き悲しむ。もはや、彼らの商品を買う者が、ひとりもないからである。その商品は、金、銀、宝石、真珠、麻布、紫布、絹、緋布、各種の香木、各種の象牙細工、高価な木材、銅、鉄、大理石などの器、肉桂、香料、香、におい油、乳香、ぶどう酒、オリブ油、麦粉、麦、牛、羊、馬、車、奴隷、そして人身などである。おまえの心の喜びであったくだものはなくなり、あらゆるはでな、はなやかな物はおまえから消え去った。それらのものはもはや見られない。これらの品々を売って、彼女から富を得た商人は、彼女の苦しみに恐れをいだいて遠くに立ち、泣き悲しんで言う、『ああ、わざわいだ、麻布と紫布と緋布をまと

い、金や宝石や真珠で身を飾っていた大いなる都は、わざわいだ。これほどの富が、一瞬にして無に帰してしまうとは」。また、すべての船長、航海者、水夫、すべて海で働いている人たちは、遠くに立ち、彼女が焼かれる火の煙を見て、叫んで言う、「これほどの大いなる都は、どこにあろう」。彼らは頭にちりをかぶり、泣き悲しんで叫ぶ、「ああ、わざわいだ、この大いなる都は、わざわいだ。そのおごりによって、海に舟を持つすべての人が富を得ていたのに、この都も一瞬にして無に帰してしまった」。天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。この都について大いに喜べ。神は、あなたがたのために、この都をさばかれたのである」。

すると、ひとりの力強い御使が、大きなひきうすのような石を持ちあげ、それを海に投げ込んで言った、「大いなる都バビロンは、このように激しく打ち倒され、そして、全く姿を消してしまう。また、おまえの中では、立琴をひく者、歌を歌う者、笛を吹く者、ラッパを吹き鳴らす者の楽の音は全く聞かれず、あらゆる仕事の職人たちも全く姿を消し、また、ひきうすの音も、全く聞かれない。また、おまえの中では、あかりもともされず、花婿、花嫁の声も聞かれない。というのは、おまえの商人たちは地上で勢力を張る者となり、すべての国民はおまえのまじないでだまされ、また、預言者や聖徒の血、さらに、地上で殺されたすべての者の血が、この都で流されたからである」。

（第一八章）

御使が、『倒れた、大いなるバビロンは倒れた』と力強い声で叫んで言った。バビロンがイギリスを指している言葉で、これからどのようにイギリスが最期の瞬間を迎えるのかが預言されているのだ。

また、『わたしの民よ、彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ』と、天からの声が、神に帰依している人々にイギリスを脱出するように言っている。皆さんの中で、この頃イギリスに滞在している人があったなら、速やかに国外に出るのが賢明なようだ。

『彼女がしたとおりに彼女にし返し、そのしわざに応じて二倍に報復をし、彼女が混ぜて入れた杯の中に、その倍の量を、入れてやれ。彼女が自ら高ぶり、ぜいたくをほしいままにしたので、それに対して、同じほどの苦しみと悲しみとを味わわせてやれ。』（六～七節）

と、ここで再びカルマの法則が出てきた。『滅亡の日』でも書いたが、神は人間の悪業が満ちたときに、それを清算させるために裁きを行なうのである。イギリスもカルマによって裁かれるのだということだ。

◉◉血の歴史が生み出した女王エリザベス

次に、イギリス女王・エリザベス一世の有名な言葉をほうふつとさせる女の言葉がある。『わたしは女王の位についている者であって、やもめではないのだから、悲しみを知らない』というのである。

エリザベス一世は、二十五歳の一五五八年から一六〇三年に死ぬまで、イギリスの女王であった。若く独身の女王の即位だったので、ヨーロッパ各国の王室からプロポーズが殺到したのも道理である。何となれば、イギリスというまたとない持参金付きの花嫁なのだから。

しかし、怜悧な彼女は長いこと相手の国々をじらして外交に利用した上で、縁談をすべて断る。そのときの言葉が、

「私は国家と結婚しています。」

というもので、イギリス国民を大いに感激させた。これは、女王の位に就いているのだから、やもめではない、と言っているのと同じだろう。しかし、その裏で愛人も何人かいたというのだから、食えない女王である。

ところで、ここで特にこのエリザベス一世を思わせる言葉が出てきたというのにも訳がありそうだ。実は、彼女の治世になって、それまであまりパッとしなかったイギリスが、ヨーロッパの超一流国にのし上がったのだ。これは、彼女の手腕によるところが大きいとされるが、まさに大

英帝国の基礎ができ上がり、植民活動に着手した、イギリスの繁栄と享楽とおごりのスタートだったのである。植民地収奪の拠点となった東インド会社も、このときに設立されている。また、女

王が海上発展への強い関心を持っていたことも、イギリス商人がスペイン商船を襲うという海賊行為を支援していたということも、よく知られている。ひどいことをしていたものである。

イギリス国民には、『良き女王ベス』とか『我らが処女王』などと呼ばれて敬愛の的となり、その一方で他国に対してはなかなか残酷なことをやってのける、この見事な性格と頭脳。M大師はこんなふうに解説してくれた。少々話はそれてしまうが——。

「これは、即位以前の不幸が培った性質じゃないですかねぇ。実の母親アン・ブリンが父親のヘンリー八世によって処刑されたのが、まだ三歳になるかならないかという幼い頃でしたし、このとき嫡子から非嫡子に格下げされています。父親は父親で、離婚を繰り返して、結局六回結婚していますが、うちエリザベスの母親を含めて二人は処刑という形で死んでますからね。」

「まあ、どうしてそんなに処刑されたんですか?」

K大師がびっくりして聞いた。

「もちろん、他の女と結婚したくなって邪魔になったからですよ。それで姦通罪なんかをでっち上げて処刑、という寸法です。だいたいですよ、イギリスがローマ教皇の支配から離れて、イギリス国教会を作ったのはなぜだったと思います? なんと、教皇が最初の離婚を認めなかったからなんですよ。また、父親の後を継いで弟が即位したときも、反逆分子と見られて苦境に陥っていますし、姉の在位中のある時期には、ロンドン塔に幽閉されたりとね、二十五歳以前は大変な

ものだったわけです。」

「でも、同情できないな、私は。そのエリザベス自身、チューダー朝の血を引くメアリ・スチュアートが次期女王となることを恐れて、二十年近く幽閉した挙句処刑しているからね。もっとも、メアリはメアリで、愛人の手下に夫を殺させて、直後にその愛人と結婚したってことで、スコットランド女王の座を追われたというんだから、何とも凄まじい一族だとしか言いようがないね。エリザベスの姉のメアリ一世も、『血の女王』という異名を取ったほどだし。」

「こういう場合、死後の転生は地獄なんでしょうか？」

「殺生が入っているから、やはり地獄のカルマだろう。しかし、これを特殊なケースと考えるのはいけないね。現代の日本だって、地獄のカルマを作って地獄に落ちていく人間はかなりいるはずだ。その代表的な例が堕胎なんだね。まだ、人間の形になっていないからとか、自分の都合だけを考えてしまうから堕胎ができるんだろう。ところが、胎児は胎児でちゃんと生命が宿っている。受胎の瞬間からね。このことを忘れてはいけない。実際信徒の中に、こうやってカルマを作ってしまった人もいるわけだけれども、みんなこのカルマを切るのには苦労している。でも、修行できる人はまだいい方なんだ。少しずつでもカルマを切っていけるから。真理に目覚めていない凡夫は大変だ。その殺生のカルマによって、地獄へと生まれ変わってしまうのだから。」

◉◉そして、すべては海に沈む……

さて、話をもとに戻そう。このように、エリザベス一世の代に新しいスタートをし、カルマを積みつつ大英帝国を築いていったイギリスであるからこそ、神の怒りによって大きなカルマが返ってくるのだ。『さまざまな災害が、死と悲しみときんとが、一日のうちに彼女を襲い、そして彼女は火で焼かれてしまう』となっているから、イギリスはあっと言う間に滅びていくことが推察される。核爆弾による一瞬のことだと断定してよいだろう。

このとき、『彼女と姦淫を行い、ぜいたくをほしいままにしていた地の王たちは、彼女が焼かれる火の煙を見て、彼女のために胸を打って泣き悲しみ、彼女の苦しみに恐れをいだき、遠くに立って言うであろう。「ああ、わざわいだ、大いなる都、不落の都、バビロンは、わざわいだ。おまえに対するさばきは、一瞬にしてきた」。』とされているが、この彼女のために胸を打って悲しむ地の王達とは、イギリスから派生した、アメリカ・カナダ・オーストラリア等の国々であろうか。

次の『地の商人たち』とは、時代が倒錯するが、イギリスの大英帝国時代の商人達である。アストラル世界の多重性を考えれば、これは別に不自然なことではない。

大英帝国は、第一次世界大戦まで世界一の貿易国だったのである。これまでに何回も書いてきたように、広大な植民地を支配、利用して、原材料を植民地から輸入、自国の工業製品を輸出す

るという貿易によって、「世界の工場」としての絶頂期を満喫していたのだ。経済も豊かになるので、金・銀・宝石等のぜいたく品も集中するだろう。あらゆる貿易を通じて莫大な富を得ていたのが、この商人達だったのである。

『すべての船長、航海者、水夫、すべて海で働いている人たち』も同じように泣き悲しむ。海運業も海上貿易での恩恵にあずかっていたからである。十九世紀末の時点で、やはりイギリスが世界の商船の過半数を支配していたというので、この海で働く人々というのもイギリス人であろうと思われるのだが……。

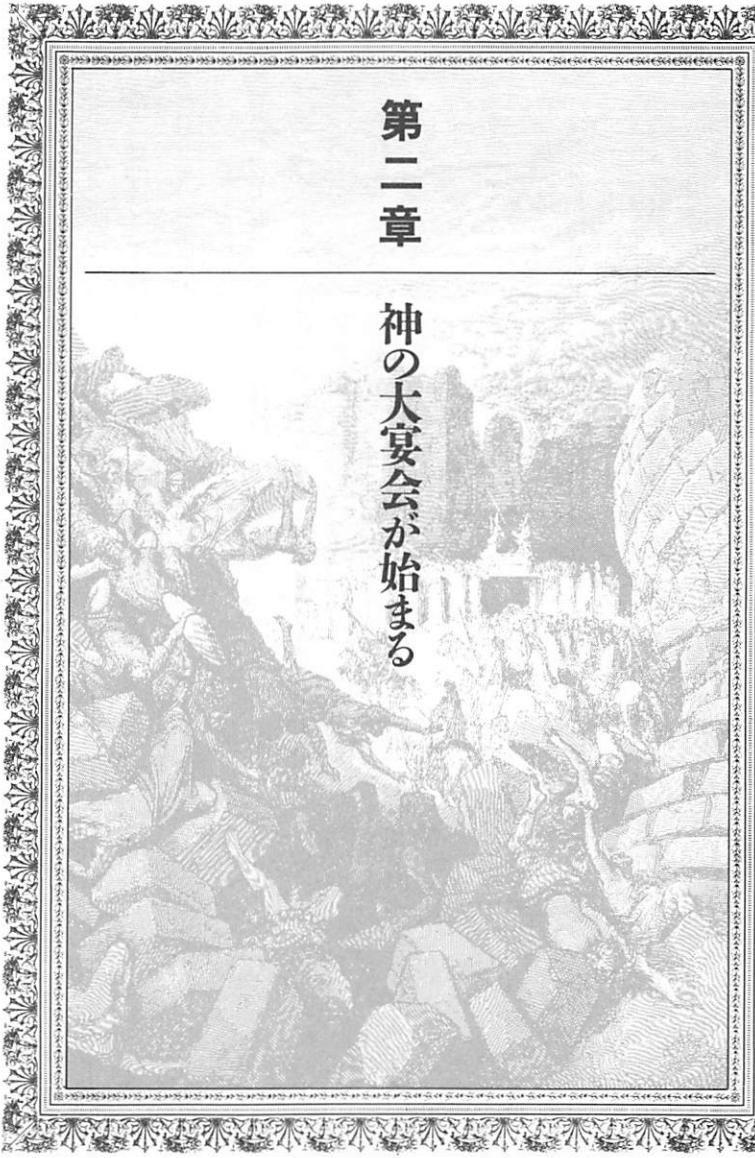
いずれにしろ、海運業が特に取り上げられていることによって、この預言が、大貿易国であり、かつ海に囲まれた島国であるイギリスを指しているということが、改めて確認できるのである。

核爆弾によって破壊されたイギリスは、地震によって海に沈んでいってしまうらしい。それは、『ひとりの力強い御使が、大きなひきうすのような石を持ちあげ、それを海に投げ込んで言った、「大いなる都バビロンは、このように激しく打ち倒され、そして、全く姿を消してしまう。」』という記述からである。

そうして、立琴や歌・笛・ラッパなど、音楽を楽しむことのできる上層部も、あらゆる仕事に従事する労働者階級も、また穀類を生産する農民もいなくなってしまう。あかりも、花婿、花嫁も……である。

第二章

神の大宴会が始まる



真理はここに！——奏でられる神々の旋律

◉◉王の王、主の主——裁きの方は白い馬に乗って

この後、わたしは天の大群衆が大声で唱えるような声を聞いた、

「ハレルヤ、救と栄光と力とは、
われらの神のものであり、
そのさばきは、真実で正しい。
神は、姦淫で地を汚した大淫婦をさばき、
神の僕たちの血の報復を
彼女になさったからである」。

再び声があって、「ハレルヤ、彼女が焼かれる火の煙は、世々限りなく立ちのぼる」と言った。すると、二十四人の長老と四つの生き物とがひれ伏し、御座にいます神を拝して言った、

「アァメン、ハレルヤ」。その時、御座から声が出て言った、

「すべての神の僕たちよ、神をおそれる者たちよ。

小さき者も大いなる者も、
共に、われらの神をさんびせよ」。
わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものを聞いた。それはこう言った、
「ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、
王なる支配者であられる。
わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。
小羊の婚姻の時がきて、
花嫁はその用意をしたからである。
彼女は、光り輝く、
汚れのない麻布の衣を着ることを許された。
この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである」。
それから、御使(みつかい)はわたしに言った、「書きしるせ。小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである」。またわたしに言った、「これらは、神の真実の言葉である」。そこで、わたしは彼の足もとにひれ伏して、彼を拝そうとした。すると、彼は言った、「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたと同じ僕仲間であり、またイエスのあかしびとであるあなたの兄弟たちと同

じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい。イエスのあかしは、すなわち預言の霊である」。

またわたしが見ていると、天が開かれ、見よ、そこに白い馬がいた。それに乗っているかたは、「忠実で真実な者」と呼ばれ、義によってさばき、また、戦うかたである。その目は燃える炎であり、その頭には多くの冠があった。また、彼以外にはだれも知らない名がその身にしるされていた。彼は血染めの衣をまとい、その名は「神の言」と呼ばれた。そして、天の軍勢が、純白で、汚れのない麻布の衣を着て、白い馬に乗り、彼に従った。その口からは、諸国民を打つために、鋭いつるぎが出ていた。彼は、鉄のつえをもって諸国民を治め、また、全能者なる神の激しい怒りの酒ぶねを踏む。その着物にも、そのももにも、「王の王、主の主」という名がしるされていた。

また見ていると、ひとりの御使が太陽の中に立っていた。彼は、中空を飛んでいるすべての鳥にむかって、大声で叫んだ、「さあ、神の大宴会に集まってこい。そして、王たちの肉、将軍の肉、勇者の肉、馬の肉、馬に乗っている者の肉、また、すべての自由人と奴隷との肉、小さき者と大いなる者との肉をくらえ」。

なお見ていると、獣と地の王たちと彼らの軍勢とが集まり、馬に乗っているかたとその軍勢とに対して、戦いをいどんだ。しかし、獣は捕えられ、また、この獣の前でしるしを行って、獣の刻印を受けた者とその像を拝む者とを惑わしたにせ預言者も、獣と共に捕えられた。そし

て、この両者とも、生きながら、硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた。それ以外の者たちは、馬に乗っておられるかたの口から出るつるぎで切り殺され、その肉を、すべての鳥が飽きるまで食べた。

（第一九章）

◉◉神エホバは存在しない！

イギリスは滅亡した。神が〝獣〟と〝十人の王〟という二つの国を使って、悪業を積もり積もらせたイギリスに、怒りの裁きを下したからである。天からは、天の大群衆の声が聞こえてきた。その声は正しい処置を行なった神を賛美している。

この賛美の声は、文字どおりそのまま受け取って良いのであるが、それに関連してぜひともここに書き記しておきたいことがある。

この賛美の声の中の神という言葉を、神エホバとしている『ヨハネの黙示録』があって、賛美の言葉はこう書かれていた。

「あなた方はヤハを賛美せよ。
全能者なるわたしたちの神エホバは、
王として支配を始められたからである。」

（『聖書』新世界訳）

と。

ところがである。本当はエホバという神は存在しないのだ。「エホバの証人」という宗教団体さえあり、『聖書』にも登場するこの神が存在しない――皆さんもさぞ驚かれることであろう。これからその理由をご説明しよう。

『聖書』に六千回以上もその名が出てくる、ヤハウェという神がいるのだが、『聖書辞典』（日本基督教団出版部）によると、このヤハウェだけは固有の神の名であり、それに対して他のすべての名は二次的なものであるという。私もこのヤハウェが絶対神であり、シヴァ神と同一神であると考えているので、この説を支持するものである。

実は、エホバというのが、このヤハウェを誤読することから生じた間違った名なのだ。この誤読は、宗教改革の頃から広まったそうであるが、間違った名を用いて神を賛美する――これこそ愚の骨頂とは言えまいか。

そもそも、神のおられるアストラル世界は言葉優位の世界で、その言葉そのものが大変重要な意味を持っているのである。したがって、神の名だったら神の名で正しく発音しなくては、何の意味もなさない。いくら心で、「あの神のこと」と念じていたとしても、正しい名を使わない限り、神を称えることにもならないし、届きもしないのだ。

マントラを唱えるのも同じことである。正しく発音して唱えなければ、アストラル世界にマン

トラは届かないし、何の効果もない。だからこそ、私はシッシャや信徒にマントラを伝授するときには、間違いなく伝わるように細心の注意を払っているのである。

もう一度言う。エホバは神々の世界、アストラル世界に存在していないのだ。

今のようなケースを考えても、『黙示録』のような古代の文献が後世に正しく伝わるということは、まず考えられないだろう。写し間違いがあったり、加筆されたりということはありがちなことである。原始仏典である『阿含経』も、後世の加筆と考えられる部分が指摘されるところであるが、その『阿含経』における加筆量を考えると、『ヨハネの黙示録』を読むときも注意を払わなければなるまい。

そのため、私はこれまでにも、真実と思われる文章のみを解読の対象としてきたし、これからもそうしていくつもりである。この点はどうかご了承願いたい。

翻訳の問題にしても同様である。例えば、学生が英語のテストで英文を日本語に訳したとする。どれもがマルを付けられたとしても、必ず一人一人の訳が違っているはずである。直訳する人間もいれば、意訳する人間もいる。単語一つ取ったって、許容範囲の中では、どの日本語に置き換えてもマルである。したがって、訳者によってかなり違った翻訳本ができ上がると考えなくてはならないのだ。これだけ訳には問題がつきまとうものであるというのに、さらに文意が二種類以上に取れるような文章は、もっとややこしくなってしまう。

日本で出版されている『聖書』の中の『ヨハネの黙示録』は英語から訳されたものであり、英語版はギリシャ語からと、訳がいく度かなされているわけである。その中で、どれだけ原典の意味を失ったところがあるであろうか？　これも念頭に入れておかなくてはならない点である。

◉◉「アァメン」――その言葉の真実

「アァメン」という言葉も出てきた。同じく『聖書辞典』によると、ヘブル語の語源は「まことに」「たしかに」「真実に」という意味を持つそうである。そして、儀式において唱和されたとなっている。

また、この言葉がいつ頃から使われ出したのかということを調べてみると、どうも『列王紀上』の頃からであるらしい。紀元前一〇四〇年以降ということになる。その後は『列王紀下』、『ネヘミヤ記』に、その言葉を見いだすことができる。

私は、この「アァメン」という言葉が、インドのヒンドゥー教でいう「オーム（Aum）」からきているのではないか、と思った。「オーム」は紀元前三〇〇〇年頃には既に使われていたらしいので、あり得ないことではなかろう。まず発音が似ている。「オーム」は日本語のカタカナ表記にしてしまうと、最初の一字が〝オ〟になってしまうが、実際には〝オ〟と〝ア〟の中間くらいの発音をするものなのである。

また、「オーム」の意味するところは、宇宙の創造・維持・破壊という宇宙の真実なのだ。そして、「アァメン」と同様に儀式においても唱和するのである。世界の宗教のルーツは、古代インドにあるといってもよいのではないだろうか？ 真理は真理、姿を変えることはないのである。ただし、キリスト教は後世になって神の意思から離れ、欲望に支配された獣の宗教として変遷していくことは、これまでにも解読してきた内容によって明らかとなっている。

「オウム真理教のオウムも、この『オーム』に由来していますよね。宇宙の真理を表わす最上の語を、救済活動の基盤となる組織の名称に選ばれたところに、尊師の決意のほどがうかがわれますね。」

K大師が言った。

「まさにそのとおり。他の多くの宗教のように、未来ヴィジョンや現世利益、死後の世界について喧伝するだけでは無意味だからね。〝実際〟にすべての魂を救済して、永遠の幸福の世界へと導かなければならない。それまで私の使命は完了しないんだよ。もし今生ですべてをやり終えることができなかったとしても、また人間界に生まれ変わって、同じように救済活動を続けるだろうね。」

「その救済活動にしても、特殊な方針であると言えますね。グルである尊師は、正しい道を教え導いてくださいますが、最終目標は個々が修行に精進して解脱することであると。これは、釈迦牟尼の時代の仏教教団にしかなかった活動ではないでしょうか？」

「そういうことになるね。釈迦牟尼は実に多くの人間を解脱させ、絶対自由・絶対幸福・絶対歓

喜の世界へと導いた。それは、現世においては心の安楽を得、肉体を捨てた後はニルヴァーナへと至り、二度とこの苦界に生まれ変わらないというものだ。私もこのように、絶対的な幸福に至るまで救済したとは言えないと思っている。」

◉◉弟子達よ、真理のもとに集え！

「そういう世界については、だれでも修行で超能力がついた時点で、地獄から天界、ニルヴァーナに至るまでアストラル・トリップによって、身をもって体験することができますよね。だから、『尊師の言われていることは本当だったんだ』と知るわけですね。」

「私自身もね、修行中に体験してきているんだよ。自分で体験することによって、真実を知ったんだ。そして、釈迦牟尼も同じだったと断言できるね。例えば、数年前私は地獄の一部を体験した。そのとき、地獄というものが三層の世界に分かれていることを知ったわけなんだね。そして、その世界については、そのときシッシャ達に話したんだ。」

「私も覚えています。確か、三つ層を突き抜けていらしたんでしたね。」

「そうなんだ。地獄がこうなっているなんて、それまで知らなかったし、日本の仏典では、そんなことが書いてあるのはないと思うよ。ところが、チベットのダライ・ラマ法王にお会いする機会があったときに、たまたまチベットに伝わる仏典の話が出てきた。そこの地獄の記述に、地獄

が三層に分かれているというところがあったんだよ。これはもう想像の世界じゃない。体験した者しか知らない世界なんだ。」

「だから、釈迦牟尼もアストラル体験をしていると。」

「そう。またね、山の中で瞑想修行しているラマ（チベットの高僧）にお会いしたときのことだ。私は自分が修行中に見たヴィジョンの説明をした。どういう光が見えたとか、最初に過去世を思い出せる能力を得た瞬間、私は光に飛び込んでいたとか……。そうしたらね、そういうことはみんなチベットの経典に書かれている、と言うんだ。もうびっくりしたよ。だって、それまでだれにも教わることができなかったから、自分一人で修行してきただろう？　だから、確信のない不安なところもあったんだ。それが、チベットの経典には書かれているというのだからね。このとき、心から『チベットの経典を日本語に訳したい！』って思った。」

「そうそう、それでシッシャの一人にチベット語の勉強をさせようと、実際に留学させたりしたんでしたね。シッシャが慣れない生活で病気になってしまって、間もなく帰国せざるを得なくなってしまいましたが。」

「そうしてしばらくブランクがあったが、数カ月前に元シッシャのH君が、何年かかるかわからない翻訳に従事する決心をして、インドのブッダガヤ（四大聖地の一つ。釈迦牟尼が悟りを開いたところ）へと渡った。今、私の前生のグルの一人である、チベット仏教カギュ派のカール・リ

ンポチェのもとで頑張っているはずだ。」
「彼の翻訳した経典が、日本に紹介される日が楽しみですね。でも、ひょっとしたら、もう既に尊師が体験から公表していることが書かれているだけかもしれないですけど。」
「さあ、どうなるかな？　でも、チベット仏教には伝統の重みというものがあるから、案外日本の宗教界に一石を投じることになるかもしれないよ。」
「あ、今思い出しましたけど、日本の仏教の研究をしたチベット僧が、『日本には中くらいのレベルの仏教までしか伝わっていない』って言ったことがありましたね。」
「確かにそういうこともあったね。チベットはインドのすぐ隣だし、聖パドマサンバヴァみたいに高レベルの修行者が、仏教あるいは密教系仏教をインドからチベットへと持ち込んでいる。この利点は、仏典の内容を実際に体験しているから、正しく理解し、正しく伝えるということができるところだ。日本の場合は、ずっと離れているしねぇ、やはり真の修行者の存在もなかったんだろうね。」
「そういう意味においても、修行によって最終解脱を果たした尊師が、真理を流布することの重要性がわかりますね。それにしても、尊師のようにご自分の独学で修行して解脱し、真理を会得するというのは、本当に大変なことだと思います。私達は尊師が言われたことを実践していけば、必ず解脱できるのですが。昨年も尊師が予言されていたように、四十名以上の解脱者が誕生しま

したし。今年も尊師の予言どおり、百五十名は解脱するんじゃないでしょうか？」

「私の場合はね、前生で既に最終解脱をしていたということ、それとシヴァ神が私のグルとしてアストラル世界にいらしたということが大きな力となったんだよ。そして、私は今もシヴァ神の意思によって救済活動を続けているというわけだ。しかし、今のところ救済活動が遅れ気味で、私も気にしている。早く私の前生の優秀な弟子達が使命に気付いて私のもとに集まってくれたら、この遅れを取り戻せるんだろうと確信しているんだが。私の前生の弟子達の多くは、まだ現世に執着していて、自分の生まれた意味に気付いていないらしい。前生の修行者だったら、現世の生活が性に合わないだろうに――。」

小羊の婚姻の時——天の軍勢は戦いに備えて

◉◉シャクティーを得た小羊——転輪聖王の登場

さて、次からがいよいよ面白くなってくる。その後始まる善と悪の戦い、つまり神・超人類対外道・凡夫の戦いに備えて、小羊（救済者）に力が与えられる場面である。

「わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。
小羊の婚姻の時がきて、
花嫁はその用意をしたからである。」（七節）

タントラは、シヴァ神とカーリー女神の合一をもって、〈真理・智慧〉と〈力〉の合一としている。この〈力〉は宇宙の根元的な力であって、シャクティーといわれているものだ。

ここで小羊は、結婚と表現される合一によって、〈力〉を得るのである。それまでは、宗教的なもの、つまり〈真理・智慧〉しか備えていなかったのである。そこに〈力〉が加わり、悪との

最後の戦いに臨んでいくわけだ。

この戦いは、アストラル世界で起こるかのようにヨハネは書いているが、色（現象界）と空（アストラル世界）の同一性を考えれば、この世で起こる戦いであると考えられる。アストラル世界の出来事は、必ず現象界（この世）に降りてきて、この世でも現象化されるのだ。したがって、小羊、つまり救済者は、この世で転輪聖王（てんりんじょうおう）的な統治者になっていくのだろう。転輪聖王とは、宗教的な功徳と力との両方を兼ね備えた、理想的な全世界を統治する王のことである。転輪聖王といえば、釈迦牟尼が誕生したときの話が伝えられている。

シャカ族の浄飯王の王子として生まれた釈迦牟尼は、シッダールタと名付けられた。誕生後間もなく、浄飯王はアシタ仙人というヒマラヤの高名な仙人に、シッダールタの人相を見てもらう。すると、アシタ仙人はシッダールタの顔を見るなり涙を流した。王は驚いて聞く。

「王子に不吉な相があるというのですか？」

アシタ仙人は、首を振って言った。

「この王子は、三十二の偉大な吉相を備えている。王家にあれば、転輪聖王となるだろう。また、出家すれば仏陀（目覚めた人）となり、多くの人々を教え導くだろう。おそらく、仏陀としての道を選ぶことになると思うが……。しかし、この私は王子が仏陀となる前に死んでしまう。仏陀の教えを聞くことのできないその悲しさに、涙が出るのである。」

と。

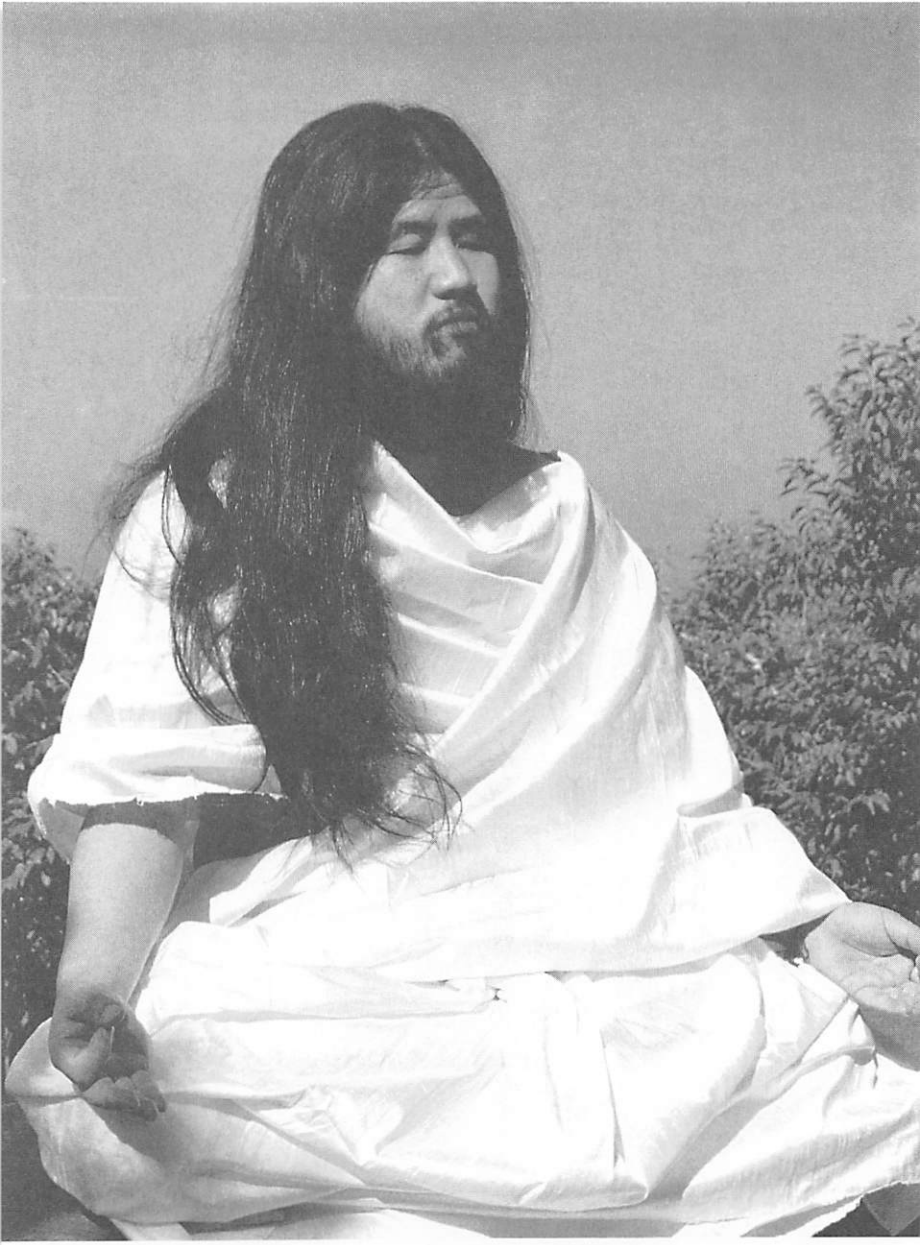
この話に出てくる転輪聖王に、救済者は生まれ変わるのである。〈真理・智慧〉と〈力〉を合わせ持つことによって。

「彼女は、光り輝く、
汚れのない麻布の衣を着ることを許された。
この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである。」（八節）

これまでにも何回か、勝利を得る聖徒の衣が白であると強調されてきた。ここで出てくる衣も白と考えてよいだろう。「汚れのない」とも書かれているし、同じ章で「天の軍勢が、純白で、汚れのない麻布の衣を着て」という表現も出てくる。

そうすると、〝光り輝く白い衣〟を身に着けるということになる。これは、その花嫁に象徴されるシャクティーが白く光り輝いているということだ。当然の描写である。高い世界のクンダリニーは白く光り輝いており、また、〈真理・智慧〉と〈力＝シャクティー〉の合一は、クンダリニー・ヨーガのプロセスに存在するからである。

また、これは救済者が白で表わされる功徳によって力を得るということを暗示してもいる。



『小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである』というのは、その者達が既に救済されたということ、そして、それと共に再びカルマの法則を見ることができるということを言い表わしている。これから神の裁きによって起こる、善と悪の戦い、そしてその真理の結果を見ることができるというのである。

◉◉限りないシヴァ神の恩恵

ヨハネが御使(みつかい)の足もとにひれ伏して彼を拝そうとしたとき、こう言われている。

『そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたと同じ僕(しもべ)仲間であり、またイエスのあかしびとであるあなたの兄弟たちと同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい。』（一〇節）

この御使も良いことを言うものである。人間が拝することのできるのは神、つまり宇宙の絶対神であられるシヴァ神ただお一人なのだ。

「K大師、君が信徒にシャクティーパットを行なうとき、そのエネルギーは自分のエネルギーだと思うか、思わないか？」

「そうですねぇ……。自分のエネルギーだったら、こんなにたくさんのシャクティーパットをす

るほどあるとは思えないし……。どうでしょうか？」

「K大師はシヴァ神系統のエネルギーを使っているんだよ。オウムの修行者は、私も含めてシヴァ神のエネルギーを受け続けている。だから、君がシャクティーパットを行なうときは、シヴァ神からのエネルギーを使っているんだよ。それと同時に、私達が受けているエネルギーも君の方へと流れていってしまう。シャクティーパットで失うエネルギーは膨大なものだからね。だから、君のシャクティーパット開始と同時に、不調を訴える人が結構いるんだよ、実際。私もね、私自身がシャクティーパットをやっている頃、シヴァ神のエネルギーを使って、ずいぶんシヴァ神に迷惑をかけているな、って思ったものだ。」

「本当にシヴァ神だけが根本なんですね。」

「だから、この御使もヨハネと同じ僕仲間である自分を拝することの無意味さを教えたんだよ。」

「ところで、私の三女が『滅亡の日』の御使の挿し絵を見てね、『この人知ってるよ。いつも見ているから』って言ったことがある。あの子はアストラル世界に出入りしているんだね。まだ五歳だというのに、特別な子だよ。人の心も読んでしまうし。」

「そういえば、先日もAさんが人に厳しいことを言われて、本当は悲しかったけど笑っていたんですって。そのとき、尊師のお嬢さんが部屋に入ってきて、『Aさんは顔で笑って、心で泣いて

いるね」って――。彼女びっくりしてましたよ。」

「私は、あの子はシヴァ神から預けられた子だと思っているんだよ。だから、彼女が一見悪いことをしたようなときでも怒ることができない。自分の力で成長していく子なんだ。あの年齢で、大師にマハー・ムドラー（その人の心を一度具現化させることによって指導する方法）をかけたりもしている。」

例えば、ある日三女は、S大師が意地悪な行為をせざるを得ないような状況を作り出したという。そして言ったそうだ。

「S大師は、本当は意地悪だったんだね。」

と。S大師の持っている隠された要素を引き出して、本人に知らしめたということである。

三女の場合、前生の修行で、大乗のヨーガの成就という高いレベルに達していたから、生まれながらにして精神レベルが高いのである。その姉達はどうかというと、次女の場合など笑ってしまう。彼女は修行でクンダリニー・ヨーガの成就に近付いているところだが、テストで答えがわからないと、他の人の心を読んで、

「あっ、わかった。」

と答案を書き始めるらしい。だから、できの悪い子供の心を読んでしまったらアウトである。私はこうアドバイスするしかなかった。

「先生に意識を集中しなさい。」

本書を読むまで、修行や精神世界に縁のなかった方には理解し難いかもしれないが、オウムとはそんな超能力に関する話が当たり前になってしまっている団体なのである。だから、ヨハネの見た『黙示録』のヴィジョンも、大変身近な出来事であると言える。

なお、御使の言葉にもう一つ解説を付け加えるならば、『あかしびと』（私は「イエス」という言葉は、ヨハネの観念から出ているものと考えるので無視する）というのは、救済者の教えを実行して、真実であることを証明する人々を指しているのである。

◉◉転輪聖王カルキの伝説

『またわたしが見ていると、天が開かれ、見よ、そこに白い馬がいた。それに乗っているかたは、「忠実で真実な者」と呼ばれ、義によってさばき、また、戦うかたである。』（一一節）

この白い馬に乗っている人物が、転輪聖王として悪を滅ぼす人物である。この転輪聖王の姿に、私はインド神話を持ち出さずにはいられない。神話に登場するヴィシュヌ神の化身の一つである、カルキの伝説である。

『インド神話入門』（長谷川明著、新潮社）という本から、カルキに関する部分をそのまま引用させていただこう。

カルキの化身

この化身はまだ現れていません。未来に属する存在なのです。カリ・ユガの終わりの人間が堕落しきったとき、ヴィシュヌはカルキとして降下し、正法を守るため悪人を絶滅します。カルキは馬頭の巨人、あるいは白馬にまたがった騎士に描かれていますが、世界を清算するわけですから、いささか黙示録の騎士に似ていると言えます。

「カリ・ユガ」、私はこれをカーリー・ユーガと発音しているのだが、これは、優しい神々の手ではもうどうしようもなくなった世界を、恐怖神が破壊することによって救済する時代である。『インド神話入門』の言葉を借りれば、「人間が堕落しきったとき」ということになる。それは、『黙示録』の今解読中の場面と一致している。『黙示録』では、ハルマゲドンからイギリスの滅亡、そして獣（けもの）と十人の王に表わされる二つの国（悪）が、転輪聖王と戦って滅ぼされる一連の展開を、神の怒りによる裁きとしていたことは、ご承知のとおりである。

それだけでなく、神話では『正法を守るため悪人を絶滅します。カルキは……白馬にまたがっ

た騎士に描かれ……世界を清算……」となっており、完全に『黙示録』との一致を見るのである。さすがに、この著者も『黙示録』を思い起こしたらしい。『黙示録』の名を持ち出している。

この偶然にしてはできすぎている一致。これは何を意味しているのだろうか？

「M大師はどう思うか？」

「はあ、こういう真理と悪の戦いが起こるという可能性を、ますます高めているように感じます。」

「K大師は？」

「M大師と同じです。神によって見せられたヨハネのヴィジョンと、信仰の対象となっている伝承とが一致しているのですから。」

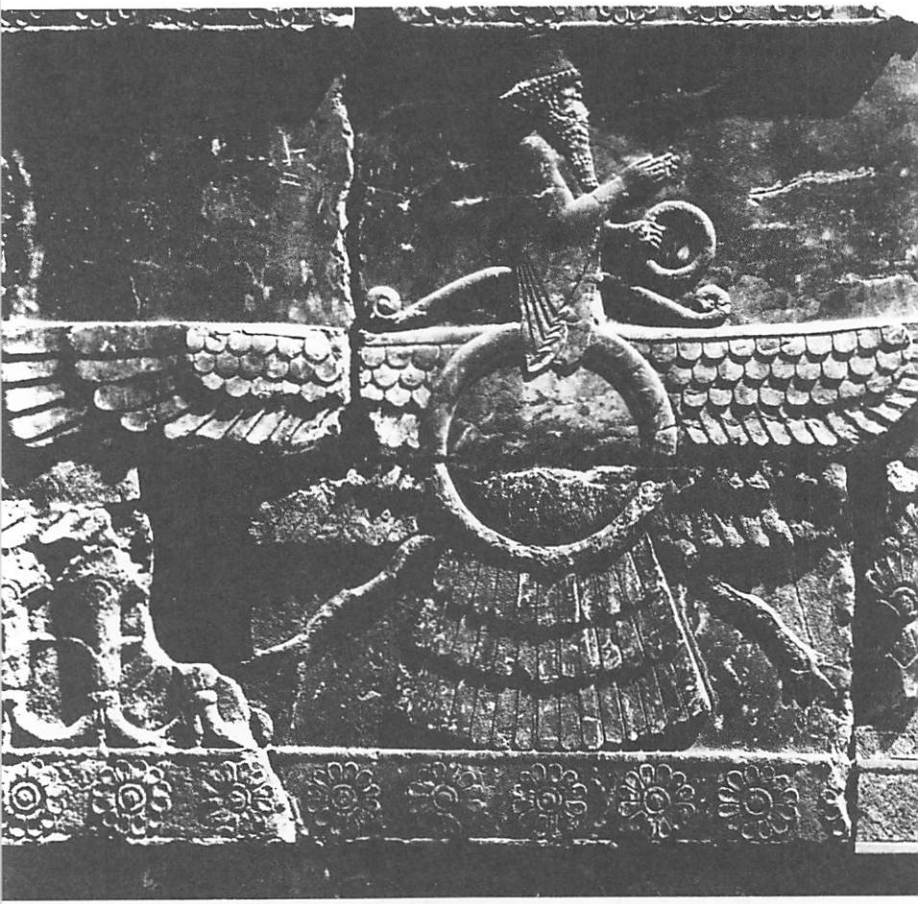
「しかも、シヴァ神のお膝下とも言えるインドの神話ですから、ますます意味深長ですね。」

「実は、ヒンドゥー教（インド神話）だけじゃないんだ、M大師。このカルマの清算のための最後の戦いは、ゾロアスター教にも見える未来予言なんだ。」

◉◉ゾロアスター教に見るタントラの原形

「ゾロアスター教といえば、古代オリエントから続いている拝火教ですね。」

「そう、アフラ・マズダーという最高神が、光と善の神とされているんだが、この神が闇と悪の神であるアフリマンと戦い続けることになっている。そして、アフラ・マズダーが最終的に勝って、



全世界を浄化するといわれているんだ。その後、完全なる世界が誕生するという。」

私はこのゾロアスター教のアフラ・マズダーについて調べているとき、意外な事実を知ったのだった。

ゾロアスター教は、紀元前一二〇〇年頃ゾロアスターによって開かれた宗教である。アフラ・マズダーを最高神とし、アフラ・マズダーが、天地創造をし、また善き者には悦びがあるが、悪しき者には苦しみがあることを定めた者であるとされている。彼は過去・現在・未来を知る者でもある。

ゾロアスター教の信徒は、火を拝し、善き心を持ち、正義にのっとってアフラ・マズダーに近付くこと、善思・善語・善行を行なうことが求められている（参考＝『ゾロアスター教の悪魔払い』岡田明憲著）。

私は、ここにタントラの原形を見るような思いがした。「善き者には悦びがあるが、悪しき者には苦しみがある」――これは、『ヨハネの黙示録』にも出てきた、そして私も何回となく触れてきたカルマの法則である。火を拝する――というのも、タントラの護摩法で火を使うところと似ている。近頃は、日本のある密教系の宗教団体が、現世利益を目的とした護摩法を宣伝したりして、かなりイメージが変わってきてしまっているが、もともとタントラにおいて、火は神聖な

ものであった。火を見つめることによって、トランス状態に入ることもあるし、護摩法によって供物を神々に捧げることも、よく行なわれる儀式の一つである。

オウム真理教は、インド・ヨーガと原始仏教の流れをくんでいるのだが、その両方に共通し、しかも最高峰ともいうべきタントラが、中心的な教義であり修行法となっている。したがって、護摩法も重要視されているのである。昨年末、オウムの所有地内で三〇トンものミカンが収穫されたときなど、昼も夜も関係なく、一週間以上にわたって巨大な護摩壇で火は燃え続け、一個残らずミカンはシヴァ神に捧げられた。また、全国の支部で祭壇に捧げられた供物も、すべて富士山総本部道場に集められて、総本部道場の供物と共に護摩法にかけられるのが習わしである。

言うまでもなく、これらは純粋にシヴァ神に捧げているものであって、現世利益など全く考えていない。先に挙げた宗教団体のように、火を自分の欲望に利用したりしたら、必ず火によって苦しむときがやってくるだろう。護摩壇を中心とした空間は、アストラル世界と直接通じ合っているのである。

念のために付け加えておくならば、私は護摩法によってシヴァ神にお願いし、天候を変えることがあるが、それが許されるのは、私が無欲であるからだ。例えば、セミナー開催時に私の説法を聞きにくる人が困らないようにとか、道場の建立が遅れないようになどという思いで、一定期間雨をストップさせておいたりということである。自分のためではない。いかなるときも、人

のため、真理の流布のために行なうので、許されているというわけである。

また、ゾロアスター教の教義も、ここに例を挙げたものは、オウム真理教の戒の中に含まれているものばかりである。

マンスラも存在する。これは神に祈りを捧げるときの聖なる言葉であって、私達がマントラと呼んでいるものと同一である。

だが、私が意外な事実だと言ったのは、これらタントラとの共通点のことではなく、次の点である。

アフラの伝記——曲解された信仰の歴史

◉◉最高神アフラ・マズダーの肖像

ゾロアスター教の誕生以前、古代ペルシャではダエーヴァ信仰とアフラ信仰が二大信仰となっていた。ゾロアスターは、このうちのダエーヴァ信仰を強く打ち消して、アフラの世界の最高神として、アフラ・マズダーを自ら創始したゾロアスター教の最高神としたのであった。

このアフラがインドに伝わり、ヒンドゥー教のアスラとなった。このアスラが仏教にも影響を与え、阿修羅という名で私達の知るところとなっている。そして、阿修羅界といえば、怒り・嫉妬・争いの世界である。一方、ダエーヴァもデーヴァとして伝わり、仏教では天界の神々として欲六界の頂点に据えられている。

それら神々に対する、ゾロアスター教とヒンドゥー教・仏教の評価の違い！　天界の神々を退け、怒り・嫉妬・争いという性格を持った阿修羅を最高神とした、ゾロアスターは異常だったのだろうか？

いやいや、そうではない。ゾロアスターは知っていたのだ。アストラル世界にあるアフラの世

界もダエーヴァの世界も――。知っていたからこそ、アフラ・マズダーを崇拝したのである。

ゾロアスターが私と同じ感覚を持っていたことを確認するに及んで、私の疑問は氷解した。なぜなら、私はアフラの世界に住んでいた頃の自分の過去世を思い出したことがあったのだが、その世界の様子は、天界の下に位置する阿修羅界とは全く違っていたのだ。

私が思い出したアフラの世界のお話をしよう。そこは、透明な輝きに満ちあふれている、完全なる精神的世界で、そこに住む人々は精神レベルが高く、空腹もなく、性欲、怒り、片寄った見方を招く情もなかった。自己満足も嫉妬もなかった。しかし、最高の真理に到達するため、また真理を守るためには、いかなることでも行なうという強い一面を持っている。だから、そういう性格ゆえに、たとえ闘争があったとしても、それは決して無意味なものではないのであった。また、神通力も備えているのである。

グルと弟子の存在もあった。グルはたくさんの人々に対して、イニシエーション（霊的エネルギー移入の儀式）を行ない、人々はグルと同じレベルに到達することを念願に修行するのである。人間のレベルから見たら、こんなアフラ世界の住人は神としか表現できないであろう。私には、これ以上に優れた世界がアストラル世界に存在するとは思えない。ただし、『滅亡の日』で解説したシャンバラ（救済者が集う世界、シヴァ神を中心とした世界）があるので、同等の世界はあると言えよう。

このアフラ世界の最高神がアフラ・マズダーであるのであるから、ゾロアスターがこの神をゾロアスター教の最高神としたのは当然のことであった。

さて、私は、この神はシヴァ神のもう一つの姿であると考えるのである。それは、アフラ・マズダーが、創造・光・善の神であるとされることからも、カルマの法則を説いているという性格の全くの一致からもわかる。かつ、この神は審判者なのだという。シヴァ神が悪業の清算のための裁きをするのと、同じことをいっているのではないか。

もっと興味深いことに、ゾロアスターだけはアフラ・マズダー神に会い、直接示唆を受けていたらしい。それもトランス状態に入ることによって——。

これは、ゾロアスター自身が超能力を持っていたことと、瞑想に入ってアストラル世界のアフラ・マズダー神に会い、示唆を受けていたことを示している。私がシヴァ神の示唆を受けるときと同じ方法を採っていたわけで、彼は私と大変似た側面を持った宗教家だったということになる。教義（もちろん、すべてそうであるとは言わないが）や神に対する認識が一致している理由は、そこにあるのだろう。

◉◉ アフラとダエーヴァの変遷

ここで、もう一方のダエーヴァに対して、彼がどうとらえていたのかも推察してみることにしたい。

神――といったら、あなたはどんな神を思い浮かべるだろう？ 古代ペルシャのダエーヴァは、現世利益的な神であったとされる。同じ系統である仏教でいう天界の神々は、寿命は一千万年～百億年とされるほど長く、平和で、一生を楽しみ、満足の極致に浸り切ることのできる状態にあると信じられている。たった一つの悩みが、阿修羅と時々戦わなければならないことくらいなのだ。

ギリシャ神話の神々も、インドのほとんどの神々も、この日本の神々も似たようなものではなかろうか？ どれも神としての神通力を持ち、寿命が長く、恵まれている。恋愛もすれば結婚もする。いかにもこれは、人間が理解し得る、最高に幸せな状態、人間の望みの究極を具現化した状態である。古代ペルシャ人も、これらの神々に人間の理想が存在しているとして、あこがれをもって信仰の対象としたのだろう。

ところが、ゾロアスターは違った。冷静な眼をもって、これらダエーヴァ、天界の神々の欠点を見抜いていたのである。

その欠点とは、〝自己満足すること〟だ。自己満足ほど恐ろしいものはない。なぜなら、そこで止まってしまい、それ以上の向上がないのであるから。

ダエーヴァとは対照的に、アフラはもっともっと上を見続けているわけだ。例えば、感情や感覚を超越し、あらゆる事象から心が解き放たれ自由にならない限り、永遠の幸福を手に入れたと

は言えないことを理解しているのである。これは、〝解脱していない限り〟という言葉でも置き換えられるであろう。ダエーヴァが、人間の欲望の究極的な存在であるのに対し、アフラは真理の究極にある存在だということになる。

それでは、アフラとダエーヴァがインドに伝わった時点で、どのようにして評価の逆転が生じたのだろう?

まず第一に考えられることは、古代ペルシャのダエーヴァ信仰と同じ理由、つまりダエーヴァが人間の欲望の究極的存在であるということから、この神々の方が上だという認識が生じたのではないかということだ。精神レベルが低いと、自分の理解できる範囲で判断してしまうものである。アフラの状態は、人間の欲の概念を超えてしまっているので、わけがわからない。わけがわからないから、「ダエーヴァより下だ!」ということにしてしまったのだろう。

そして、そのプロセスで、『最高の真理に到達するため、真理を守るためにはいかなることをも行なう』というアフラの性格から、天界の神々のうちの低次元の部類である、嫉妬心・闘争心の露な神々と入れ替えられてしまったのに違いない。ここに至って、アフラ(アスラ)の名をもって、ダエーヴァ(デーヴァ)の下位グループが、ダエーヴァから分離・誕生してしまったのだ。曲解甚だしいのだが、これによって、本当のアフラは人々の概念から消されてしまったということになる。

もう一つ、アフラとダエーヴァの評価逆転の理由として考えられる説がある。アフラがインドのサンスクリット語、パーリ語のアスラ（asura）としてインドに入ってきたとき、アスラをスラ（sura＝神）にあらざる者と解釈してしまったために、デーヴァに対する悪神・鬼神として位置付けられてしまったというものである（参考＝『日本大百科全書』）。

◉◉釈迦牟尼に見る世界観——欲六界の構図

このアスラは阿修羅として仏教に取り入れられていったわけであるが、仏教の開祖である釈迦牟尼は阿修羅をどう考えていたのか？

彼は、阿修羅という名称をそのまま使って、天界下位グループを表現したというにすぎないのだ。そして、本来の高次元のアフラは、天界以上の世界に存在すると位置付けた。その世界とは、上位アストラル世界のことである。ただ、アフラの名称は用いていない。混同を避けたのだろう。

釈迦牟尼にとって、天界も否定しなければならない世界であった。〝自己満足〟に陥り、悪業を積みはしないが、功徳も積まず、天界に生まれ変わるときに持っていた功徳を消耗するだけの生活であるからである。天界の神々は、その長い寿命を終えるとき、恐怖に恐れおののくという。功徳の尽きた、あるいは少なくなった自分が、次に生まれ変わる世界を、死ぬ前に神通力によって知ることになるから。それは、一つ下の阿修羅界であるかもしれない。もう一つ下の人間界で

あるかもしれない。いや、これらはまだ良い方で、もっと功徳がないと、動物界・餓鬼界・地獄界に生まれ変わらざるを得ないのだ。

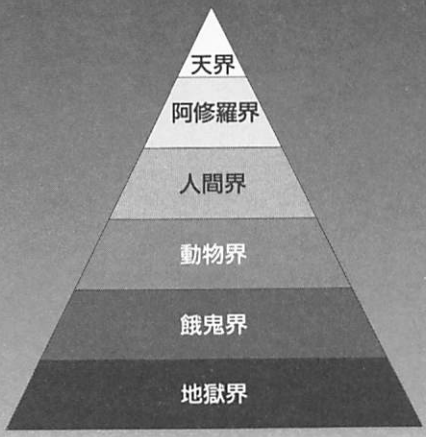
仏教では、「だから、〝自己満足〟のある神々は、本当の幸福を得ることができないのだ。むしろ、人間に生まれて修行をし、天界を超えた絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜へ至ることのできる、この希少なチャンスを生かしなさい」というのである。人間界は、天界に比べてはるかに苦しみ・悩みの多い世界である。しかし、修行の道に入るチャンスというものがあるのだ。

もちろん、天界だけでなく、地獄界に生まれても、餓鬼界に生まれても、動物界に生まれても、阿修羅界に生まれても修行はできず、欲六界を抜け出す術はない。地獄界は灼熱の業火、あるいは身体が凍って砕け散るような寒さに苦しみ続けなければならない。修行どころではない。同じように、餓鬼界では飢えと渇きによって、動物界では脅えと無智によって、そして阿修羅界でも闘争に明け暮れる毎日であるために、修行ができないのである。

その上、欲六界はピラミッド型になっていて、地獄の住人の数が一番多く、次に餓鬼、動物、人間……と、上に行けば行くほど少なくなっていくのだ。人間に生まれることの確率が、いかに低いものであるか、ご理解いただけよう。

それゆえに、仏教では人間として生まれ、かつ真理の修行に巡り合える可能性を、次のような比喩をもって説いている。

――大海の底に、一匹の盲目の亀が住んでいたとしよう。そして、その亀は何百年かに一度だけ、息を吸うために海上へと浮かび上がってくる。そのとき、偶然にも波間に揺れているくびき（荷車などを引く牛馬の首にかける横木）の穴に、空気を吸おうと伸ばした亀の首が入るという確率はいかばかりのものであろうか？　ほとんどあり得ぬ奇跡とは言えはしまいか？　人間に生まれる確率は、この盲目の亀がくびきの穴に首を突っ込むという以上に希少なものなのである。それゆえに、今生人間として生まれた幸運を生かして修行し、高い世界へと行きなさい。――



図．欲六界の構成

というものである。

ゾロアスターのように、天界の神々を否定する思想は、やはりインドの一般民衆には理解し難いものであったらしい。ヒンドゥー教の一派であるヴィシュヌ教では、釈迦牟尼もヴィシュヌの化身の一人としてとらえていて、それは『アスラに誤った教義を広めることによって、その力を弱めるため』であったとしている。

M大師「だから尊師は、天界の神々の状態になるな、といつも厳しくおっしゃっておられるわけですね。」

私「そう、私はみんなをもっと上の世界へと行かせたいからね。それに、そのためだったら、あえて苦難を与えたりもする。だから、私が与えた苦難のまっただ中にある人間は、私のことを『オニ！』だとか『死んじまえ』だとか思うだろう。君達も経験あるだろうけど……。成就して初めて、私のアフラ的な愛がわかるようになるんだね。」

M「信がないと、とてもついていけませんね。修行において、シヴァ神とグルに対する絶対的な帰依が要求されるのは、そのためであるということがよくわかりました。」

シャンバラの系譜――それは救済の光

◉◉その名は、マイトレーヤ！

――本文に戻ろう。転輪聖王（てんりんせいおう）がどのような姿をしているかという描写のところであった。転輪聖王は、

「義によってさばき、また、戦うかたである。その目は燃える炎であり、その頭には多くの冠があった。また、彼以外にはだれも知らない名がその身にしるされていた。彼は血染めの衣をまとい、その名は「神の言（ことば）」と呼ばれた。そして、天の軍勢が、純白で、汚（けが）れのない麻布の衣を着て、白い馬に乗り、彼に従った。その口からは、諸国民を打つために、鋭いつるぎが出ていた。彼は、鉄のつえをもって諸国民を治め、また、全能者なる神の激しい怒りの酒ぶねを踏む。その着物にも、そのももにも、「王の王、主の主」という名がしるされていた。」

（一一～一六節）

とヨハネは言っている。

『義によってさばき、また、戦う』というのは、悪業を清算させるという意味だ。『全能者なる神の激しい怒りの酒ぶねを踏む』というのも、同じ意味である。この表現は、『ヨハネの黙示録』に度々出てくるもので、悪業の象徴であるぶどう酒の酒ぶねを踏むということによって、悪業の清算を表わしている。このとき、酒ぶねからあふれ出てくるのが血で、悪業の清算が流血をもってなされることが暗示されているのである。

『その目は燃える炎であり、その頭には多くの冠があった』わけであるが、目が燃える炎となるのは、マニプーラ・チャクラが完全に開いているときである。マニプーラ・チャクラが開くと、強固な意志が備わるので、悪業の清算を行なわんとする転輪聖王の意志の強さを表わしているのだろう。

ちなみに、マニプーラ・チャクラが超能力のうちの念力獲得を司っているのも、念力がこの意志の強さに関係しているからである。

『頭には多くの冠』というのは、多くのヨーガを成就していることを示すとともに、このとき既に冠の数だけの国々を支配していることを示している。『血染めの衣』をまとっているということから、おそらくこれまでにも流血による悪業の清算によって、多くの国々を支配するようになってきたのであろう。それは、『鉄のつえをもって諸国民を治め』という言葉からも考えられ

ることである。鉄のつえは、武力の象徴であるからだ。

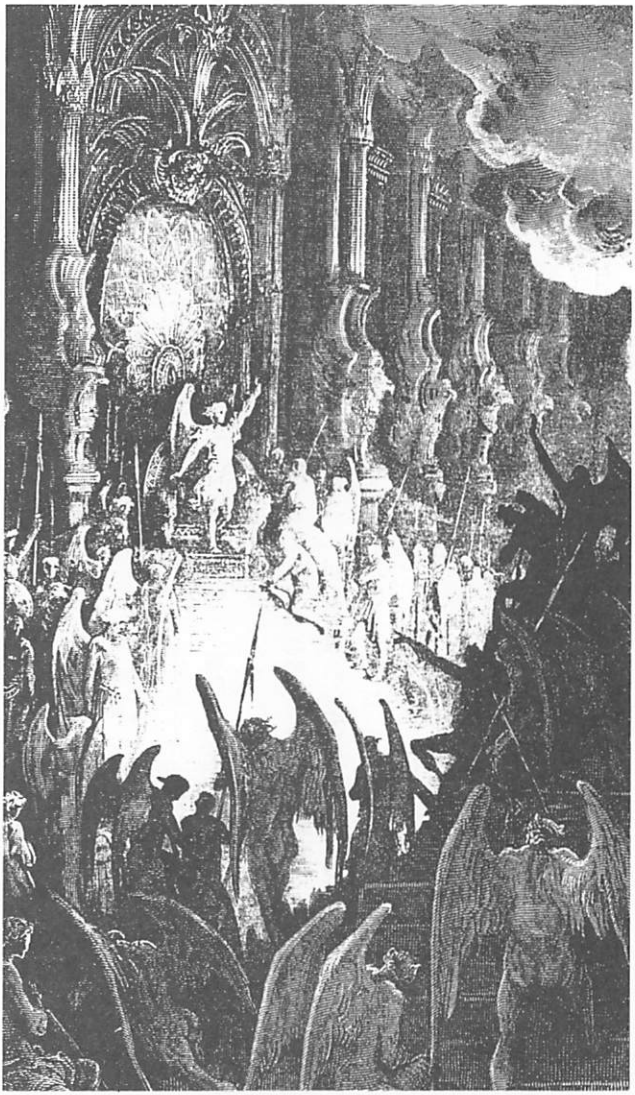
ところで、『彼以外にはだれも知らない』彼の名とは、いったい何であろう？私はそれが「マイトレーヤ」であるという気がしてならない。そして、それは決してあり得ないことではないのではないか、と思われるのである。

マイトレーヤは、未来に現われ衆生を救うといわれている仏陀である。日本では弥勒菩薩という名で知られている。このマイトレーヤのルーツをたどっていくと、なんとこれもゾロアスター教へと帰り着くのだ。

ゾロアスター教には、ミスラという神が存在する。ゾロアスター教以前でも、古代ペルシャにおいてこの神の存在が認められるものであるが、古代ペルシャでもゾロアスター教でも、アフラの世界に属する神であるとしている。この神の性質は、司法神（善業・悪業の監視者、死後の審判の判官）・牧畜の神・戦神であるという。アフラに属するので、善神・光の神でもあるということになる。

このミスラ神が、インドで光、盟約、正義神ミトラとなり、〝友〟を表わす同じ言葉ミトラ(Mitra)の派生語であるマイトレーヤ(Maitreya)へと変化していったらしい。

この神の持つ、善業・悪業の監視者としての性格、戦神であるという性格を見てみると、これから悪業を清算させるために出陣しようとしている、転輪聖王のそれとそっくりではないか。ゆ



えに、私には転輪聖王がマイトレーヤなのではないかと思われるのである。

◉◉今明かされる天界の全構造

M大師「尊師、尊師は、もともとはミスラと呼ばれたマイトレーヤが、アフラの世界に属するとおっしゃっているわけですよね。それでは、仏教でマイトレーヤが住んでいるという兜率天(とそつてん)が、アフラ世界ということになりますか？　以前の説法で、尊師が兜率天がシャンバラにあるとおっしゃった記憶もあって、ちょっと混乱してしまいましたが。」

私「今のM大師の質問に答えるには、まずきちんと天界の構造について説明しておかないと、わかりづらいだろうね。実は私はね、これまで一回も天界の全構造について説法で話したことがないんだよ。説法は数え切れないほどしてきたというのにね。」

M「それはまたどうして……？」

私「私の中に疑問があったからだ。そのために、天界については曖昧(あいまい)にしてきてしまった。しかし、この『ヨハネの黙示録』を解読してきて、私は長い間持ってきた疑問に対する答えを得ることができたよ。だから今、すべてを明らかにしよう。」

一般に、仏教では六つの天界があるとしている。下部に位置する天界から順に名を挙げる。

第一天界　四天王（してんのう）
第二天界　三十三天
第三天界　夜魔天（やまてん）
第四天界　兜率天
第五天界　楽変化天（らくへんげてん）
第六天界　他化自在天（たけじざいてん）

このうちの、第一天界から第三天界までが、欲六界（現象界）の最上部に位置するダエーヴァの天界である。それに対して、第四天界から第六天界は特殊な天界だ。現象界の魂を救済するために現象界に存在しているものの、欲望を超えているので、欲六界と同一の意味である現象界とは言えない。現象界であって現象界でない――何ともこれは表現し難い。

そこで、最初にアフラの世界が出てきたとき、私は上位アストラル世界という言葉で、第四天界以上の天界を表わしたのだった。現象界はアストラル世界の投影であるので、そういう表現も可能であるのだ。しかし、投影といっても、私たちの概念の中にある宇宙観になじみのない方には、全く意味が理解できないことだろう。一応、宇宙観についても説明しておくことにする。

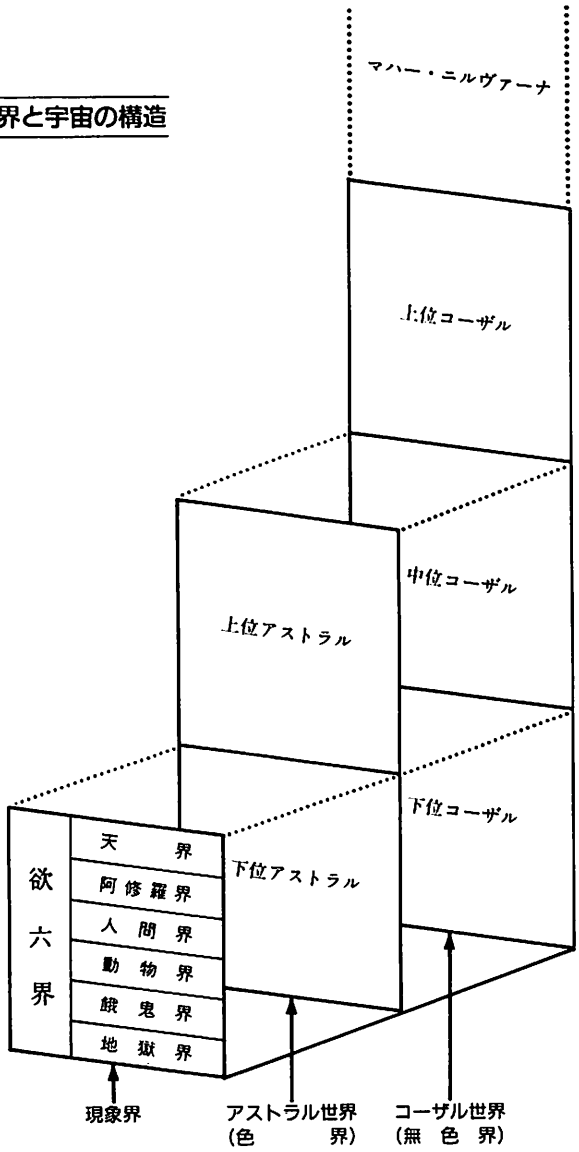
宇宙は三つの世界から成り立っている。それは、現象界、アストラル世界、コーザル世界の三つである。仏教用語でいえば、それぞれ、欲六界、色界、無色界ということになる。

このうちの現象界とは、もう既に触れたこともあったが、六つの世界から成り立っており、その六つの世界とは下から順にいうと、地獄界・餓鬼界・動物界・人間界・阿修羅界・天界である。このうちの人間界に私達は今生きているのであって、人間界と動物界が表裏一体というがごとく一緒になっているゆえに、私達は動物界をも知ることができるわけである。

次のアストラル世界であるが、もし現象界を粗雑な物質でできた世界というならば、こちらの方は微細な物質でできた世界だ。上位アストラル世界と下位アストラル世界に分けられ、下位アストラル世界が、先に挙げた現象界と重なり合い、通じ合っている。私達が未来ヴィジョンを見たといえば、現象界で起こる未来の出来事を、前もってこのアストラル世界で体験して知ったということを指す。また、この世界の時間の流れは、現象界のそれとは違ったものである。

最後のコーザル世界には、光と想念だけが存在している。この光はデータである。言い換えれば、データが光となって存在しているのだ。上位・中位・下位と三つのパートに分けられ、下位コーザル世界が、現象界・下位アストラル世界と重なっている。また、中位コーザル世界が上位アストラル世界と重なっている。上位コーザル世界は、他のどの世界とも重なっておらず、ここ

欲六界と宇宙の構造


マハー・ニルヴァーナ
上位コーザル
中位コーザル
下位コーザル
上位アストラル
下位アストラル
欲六界
天界
阿修羅界
人間界
動物界
餓鬼界
地獄界
現象界
アストラル世界（色界）
コーザル世界（無色界）

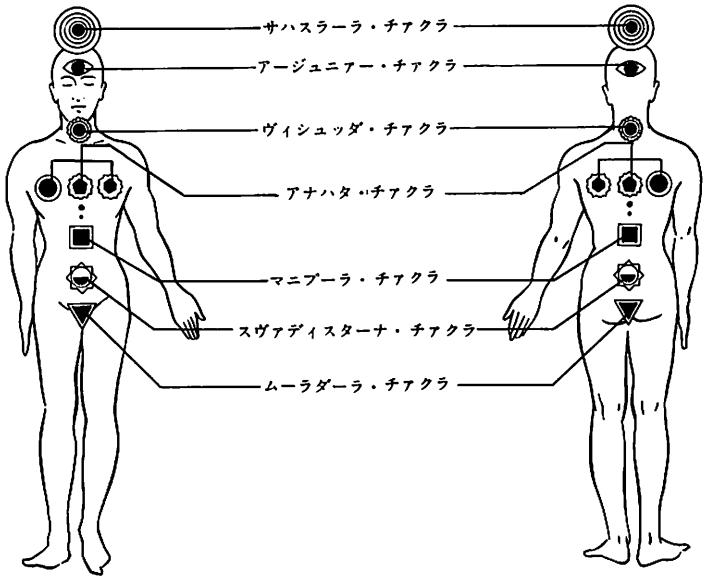
を純粋コーザル世界と呼ぶこともある。

これらの世界は、多次元層を成しているともいうべきものである。つまり、高いレベルの成就者の場合、例えば現象界にいながらにして上位アストラル世界にも存在するというように、いくつかの世界に同時に存在することが可能なのだ。世界によって活動する身体は違っている。参考のために書いておくと次のようになるが、それらはそれぞれのチャクラの位置に存在している。意識を移し変えることによって、これらの身体は活動し始める。

それでは、私の言った現象界がアストラル世界の投影であるというのは、どういう意味であろうか？わかりやすいように、シヴァ神を例にとって説明しよう。

シヴァ神の魂（真我）は、最終解脱をしている。だからシヴァ神は、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の世界であるマハー・ニルヴァーナにおいて、永遠の安らぎを得ることができるのである。この安らぎを得るときには、マハー・ニルヴァーナで活動する身体だけを残して、あとの身体を消滅させてしまえばよい。

ところが、シヴァ神は他の魂が欲六界で苦しんでいるのを見過ごして、自分だけが永遠の幸福に浸ることを望まなかった。そこで、欲六界の魂を救済しようと、自ら真我の投影によってコーザル世界にシャンバラのデータを降ろした。コーザル世界にデータが光として存在することは、前にも述べたとおりである。次に、このコーザル世界のデータを投影して、上位アストラル世界



身体名	存在しているチャクラ	活動する世界
変化身	マニプーラ・チャクラ	下位アストラル世界の天界から地獄まで（欲六界に対応したアストラル世界また現象界でも活動できる）
法身	アナハタ・チャクラ	下位コーザル世界　中位コーザル世界
報身	ヴィシュッダ・チャクラ	上位アストラル世界（現象界の第四天界以上に対応したアストラル世界）
本性身	アージュニャー・チャクラ	上位コーザル世界
金剛身	サハスラーラ・チャクラ	最終解脱をしたときマハー・ニルヴァーナに入っていく

●身体・チャクラとの対応表

にシャンバラを創った。要するに、投影とはデータを下に降ろして、そのデータで世界を創ると考えていい。

さて、次は現象界である。本当は現象界にシャンバラを創る必要はなかった。なぜなら、現象界には上下の区切りがあるので、現象界に上位アストラルの投影をしても、その他の世界に降りて救済することはできない。このことは、人間界と他の地獄界や天界が別になっていることからもわかるだろう。現象界を救済するには、自由に動けるアストラル世界から示唆するか、または、変化身をもって現象界に生まれて救済するしか方法はないのだ。

そのことから、シヴァ神はアストラル世界から救済するという道を選んだわけで、シヴァ神にお会いするには、アストラル世界へと飛ぶ必要があるのである。一方、私事になるが、私は人間として生まれて、この現象界で救済活動をする道を選んだのだった。

ただ、上位アストラル世界にシヴァ神の世界が存在する以上、どうしても現象界にその投影先が必要である。そのため、現象界の純粋に現象界とは呼べないところにも、シャンバラが存在しているということになったのだ。私が、現象界はアストラル世界の投影だから、シャンバラは上位アストラル世界に存在すると言った理由は、ここにあったのである。

◉◉シャンバラ――光をコントロールする

K大師「シャンバラは、アストラル世界にも現象界にも、同時に存在しているということだったんですね。そして、欲六界の救済はアストラル世界を通じてしかできないから、救済中心に考えれば、アストラル世界のシャンバラを指すわけですね。」

私「本当に、ここのところは概念をとらえるのが大変なところだね。K大師は、瞑想でコーザル世界の体験もアストラル世界の体験もしているから、すぐに飲み込めるだろうけど。」

M大師「ところで、シャンバラやアフラの世界は、第四天界から第六天界のどこにあるのですか?」

私「これを説明しだすと、また長くなってしまうのだが……。でも、ここではっきりさせておかないとまずいだろうね。」

まず、第四天界以上の天界について、特徴を挙げてみよう。第四天界の兜率天では、人々は説法を聞き、救済に備えている。第五天界の楽変化天では、自在に欲しい物を作り出すことができる。第六天界の他化自在天では、もちろん自分で欲しい物を出すことができるが、周囲の人達が出してくれるのでその必要さえない、という世界である。

自在というのは、ヒンドゥー語でシューバラと言う。これがシャンバラの語源であると、私は考える。したがって、自在なことを特徴とする第五天界と第六天界は、間違いなくシャンバラに

属するものである。

だが、私が前々から言ってきたように、シャンバラは救済者が集うところでもある。そういう意味で、私は第四天界もシャンバラに加え、第四天界以上すべてをシャンバラと呼んでいるのである。

M大師「でも尊師、すべてシャンバラだったら、アフラの世界が入るところがないですよ。」

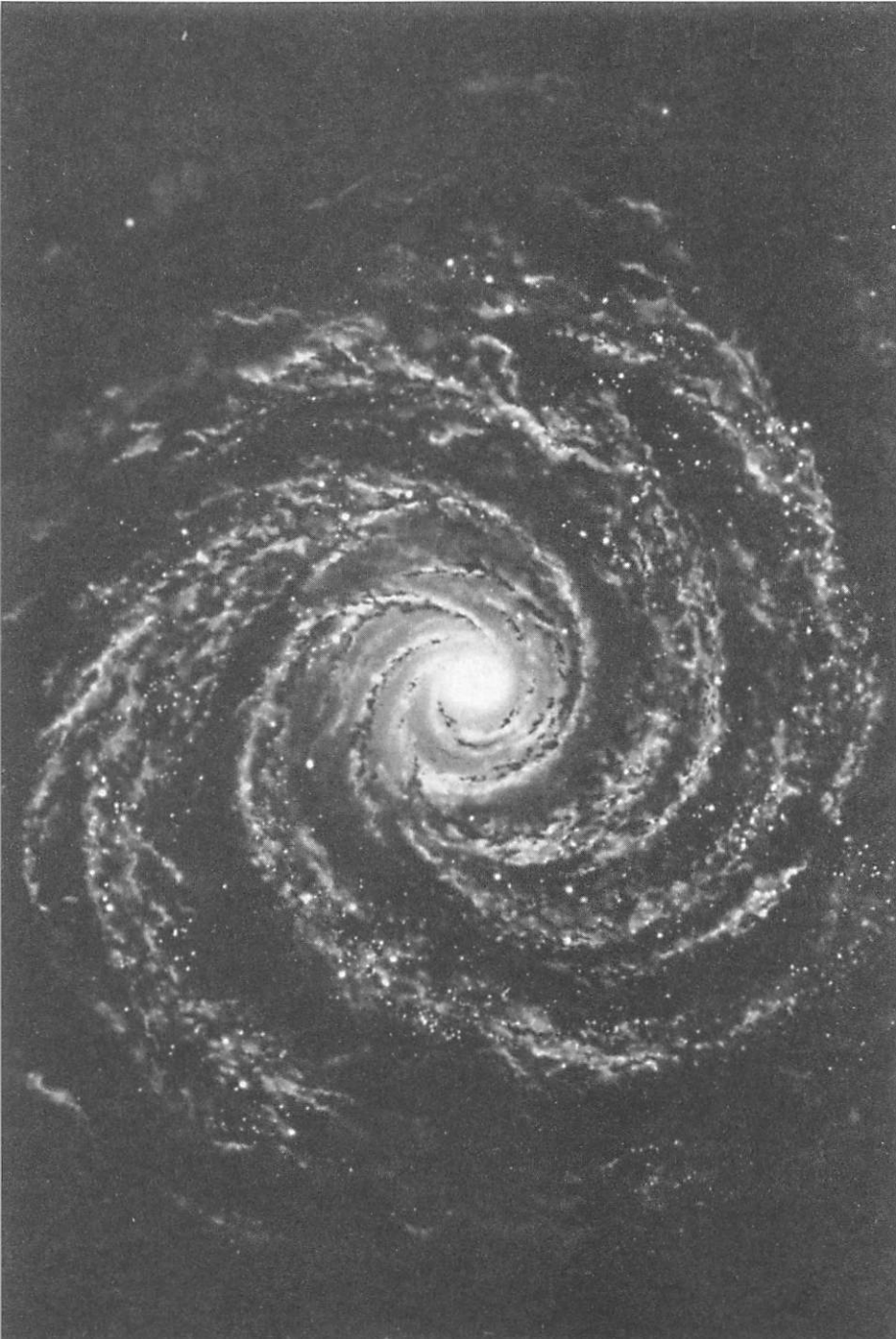
私「M大師、結論を言えば、シャンバラ＝アフラ世界だったんだ。どちらもシヴァ神が最高神となっているというのも、これで納得できるだろう？　あのとき、同等の世界だと言って、言葉を濁してしまったけど、それも仕方なかったんだよ。だって、シャンバラとアフラ世界が同じだということを示すためには、今までのように長い、しかも難しい説明が必要だったからね。しかも、もう一つ説明を付け加えておかないと、疑問が残ってしまうだろう。」

M「ぜひそれも教えてください。」

私「すべての物を自在に現象化するには、何が必要だと思うか？　私は、光・振動・熱の三つを挙げる。M大師、君が科学者であるから聞くが、物理学上もそうなっているんじゃないか？」

M「そうです。物理学上そういう言い方も可能です。」

私「人間はこのうちの振動と熱をコントロールすることはできるが、何もないところから光を生



じさせたりという、光のコントロールはできないよね。しかし、シャンバラでは光のコントロールまでできるから〝自在〟なんだ。ほら、ここで光――光の神――アフラと通じるだろう？アフラ・マズダーは光の神、ミスラもアフラ・マズダーと同じアフラに属し、太陽神ともされている。光をコントロールできるからこそ、このように称えられているとは思わないか？」

M「わかりました。光をコントロールするという共通性が、最大の決め手であるということですね。」

私「K大師、釈迦牟尼も重大なことを言っていたね。『私は太陽族の末裔である』と。覚えているか？」

K大師「はい。私は釈迦牟尼を生んだシャカ族が、そういう名の種族の流れをくんでいたと受け取っていたのですが……、本当はシャンバラのことを言っていたのでしょうか？」

私「そう思うよ。釈迦牟尼は偉大な救済者としてこの世に降り、そして多くの衆生を救済した。救済者はシャンバラから降りてくるのだから、釈迦牟尼もシャンバラの住人であることは間違いない。仏典でも第四天界から降りたとしているしね。だいたい、シャンバラを知らないで、救済者だと吹聴するのは単なる嘘つきにすぎないよ。」

◉◉光を発する！――甘露水の驚異

K大師「尊師もアフラ世界の前生をお持ちですから、シャンバラにおられたということですね。」

私「もちろんそうなる。それはあの実験でも証明されただろう？　純水を修法して、光を発する水に変化させてしまったという。光をコントロールできるシャンバラ系統の者じゃないと、とてもそんなことできやしない。」

M大師「あれは、本当に衝撃的な実験結果をもたらしましたね。まさに、光が尊師によって生み出されたのですから。」

その実験データが残されているので、ここにご紹介しよう。実験・分析は、CSIである。

①超純水を用意する。超純水とは、蒸留→イオン交換→極めて微細なフィルターを使っての、ろ過というプロセスを、数回繰り返して得られたものである。

②分光器、クロム混酸で洗浄したサンプル管三本を用意する。

③超純水を三本のサンプル管に入れる。

④三本のサンプル管Ⓐ Ⓑ Ⓒに、次のような条件を与える。

Ⓐふたを開けないで、修法をしない。

Ⓑふたを開けて、修法はしない。

Ⓒふたを開けて、修法によってエネルギーを移入。

さて、ⒶⒷⒸの三本のサンプル管に入った超純水は、どうなったであろうか？　普通は、純水が光を発するなどということは、到底考えられない現象である。

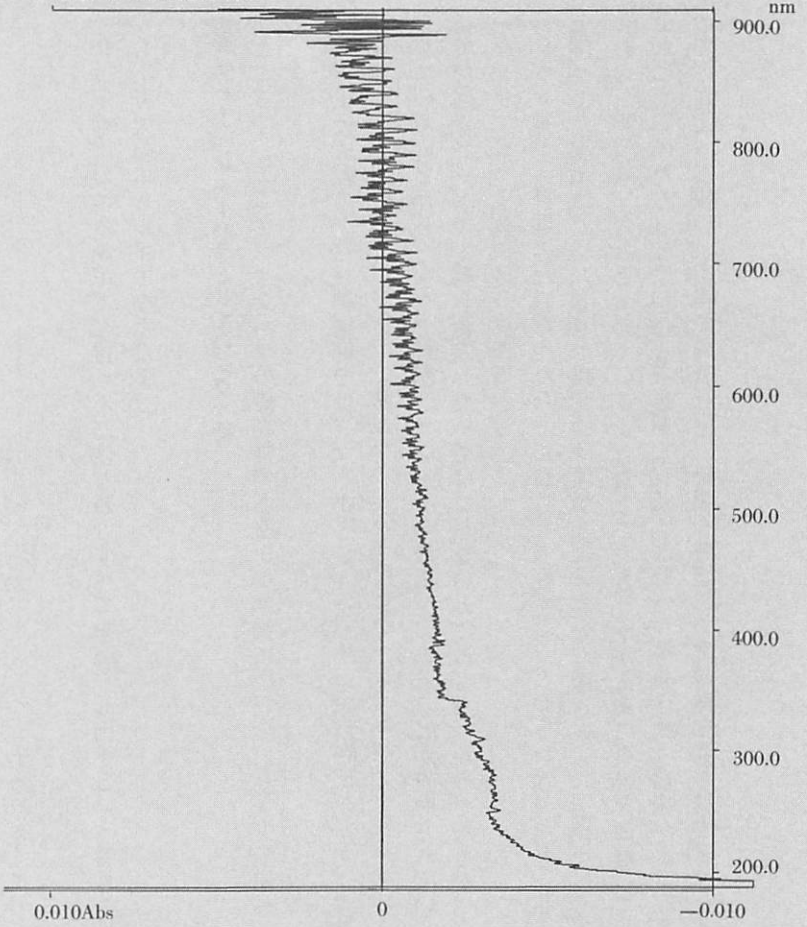
ところが、私が修法したⒸだけは、光を発しているということが確認されたのだ。それは、吸光度測定によって科学的に明らかにされた。吸光度を測定し、その測定数値がマイナスを示したわけで、それは光を吸収するどころか、反対に光を発しているという意味なのだ。

M「あの実験は、精神世界の超常現象が科学によっても証明できるという好例だったと思います。私がこういう世界に縁のないままの普通の科学者だったら、とてもこの実験結果を信じることはできなかったでしょう。私は実験に立ち会って、神秘というものを目の当たりにし、ますます信を深めたものでした。」

K「私もそうですよ。尊師が修法された超純水は、明らかにすべての可視光線と紫外線を発していましたからね。特に、エネルギーの強い紫外線領域で、放射量が著しく高くなっていたのが印象的でした。」

私「この水の発している光が、シャンバラに満ちあふれている透明光と同じものなんだ。これを

●甘露水の吸光度実験



タテ軸は波長を表わし、ヨコ軸は吸光度を表わしている。タテ軸の380～770nmまでは可視光線域にあたり、380nm以下は赤外線域、770nm以上は赤外線域にあたる。ヨコ軸において、吸光度がプラスの場合は光を吸収していることを示し、マイナスの場合は光を放射していることを示す。

普通の物質では、これがマイナスになることはない。ところが、このグラフにおいては広範囲にわたって、マイナスの領域すなわち光の放射が見られる。なかでも、波長の短い領域すなわちエネルギーの高い部分において、光の放射が著しい。

サットヴァのエネルギーと言うんだけどね。すべてを照らし出すという善性のもので、解脱にも不可欠のエネルギーなんだよ。」

◉◉マハー・シューバラとしてのシヴァ神

ところで、ここでシャンバラの最高神であるシヴァ神について、もう少し述べておくことにしよう。

ヒンドゥー教のシヴァ神信仰では、マハー・シューバラ（大自在天）とシヴァ神が同体であると考えている。そして、マハー（偉大な）という言葉が、シャンバラを表わすシューバラにつけられていることから、シヴァ神がシャンバラの最高位にあることが表わされているのである。今まで何回かヒンドゥー教を否定しなくてはならないところもあったのであるが、この部分は間違いなくヒンドゥー教の持つ真理である。

シヴァ神が「真理のためだったらどんなことでもする」というシャンバラ（＝アフラ）の性格を持っているため、ヒンドゥー教徒には理解し難い部分も多くあったらしい。インド神話には、それを〝不気味〟だととらえているようなところもうかがえる。真理を曲解してしまった原因も、それにあるのだろうと思われる。しかし、私にはシヴァ神の行動の意味が手に取るようにわかるので、かえって快い。山奥での苦行や、祭祀を破壊して愛の神を焼き殺す伝承など、さすがにア

フラの王シヴァ神であると思う。

◉◉〝天の軍勢〟の勝利

『「さあ、神の大宴会に集まってこい。そして、王たちの肉、将軍の肉、勇者の肉、馬の肉、馬に乗っている者の肉、また、すべての自由人と奴隷との肉、小さき者と大いなる者との肉をくらえ」。』（一七～一八節）

と、御使が中空を飛んでいるすべての鳥に向かって叫ぶと、現実に戦いが始まる。〝天の軍勢〟とヨハネはしており、アストラル世界での戦いのような印象を受けるが、アストラル世界の出来事は現象界においても現実化するので、これはすなわちこの世の戦いなのだ。このことについては、この一九章の初めの解説の部分でも述べた。

シヴァ神陣営の軍勢は、転輪聖王マイトレーヤを中心とする真理に帰依する者達。敵は、〝獣〟と〝十人の王〟を象徴とする二つの国である。

〝中空を飛ぶすべての鳥が人肉を食う〟――、これはどういうことだろう？

M大師の考えでは、これは強力なレーザーか、またはそれ以上に強力な未知の兵器の出現を暗示しているのではないか、ということである。〝食い尽くす〟というのは消滅させてしまうとい

うことで、強いエネルギーを持つレーザー光線だったなら、人間の肉体を瞬時に消滅させてしまうことが可能だ。それ以上に強力な兵器となったら言うまでもない。私もM大師の考えに賛成である。その強力な殺りく兵器は、おそらく鳥のような姿をし（飛行機の一種）、空中から地上を攻撃するのだろう。

戦いの描写を読んでみると、圧倒的にマイトレーヤの軍勢が強く、あっと言う間に敵を滅ぼしてしまうようである。『硫黄の燃えている火の池』とは地獄のことだ。地獄へと放り込まれた魂は、そこでの貧め苦によって少しずつ悪業を消滅させていく。長い長い時を経て、また、何回も転生を繰り返して、いつの日か救われることもあろう。こうしてみると、地獄へ落とすというのも、神の愛の表われの一つなのだと言える。

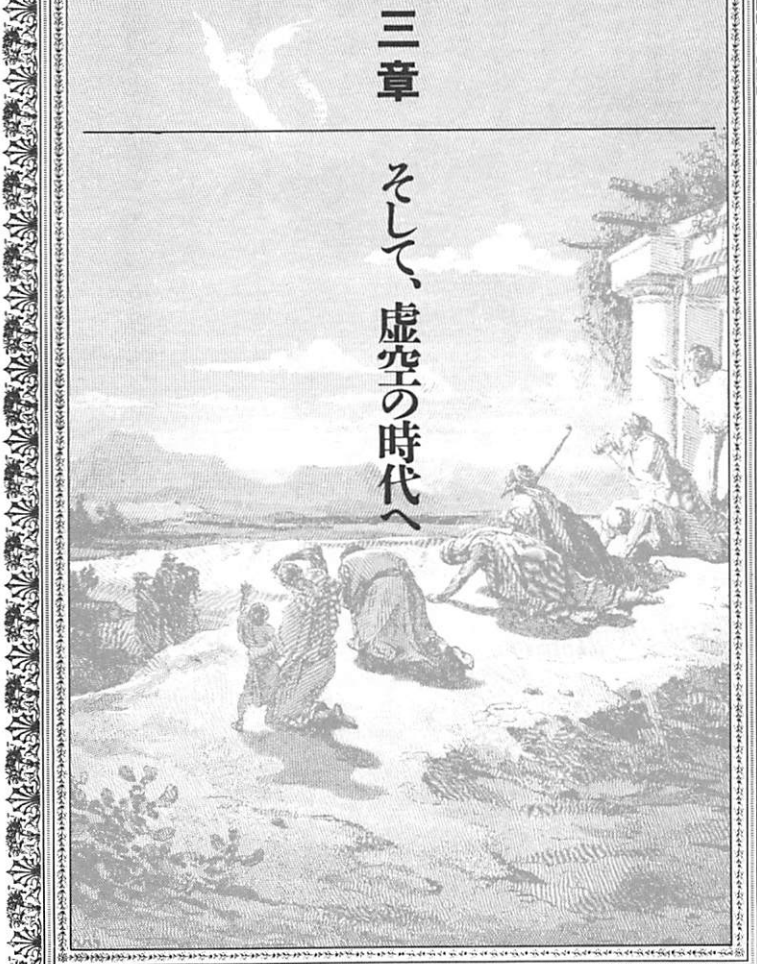
『馬に乗っておられるかたの口から出るつるぎ』――これもレーザーのような武器なのではないだろうか？　あるいは、マントラであるかもしれない。高レベルの成就者の唱えるマントラは、武器にもなり得るのだ。それは、マントラによって相手のアストラル世界を通じて、現象界にある肉体や精神に影響を与えることができるからである。

ゾロアスターの場合も、マントラを重視していたが、既に彼の少年時代にダエーヴァ信仰の祭司三人をマントラによって三回気絶させ、追い払ったというエピソードが伝えられている。

いずれにせよ、天の軍勢側が圧倒的勝利を収めるのだ。

第三章

そして、虚空の時代へ



審判の時は来りて——裁かれた魂の行方

◉◉ 千年王国の後に——顕現する天界と地獄界

またわたしが見ていると、ひとりの御使が、底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から降りてきた。彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて千年の間つなぎおき、そして、底知れぬ所に投げ込み、入口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終るまで、諸国民を惑わすことがないようにしておいた。その後、しばらくの間だけ解放されることになっていた。

また見ていると、かず多くの座があり、その上に人々がすわっていた。そして、彼らにさばきの権が与えられていた。また、イエスのあかしをし神の言を伝えたために首を切られた人々の霊がそこにおり、また、獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった人々がいた。彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間、支配した。（それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかった。）これが第一の復活である。この第一の復活にあずかる者は、さいわいな者であり、また聖なる者である。この人たちに対しては、第二の死

はなんの力もない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する。

千年の期間が終ると、サタンはその獄から解放される。そして、出て行き、地の四方にいる諸国民、すなわちゴグ、マゴグを惑わし、彼らを戦いのために召集する。その数は、海の砂のように多い。彼らは地上の広い所に上ってきて、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを包囲した。すると、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽した。そして、彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた。そこには、獣もにせ預言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめられるのである。

また見ていると、大きな白い御座があり、そこにいますかたがあった。天も地も御顔の前から逃げ去って、あとかたもなくなった。また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた。海はその中にいる死人を出し、死も黄泉もその中にいる死人を出し、そして、おのおのそのしわざに応じて、さばきを受けた。それから、死も黄泉も火の池に投げ込まれた。この火の池が第二の死である。このいのちの書に名がしるされていない者はみな、火の池に投げ込まれた。

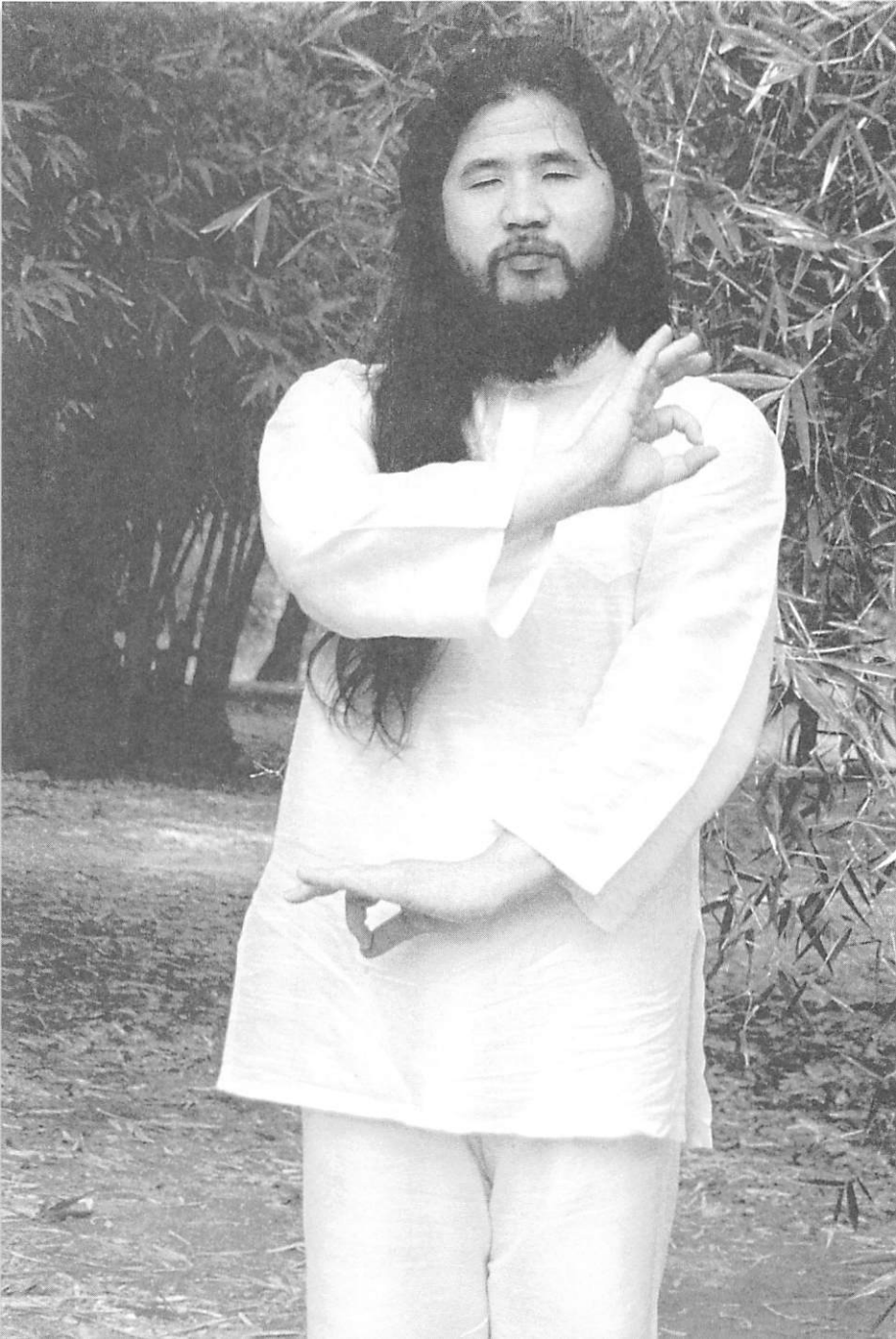
（第二〇章）

前章でもそうであったが、ここでもまた、不思議な情景が展開される。あたかも、地獄界や天界がこの世に立ち現われたるがごとしである。これは、六つに区切られている欲六界が一つになる可能性を示しているのではなかろうか。現在、この人間界からは動物界を知ることができるのみであるが、それが欲六界全体を見通すことができるようになるのではないか、ということである。

そのような状態が現象化するとは、とても信じられることではなさそうであるが、人間の観念で推し量ることのできないことは、やはり存在しているものである。それを私達は奇跡と呼ぶ。

例えば、昔の人間から見たら、飛行機の存在などまさに奇跡であるし、超音速飛行機に至っては言わずもがな、であろう。それと同じように、今の私達には想像だにできない世界が出現しないとは、だれが言い切れようか。

ちなみに、原始仏典の記述の中には、天界や地獄界がこの世界と通じていたと思われるものが数多く存在している。いずれも、釈迦牟尼の時代における教団内部の出来事である。当時、教団内には成就者がたくさんいたので、成就者のサットヴァのエネルギーによって、他の世界までもが照らし出されたのかもしれない。その点を考えてみると、『ヨハネの黙示録』第二〇章に描かれている世界も、サットヴァのエネルギーによって出現するのではないかという予感がするのである。



◉◉欲六界が一つになる——仏典の記述

参考のために、原始仏典からいくつかの例を挙げておくことにしよう。

生前、釈迦牟尼の熱心な信者であったアナータピンディカ長者は、天界に生まれ変わった。そのアナータピンディカ長者が、ある夜、釈迦牟尼に会いに来たという話がある。また、天神が釈迦牟尼のところにやってきて、釈迦牟尼と問答をしたり称賛したりという話も多い。

釈迦牟尼が、ブッダガヤの菩提樹の下で悟りを開いたときの出来事も有名である。釈迦牟尼は最初、

「私が得た悟りは、欲望に支配された他の人々に説いたとしても理解してはもらえないであろう。」

と、法を説くことを躊躇した。それを知った梵天が、釈迦牟尼の前に姿を現わし、

「法を説いてください。あなたが法を説かなかったら、法を理解できる人々でさえ堕ちていってしまうでしょう。」

と、釈迦牟尼に法を説くことを勧請した。その梵天の言葉によって迷いの晴れた釈迦牟尼は、ヴァーラーナシーへと旅立ち、ヴァーラーナシーで説法を開始したのであった。これが、初転法輪という言葉によって知られる、仏教のスタートである。

その他、釈迦牟尼の前に悪魔が姿を現わしたという話も伝えられているが、釈迦牟尼だけでは

なく、釈迦牟尼の弟子達の前に悪魔が姿を現わしたという記述も、何例か仏典の中に見いだされる。天神が姿を現わして、という話も同様である。

特に、『黙示録』に関連して興味深い記述としては、地獄の出現があり、私の知っている話は次の二つである。

一つは、絶世の美女と称された仏弟子ウッパラヴァンナー尼が、人里離れた森の中で瞑想修行をしていたときのことである。かねてより彼女に思いを寄せていた青年が、無慈悲にも彼女を襲って思いを遂げてしまった。その直後のこと、大地が真っ二つに割れ、青年はアビーチ大地獄に落ちていったと伝えられている。

もう一つは、仏教の隆盛を妬む他宗派の人間が、チンチャーという名の女を使って、釈迦牟尼の名誉失墜を謀ったときのことである。

チンチャーは臨月の妊婦を装って、説法をしている釈迦牟尼の前に現われ、

「おなかの子供はあなたの子であるのに、何の世話もしてくれない。」

と言って、多くの信者の面前で釈迦牟尼をそしった。だが、そのとき、女の腹に縛りつけてあった木の盆が落ち、すべてが明らかになった。逃げていくチンチャーの足元の大地は、そのとき大きく口を開き、女は炎に包まれて無間地獄に落ちていったとされている（参考＝『釈尊をめぐる女性たち』渡辺昭宏著）。

これらの仏典の記述から推察されるように、当時の仏教教団内では欲六界が一つになっているような出来事が起こっているのだ。もし、『黙示録』が描き出している世界が現実のものとなるならば、それは釈迦牟尼の時代よりもずっと大きな規模でのこととなろう。

◉◉復活の秘儀をここに明かす!

では、第二〇章を順を追って解釈していくことにしよう。

『ひとりの御使が、底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から降りてきた。彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて千年の間つなぎおき、そして、底知れぬ所に投げ込み、入口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終るまで、諸国民を惑わすことがないようにしておいた。その後、しばらくの間だけ解放されることになっていた。』

(一〜三節)

これまでに出てきた龍と同様、ここでの龍も共産主義思想あるいは物質主義思想を象徴しているものと思われる。それが千年の間、封印されるというのである。この千年という期間は、人間界における千年であるのか、天界における千年であるのか微妙なところであるが、私は人間界よ

り時間の経過の遅い天界における千年だと考えている。その理由は、先程述べたように、この欲六界が一つになってしまうだろうからである。もしそうなるとしたら、天界の中でもアフラ世界の千年ということになるだろう。

そして、完全に封印された共産主義思想・物質主義的思想が、千年の後、もう一度だけ台頭してくることが暗示されている。

ここで、どうしてこの思想が封印されなければならなかったのか、ということを考えてみると、やはりそれが無宗教を特徴としており、真理とは相容れないものであるからと言えよう。

「彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間、支配した。(それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかった。)これが第一の復活である。この第一の復活にあずかる者は、さいわいな者であり、また聖なる者である。この人たちに対しては、第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する。」(四～六節)

第一の死、第二の死というのも、一見奇妙な表現であるという印象を受ける方が多いことと思う。生まれ変わるわけではないのに、二回も死ぬことがあるだろうか、と。

しかし、死んでから転生するまでの間に、もう一度死とも呼ぶべき状態が存在しているという

のが事実なのだ。

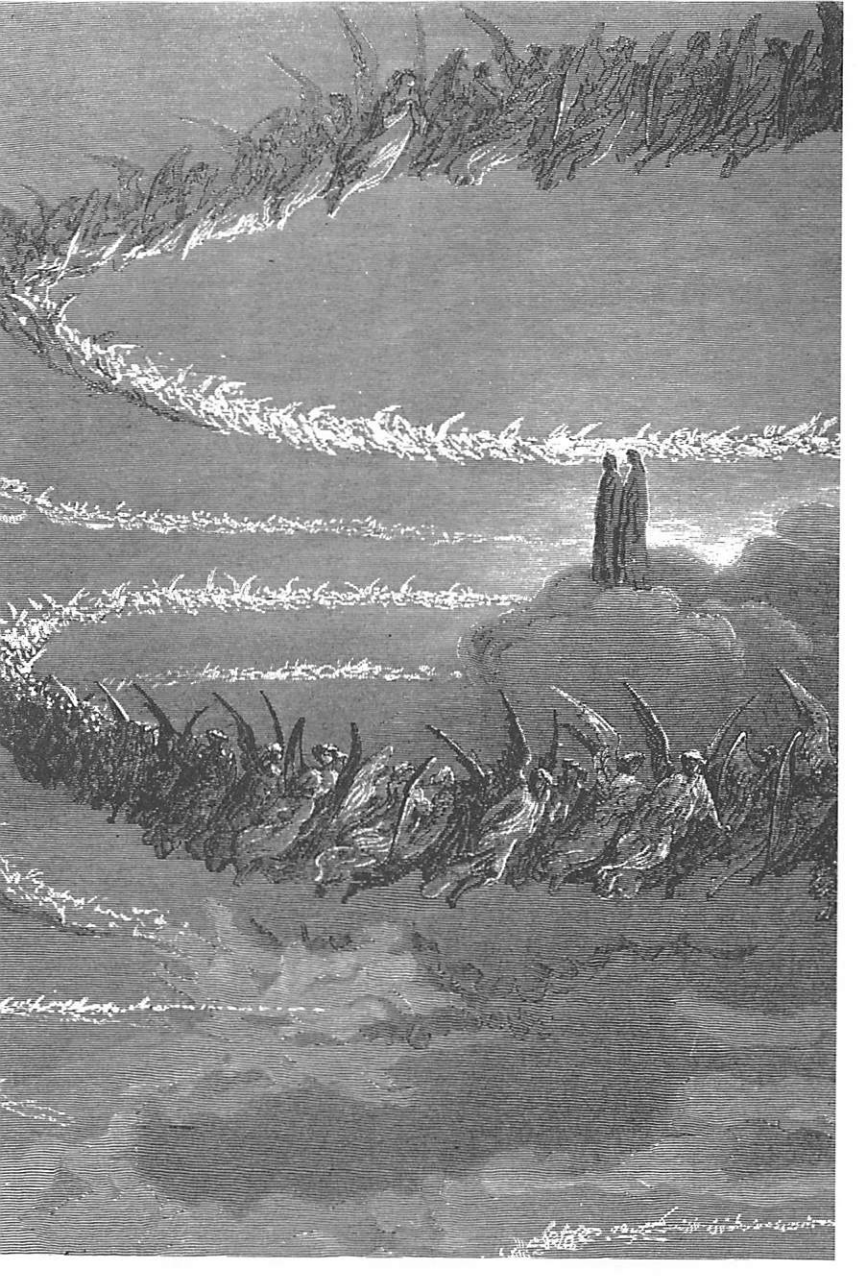
それはこういうことである。

私達の死に際して、魂が肉体を離れる。それと同時に、魂はバルドーと呼ばれる死後の中間状態に飛び込み、そのショックのために気絶してしまう。これが第一の死である。

次に、気絶した魂は、次の転生に先立って、生きていたときに積んだ善業・悪業に対する裁きを受ける。このときは意識を取り戻しているわけであるが、裁きの結果によって次の世界へと飛び込み、生まれ変わっていく段階で再び意識をなくす。このときは、前生の記憶さえも失ってしまうのである。これがいわゆる第二の死なのだ。

以上が普通の人間の場合であるが、それに対して、『第一の復活にあずかる者は、さいわいな者であり、また聖なる者である。この人たちに対しては、第二の死はなんの力もない』と書かれている。どういうことであろうか?

第一の復活にあずかる者というのは、生きている間に意識の連続性を身に付けることのできた者、という意味に他ならない。修行の結果成就すると、意識が連続するようになる。この世界からアストラル世界へ移行しても、さらにコーザル世界に移行しても、途切れることなく鮮明な意識を持ち続けることができるわけである。この力は死に際しても同じように発揮され、現象界からバルドーへと、死後気絶を味わうことなく意識(魂)が移行していく。だが、肉体は捨てるので、



第一の死は存在していることになる。そして、その後は第二の死を経験することなく、いや、第二の死によって意識や記憶を失うどころではなく、自ら次の転生先を選択することができるのだ。

ヨハネが『彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間、支配した』と言っているのにも、今説明した転生のプロセスが背景にあるのである。つまり、肉体が千年生き続けるのではなく、転生を繰り返しながら、意識が千年間存続し続けるということなのだ。

たとえ肉体は老いて捨てるべきときが来たとしても、次に生まれ変わる環境を自分で選んで新しい生と肉体を受ける。しかも、前生の記憶は残ったままであるから、以前自分はどこに住んでいたか、何をしていたか、だれと暮らしていたか、などということも承知している。場合によっては、以前の家族や知人に会いに行くことさえ可能だ。これだったら、千年生き続けるといってもおかしくないだろう。

◉◉転生譚（てんしょうたん）——少女シミのエピソード

今の時代においても、自分の前生を覚えている修行者は多い。チベット仏教のダライ・ラマ法王もその一人である。法王は、生まれ変わっては再び法王の地位に就くということを繰り返し、現在は十四世である。十四世が、十三世の生まれ変わりであると認定されたとき、十四世はまだ三歳の幼児であったにもかかわらず、側近の名や自分が前生で愛用していた法具を覚えていたと

いわれている。

だが、修行者が前生を覚えている、あるいは思い出しているというのはごく普通のことであって、そう騒がれるということはないが、ごく普通の人間（のように見える）が前生を鮮明に覚えていたりすると、「リインカネーション（生まれ変わり）」として大ニュースになるようである。私がインドで取材したシミという少女の話も、その一例である。

この記事は、既に『トワイライトゾーン』八七年五月号に書いてあるので、そこから一部分を抜粋させていただこう。

パンジャブ州のナンガルにシミという名の女の子が住んでいた。一九七六年生まれのこの子が突然妙なことを言い出したのは、彼女が三歳のときのことである。

「スンダルナガールに昔の家があるので行きたいの……。私の長男が頭にケガをしているので、病院に連れていかなければならないから。モハンダラ・シンが家にいると思うわ。彼は運転手、私の夫よ。」

シミは何度も「スンダルナガールへ行きたい」と、父親のイシュワール・ダット・パタックさんに訴えた。父親は試しに幼い娘をスンダルナガールへ連れていってやりたいとも思ったが、経済的にとてもそんな余裕などなかった。だから、しばらくの間、そのままになっていた。スンダ

ルナガールは、ナンガルと同じくパンジャブ州にある。

ところが、シミが四歳のとき、父親の転勤で一家はスラッパーというところに引っ越す。ここは偶然にも、スンダルナガールまで二〇キロという近さだったのだ。

一九八〇年三月、モハンダラ・シンという男性を見つけたが、シミは、

「この人じゃない。」

と言う。だが、この男性からの情報で、ヒマーチャル・バスの運転手をしているモハンダラ・シンという人物がいることがわかった。

彼を訪ねる決心をした父親は、娘を肩に乗せて歩いていった。途中でシミは、

「近いから歩く。」

と言って自分で歩き出した。そして一キロほど行ったとき、

「お父さん、ここが私の家よ！」

と叫んだ。彼女はとてもうれしそうだった。近所の人々の名も、すべて正確に言い当てた。

ただ残念なことに、家には家族はだれもいなかった。夫であるというモハンダラ・シンは、仕事でマンディーに行っていた。その代わり、近くに住む年寄りがこんなことを教えてくれた。

「モハンダラ・シンさんの娘は、二人とも幸せな結婚をしましたよ。息子さんも三人いましてね、上のお兄さんは外国へ行ってるそうですよ。もう一人は働いていましてね。そうそう、末っ子の

1888
1889

パプーは結婚したお姉さんのところですよ。まだ学生で、勉強中でね……。」

モハンダラ・シンの家の中に入ったシミは、一枚の写真を指差してこう語った。

「あれが私の写真――。名前はクリシュナだった。一九六六年に病気で死んだの。」

三月二十一日、シミは前世の夫と子供たちに対面することができた。彼女は過去の出来事を正確に記憶していた。相手が四歳の女の子なので、シンが肩に乗せてあげようとすると、シミは恥ずかしがって嫌がった。

「人前では夫が妻に触れてはいけないというのが、インドの習慣。シミが恥ずかしがるのももっともだ。」

と、人々は改めて納得したそうである。

さて、故クリシュナの二人の兄も話を聞いて駆けつけた。もちろん、シミには彼らがだれなのかすぐにわかった。

兄たちは、シミをビラースプクへと連れていき、七十歳になる母親に会わせた。

「お母さん!」

母親はシミと話しながら、

「この子はクリシュナの生まれ変わりだ。」

と確信したのだが、さらにある試みをしてみせた。シミに一枚のハンカチを見せたのである。

「お母さん、お母さんがこれと同じ布地で私にスーツを作ってくれたじゃない。よく覚えているわ……。でも、私は病気にかかり、それを着ることができなかった。」

このように、彼女の記憶があまりにも正確で、かつ肉親が健在だったことから、彼女が十年前に亡くなったクリシュナの生まれ変わりだということが証明されたのである。

しかし、この十年という期間が不思議がられた。なぜなら、人は死んでから四十九日以内に生まれ変わるといわれているからである。この十年の空白は、いったい何を意味するのだろう？

が、間もなくこの謎も解けた。シミが自分のもう一つの過去世を思い出したからだ。同じスンダルナガールで、クリシュナの死後、すぐにブディー・シンの娘として生まれ変わったというのである。そして、九歳のとき死んだ、とシミは言った。

シミはそのときの家も探し当てた。しかし、ブディー・シンはカシミールに引っ越していた。シミは前回と同様に、近所の人々のことをよく知っていたが、その人達はこう語った。

「確かに、ブディー・シンさんのところには女の子がいた。でも、その子が引っ越したあと死んだかどうかはわからない。」

ところが、後に調べたところ、すべてシミの言うとおりになっていたのである。これで、生まれ変わりの時間的なズレは全くなくなった。クリシュナは、ブディー・シンの娘、そしてシミとして生まれ変わったのである。

このシミという女の子、彼女は私に言わせると修行者である。まず、クリシュナという名はクリシュナ神からきている。これは、過去世における修行のカルマが表われた結果と見ていいだろう。おそらく、バクティー・ヨーガ（神とグルに対する献身のヨーガ）を修行していたものと思われる。このヨーガの特徴が、自分が死の病に冒されているときでさえ、息子のケガを心配しているところ、隣人のことをよく覚えているところなどによく出ている。それだけでなく、彼女は神通力も身に付けているらしいのだ。自分の死期の予知、透視能力などである。これらも修行によって身に付く能力である。

◉◉二分化されるすべての魂

『黙示録』の千年間は、このような意識を連続させるような能力を身に付けた超人類の集団が、真理にのっとってこの世を支配するというのである。その時代に先立って、成就者が続出するのは間違いあるまい。

あと、『それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかった』とされているが、私はこの千年に関しては、この期間をあてにすべきではないと思う。なぜならば、これは死人が第一の死後気絶から醒めなかったと受け取ることができ、死後気絶は長くても四十九日間であるからだ。

さて、千年が過ぎたとき、共産主義が台頭してきて大いなる勢力となり、千年間この世を支配してきた聖なる民に戦いを挑む。ゴグもマゴグも、神の民に敵対するものの象徴である。

それまでの千年間に、聖なる民、すなわち超人類は一つの都市を形成していたらしい。その都市が包囲されたとき、天から火が下ってきて敵を焼き尽くすというのだ。ここでも特殊なエネルギー兵器が使われるようである。

その後、夜摩天による裁きの状況らしきものが描かれている。次章をも合わせて考えてみると、裁きによって天界へ行くことのできる魂と地獄へ落とされる魂とに二分されるのだろう。このとき、魂の二分化のみならず、地球そのものが壊滅することが予想される。

なぜなら、私はここでゾロアスター教や密教における宇宙観を思い描くからである。それによると、いずれこの世界の空間は壊滅し、純粋な魂の世界と汚れた魂の世界という、上・下二種類の世界が形成される。そして、中間には初めは何も存在しておらず、次第に上から下降してくる魂と下から上昇していく魂のぶつかり合いが始まり、そのぶつかり合いによって新たなる創世がスタートするというのである。このときに、中間にある人間界も形成されていくのだ。

創世→壊滅→魂と世界の二分化→創世……と、このプロセスは長い長い期間をかけて繰り返されていく。

一回のプロセスで救われるのは、ほんのわずかな魂——。だから、すべての魂が救われるには、

もう無限に近いような時間が必要となることであろう。

『黙示録』の預言は、そのように繰り返されるプロセスの中の魂と世界の二分化という、近い未来に私達が経験するであろうことを描き出しているのである。

また、『死も黄泉もその中にいる死人を出し』という表現も、ちょっとわかりづらいと思われるので注釈しておくことにしよう。ここで、〝死〟とはバルドーに入った状態を指し、黄泉とは低位アストラル世界にある世界の一つのことである。したがって、バルドーに入っていた魂と、バルドーに飛び込んだショックから醒めて低位アストラル世界へとさまよい込んでいた魂が、現象界（欲六界）の最下層にある地獄へと投げ込まれた、ということになる。

飛翔！——ラトナサンバヴァの世界へ

◉◉〝新しいエルサレム〟は花嫁のように

わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった。また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである」。

すると、御座にいますかたが言われた、「見よ、わたしはすべてのものを新たにする」。また言われた、「書きしるせ。これらの言葉は、信ずべきであり、まことである」。そして、わたしに仰せられた、「事はすでに成った。わたしは、アルパでありオメガである。初めであり終りである。かわいている者には、いのちの水の泉から価なしに飲ませよう。勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐであろう。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。しかし、お

くびょうな者、信じない者、忌むべき者、人殺し、姦淫を行う者、まじないをする者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者には、火と硫黄の燃えている池が、彼らの受くべき報いである。これが第二の死である」。

最後の七つの災害が満ちている七つの鉢を持っていた七人の御使のひとりがきて、わたしに語って言った、「さあ、きなさい。小羊の妻なる花嫁を見せよう」。この御使は、わたしを御霊に感じたまま、大きな高い山に連れて行き、聖都エルサレムが、神の栄光のうちに、神のみもとを出て天から下って来るのを見せてくれた。その都の輝きは、高価な宝石のようであり、透明な碧玉のようであった。それには大きな、高い城壁があって、十二の門があり、それらの門には、十二の御使がおり、イスラエルの子らの十二部族の名が、それに書いてあった。東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があった。また都の城壁には十二の土台があり、それには小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった。

わたしに語っていた者は、都とその門と城壁とを測るために、金の測りざおを持っていた。都は方形であって、その長さと幅とは同じである。彼がその測りざおで都を測ると、一万二千丁であった。長さと幅と高さとは、いずれも同じである。また城壁を測ると、百四十四キュビトであった。これは人間の、すなわち、御使の尺度によるのである。城壁は碧玉で築かれ、都はすきとおったガラスのような純金で造られていた。都の城壁の土台は、さまざまな宝石で飾

られていた。第一の土台は碧玉、第二はサファイヤ、第三はめのう、第四は緑玉、第五は縞めのう、第六は赤めのう、第七はかんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉石、第十はひすい、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。十二の門は十二の真珠であり、門はそれぞれ一つの真珠で造られ、都の大通りは、すきとおったガラスのような純金であった。

わたしは、この都の中には聖所を見なかった。全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所なのである。都は、日や月がそれを照す必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあかりだからである。諸国民は都の光の中を歩き、地の王たちは、自分たちの光栄をそこに携えて来る。都の門は、終日、閉ざされることはない。そこには夜がないからである。人々は、諸国民の光栄とほまれとをそこに携えて来る。しかし、汚れた者や、忌むべきこと及び偽りを行う者は、その中に決してはいれない。はいれる者は、小羊のいのちの書に名をしるされている者だけである。

（第二一章）

◉◉それは、虚空の楽園

この二一章では、新しい世界の出現が預言されている。

「わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった」と、ヨハネは記した。

ここで現われる新しい世界とは、甚だショッキングな表現となってしまうが、この宇宙が壊滅した後に出現する〝虚空の楽園〟とも呼ぶべき世界のことなのである。仏教的用語を用いるならば、ラトナサンバヴァの世界（宝生界）ということになろう。

前章において、私は地球が壊滅して現象界（欲六界）が一つになってしまうということを述べたが、その状態がアフラ世界の時間にして千年続いた後、ほぼ時を同じくして宇宙の寿命も尽きてしまうということになる。宇宙は、創造・維持・破壊・虚空というサイクルのうち、今や虚空の時代を迎えたのである。この虚空の時代は、前章の創造→破壊→魂と世界の二分化→創世というサイクルをもって説明するならば、魂の二分化から次の創世にかけての途中で現われる状態なのである。さて、この虚空の世界とは、どのような世界なのであろうか？

その特色を挙げるならば、現象界とアストラル世界との区切りのない状態であると言えよう。いわゆる中間状態であり、色・空同一の世界なのだ。私の場合、この現世においてアストラル世界の住人に会うこともできるし、変化身となってアストラル世界へも行くことができるという、色・空同一を日常的に体験しているわけであるが、個人の能力に関係なく世界そのものがそうなってしまうのが、この虚空の時代なのである。そして、この虚空の時代が終わったとき、宇宙はまた新しい創世の時代を迎えることになる。

ところでヨハネは、〝聖なる都が天から下って来た〟と言っているが、これは、実際はヨハネ

の方が上昇しているのに、錯覚によってそう思ってしまったのだろう。ヨハネの表現だと、その世界があたかも天からこの世に降りてくるような印象を受けるが、そんなことはあり得ない。虚空に存在している世界なのだから。

そして、この世界のことを詳しく、「御座にいますかた」、すなわちシヴァ神が語っている。

「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。……(略)……かわいている者には、いのちの水の泉から価なしに飲ませよう。勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐであろう。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。」

(三～七節)

このことから、ここでは人々が神と共に住み、死も悲しみも痛みもないことがわかる。また、命の水も飲めるのである。それでは、どんな者が千年の後、この何とも恵まれた素晴らしい世界に入っていけるのかというと、「勝利を得る者」なのだという。これは、自己に対して勝利する者と考えてよいだろう。なぜなら、次には「勝利を得る者」とは反対に、報いを受けるべき者の条件が次のように記されているからである。

「おくびょうな者、信じない者、忌むべき者、人殺し、姦淫を行う者、まじないをする者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者には、火と硫黄の燃えている池が、彼らの受くべき報いである。これが第二の死である。」（八節）

この世界が立ち現われる以前、天界に属する魂と地獄に属する魂とに二分化されていた。長い長いアフラ世界の千年が過ぎていき、地獄の魂の中にはそのカルマを落として進化し、上昇していったものもあるであろう。私はこのような魂と、天界に属していた魂が、次なる新しい世界へと入っていけたのだと思う。

そして、いまだに「おくびょうな者、信じない者、忌むべき者、人殺し、姦淫を行う者、まじないをする者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者」と列挙されている不浄なる魂は、ここで再び地獄へと落とされるのである。ここでいう地獄は、今までの現象界にある地獄とは違い、虚空世界の地獄のことである。

◉◉公開！――ラトナサンバヴァの世界

ところで、この世界は本当に不死の世界なのだろうか？　私はそうは思わない。この記述は真実を言い表わしていないのではなかろうか？

なぜなら、不死は絶対自由・絶対幸福の世界であるマハー・ニルヴァーナにしか存在しないからである。このラトナサンバヴァの世界は確かに高い世界であるが、ここには転生があり、虚空の時代が終わったときはこの世界も消滅し、そこに存在していた魂は再び現象界へと転生していくのだ。ただし、この世界の存続期間は一カルパといわれ、想像を絶するような長い期間である（宇宙は、創造・維持・破壊・虚空を繰り返すとされている。仏典では、それらに四劫として、成劫・住劫・壊劫・空劫という名を当てている。これらをそれぞれ大カルパといい、一つの大カルパには二十の小カルパがあるとされている）。もちろん、この間地獄に落ちた魂は、そこから上がってくることはできない。

なお、このラトナサンバヴァの世界以上に高い世界が、虚空の時代に四つ存在するので、参考のために書いておくことにしよう。もし、ヨハネのステージが高かったならば、これらの世界も霊視できていたはずなのであるが……。

ラトナサンバヴァの世界に続く世界は、下から順にアクショブヤの世界（金剛界）、アミターバの世界（蓮華界）、アモガシッディの世界（羯磨界）、ヴァイローチャナの世界（如来界）となっている。このうち、アクショブヤの世界は透明な水色の光に満ちあふれている。アミターバの世界には透明な深紅の光、アモガシッディの世界には透明な緑色の光がある。そして、虚空の時代における最高の世界であるヴァイローチャナの世界は、まばゆいばかりの透明な白銀光に満ちあ

ふれているのである。

なお、マハー・ニルヴァーナは、ここよりもはるかに高い別格の世界として永遠に存在し続けるものである。

次に、この世界の構造についての説明がなされているが、この説明によっても、ここがラトナサンバヴァの世界であるということが証明されていよう。

『十二の門があり、それらの門には、十二の御使がおり』となっているが、ラトナサンバヴァの世界でも、十二の門を十二天が守護しているのだ。十二天とは、伊舎那天・火天・羅刹天・風天・帝釈天・炎魔天・水天・毘沙門天・梵天・地天・日天・月天の十二神のことである。そして、門の配置もまた記述のとおりに、東西南北にそれぞれ三つずつあるのである。

また、方形であるというところも、ラトナサンバヴァの世界の形と同じである。しかし、『都はすきとおったガラスのような純金で造られていた』という記述については疑問である。これでは、この世界の色が金色であるということになってしまうが、ラトナサンバヴァの世界は黄色でなければならない。

「何年か前のインドでの体験を思い出したよ。」

と、私はK大師に話しかけた。

「ほら、初めて超能力者であるパイロット・ババに会ったとき、君は『彼が金色の光に包まれて

いるのが霊視できる』と言っただろう。それに対して、私は『違うよ。彼のエネルギーは黄色だ。金色のように見えるのは、君のステージがまだまだ低いからだよ』と答えたんだったね。」

「はい、そうでした。」

「この『ヨハネの黙示録』の記述もそれと同じだ。つまり、ヨハネのステージが低かったから、黄色を金色と見間違えたんだろうね。君の場合はあれから修行も進み、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、マハー・ムドラーと成就したから、今では私と同じように正確にエネルギーを見ることができるけどね。」

あと、『イスラエルの子らの十二部族の名が、それに書いてあった』とか、『小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった』などと、キリスト教色の強い記述があるが、これらはヨハネの錯覚か、あるいは後世の付け加えであると思われるので、これまで同様に無視してよいだろう。

「わたしは、この都の中には聖所を見なかった。全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所なのである。都は、日や月がそれを照す必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあかりだからである。」（二一―二三節）

ラトナサンバヴァの世界に、聖所（神殿）がなくて当たり前なのである。霊性の高い魂を持つ人々が集っており、だれでも神にまみえることができるのであるから。

◉◉ 聖なる都――限りない神の栄光のもとに

御使（みつかい）はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は、神と小羊との御座（みざ）から出て、都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があって、十二種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕（しもべ）たちは彼を礼拝し、御（み）

顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する。

彼はまた、わたしに言った、「これらの言葉は信ずべきであり、まことである。預言者たちのたましいの神なる主は、すぐにも起るべきことをその僕たちに示そうとして、御使をつかわされたのである。見よ、わたしは、すぐに来る。この書の預言の言葉を守る者は、さいわいである」。

これらのことを見聞きした者は、このヨハネである。わたしが見聞きした時、それらのことを示してくれた御使の足もとにひれ伏して拝そうとすると、彼は言った、「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書の言葉を守る者たちと、同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい」。

またわたしに言った、「この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近づいているからである。不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」。

「見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう。わたしはアルパであり、オメガである。最初の者であり、最後の者である。初めであり、終りである。いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、自分の着物

を洗う者たちは、さいわいである。犬ども、まじないをする者、姦淫を行う者、人殺し、偶像を拝む者、また、偽りを好みかつこれを行う者はみな、外に出されている。

わたしイエスは、使をつかわして、諸教会のために、これらのことをあなたがたにあかしした。わたしは、ダビデの若枝また子孫であり、輝く明けの明星である」。

御霊も花嫁も共に言った、「きたりませ」。また、聞く者も「きたりませ」と言いなさい。かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい。

この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは警告する。もしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる。

これらのことをあかしするかたが仰せになる、「しかり、わたしはすぐに来る」。アァメン、主イエスよ、きたりませ。

主イエスの恵みが、一同の者と共にあるように。

（第二二章）

◉◉見よ！　裁きの時は近い

ここでは、このラトナサンバヴァの世界の様子がいっそう詳しく述べられている。

「水晶のように輝いているいのちの水の川」とは、神と小羊の御座から出ているということでもわかるように、神と小羊のエネルギーの入っている水である。すなわち、甘露水のことを指しているのだ。

私が自分のエネルギーを入れた水が、光を発する水へと変化することは、前にも書いた。それと同様に、神と小羊のエネルギーによって、水晶のように輝いている水が都の大通りの中央を流れているというわけである。

「いのちの木」とは、ラトナサンバヴァの世界にある如意樹とも呼ばれるものである。この世界の人々は、いのちの木の実のみを食べて生きることができる。そして、いのちの木の実は人々に至福と歓喜の状態をもたらすのである。

なお、「その木の葉は諸国民をいやす」というのは、この世界のまぶしい光に耐えられない一部の人々のための木陰を作っているということであろう。

高い世界へ行けば行くほど、光が強くまぶしい。そして、ステージの高い魂ほど、強い光に耐え得ることができるようになっているのである。ラトナサンバヴァの世界では、ある一定レベル以上の魂を持つ人々が住んでいるのではあるが、それでもそのステージに差があるのだろう。だから、下の方の魂には木陰が必要なのだと思われる。

最後に、御使はヨハネに言う。

『「この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近づいているからである。不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ。」』（一〇～一一節）

この言葉こそ、現代に生きる私達に向けて発せられた警告ではなかろうか？　神によるカルマの清算のための、裁きの時が近付いているというのである。

私には、今既に魂の二分化が始まっているように思われる。『不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ』という表現どおり、世の中は両極端に移行しているようである。つまり、今や文明の爛熟期を迎え、精神的に堕落し切ってしまったようなタイプの人間が多い中で、一部の人間は正しい生活をし、修行をしながら、真摯に魂の向上を考えているのだ。やはり、シヴァ神が予定された時は近いのだと考えなくてはなるまい。

なお、本章の最後の部分『わたしイエスは……』から後は、語調も内容も違っており、明らかに後世の偽作である。したがって、その解読も省かせていただく。『ヨハネの黙示録』に対する私の解読は、ここに終了した。

第四章　救済のシナリオ

☆座談会出席者

麻原彰晃尊師（私）
K大師
M大師
S大師
V大師（『滅亡の日』のS君）

◉◉正確に『聖書』を訳すために

私「前書『滅亡の日』から始まった『ヨハネの黙示録』の解読もようやく完結したわけだけれど、今日は、『滅亡の日』から『滅亡から虚空へ』を通じての全疑問に答えていこうと考えている。特にV大師は、いろいろと予言関係の雑学といおうか、いらぬ知識をたくさん持っているだろうから、それをまずつぶしていきたいね。じゃあ、まずV大師の質問からいこう。」

V大師「はあ、では最初に七つの帝国についてなんですが、イギリス帝国が今も存続していて、ドイツ帝国、フランス帝国がなくなっているというのは、この二つの国が今は共和国になっているという意味ですか？」

私「それだけではなくて、もう一つは植民地を持っていないということだ。」
V「今は持っていないということですか？」
私「そうです。その点、イギリスについて言うならば、かつての大英帝国は解体したものの、四十五カ国からなるイギリス連邦が存在しているよね？」
V「ああ、そういうことですか。わかりました。あと、『聖書』の新世界訳というのがありますよね。この新世界訳というのがどういう本なのか、全然わからなかったんですが――。」
私「それは、古代ヘブライ語、アラム語、ギリシャ語の本文と照合しながら、一九七一年版の英文新世界訳『聖書』から訳されたものです。」
K大師「より正確に『聖書』を訳すために、参考にしたんです。」
V「そうでしたか。」

◉◉ゴグ、マゴグの解釈――まずは観念を取り除くこと

私「他には？」
V「第二〇章のゴグ、マゴグのところがちょっと引っ掛かったんですが。ゴグ、マゴグが出てくるのは『エゼキエル書』なんですけれども、一般的にはこれはソ連を指していると解釈されていますよね。その点、尊師は、ゴグ、マゴグというのが何かということを具体的に書かれてい

ないのですが。」

私「まず、ゴグ、マゴグが出てくるのは、『エゼキエル書』だけではないよ。『聖書事典』を見てもらえばわかるけど、他にもその名は出てくるし、ソ連のことだなんて一言も書かれていない。私はその『聖書事典』で、ゴグ、マゴグがどういう形で取り扱われているか、ということにのっとって文章を書いているわけだね。そして断定していないのは、今回の主旨に合わないということからだ。」

V「だけど、『黙示録』とか『聖書』の預言とかに興味のある人間にとって、ゴグ、マゴグというのは、非常にポピュラーなところですよね。みんな、そういう観念がありますよね。」

私「それはね、例えばノストラダムスの大予言で、『一九九九年七の月、恐怖の大王が降ってくる』と。あれと同じじゃないかね。この詩は、実はノストラダムスの生前には発表されていなかったわけで、ひょっとしたらノストラダムスの作ではないかもしれない。これと同じように、日本でそれが取り沙汰されているだけであって、実際はゴグ、マゴグというのは、普通のとらえ方ができるんだと。だから私は、最もノーマルなとらえ方でアプローチしたと、ね。そして、その出典を明かせと言えば、それは『聖書事典』であり、『聖書事典』を読んでいただければ、一目瞭然であるというのが、私の答えだね。」

V「――ゴグ、マゴグというのが何かということが具体的に書かれていなかったのも、私は不満

なんですが。」

私「さっきも言ったように、ゴグ、マゴグが何か、というのは必要ないと思ったからだよ。文章はどうなっている？　ちょっと、だれか読んでくれるか？」

V「読みます。

『千年の期間が終ると、サタンはその獄から解放される。そして、出て行き、地の四方にいる諸国民、すなわちゴグ、マゴグを惑わし、彼らを戦いのために召集する。その数は、海の砂のように多い。彼らは地上の広い所に上ってきて、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを包囲した。すると、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽した。そして、彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた。そこには、獣もにせ預言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめられるのである。』（第二〇章七～一〇節）」

私「それに対して、解釈はどうしている？」

K「『ゴグもマゴグも神の民に敵対する者の象徴である』――。」

私「でしょ？　それで十分だと思うけどね。つまり、神に敵対する者の象徴であると。じゃあ、『聖書事典』ももう一度調べてみようじゃないか。いったいゴグ、マゴグはどうなっているのだろうか、と。K大師、読んでくれ。」

K「ゴグ――①ルベンびとヨエルの孫。――『歴代志上』の五章四節。――②マゴグの王でメセ

クとトバルを治めた君主。イスラエルに襲いかかる最後の敵、主の干渉により敗北を預言されている人――『エゼキエル書』――。ゴグの語源は明らかでないが、ルデヤでBC六六〇年前後に王であったギゲスを連想させる。後には、神の国と神の民とに敵対する反メシヤの象徴とも解される――『黙示録』の二〇章八節。」

私「だから、こういうことが基礎になっているわけだ。じゃあ、マゴグは？」

K「マゴグ――ヤペテの子孫で――これは『創世紀』一〇章二節――、ある時代に黒海付近に住んでいた人々――『エゼキエル書』、エゼキエルは異教主義と神の国との最後の戦いを、マゴグ王の軍勢によるイスラエル侵入およびその滅亡という形で描いているが、それが『ヨハネ黙示録』に取り入れられている。」

私「わかるよね。別に『エゼキエル書』だけに載っているんじゃないんだよ。『歴代志』にもあるし。」

V「はい。」

私「だからね、V、私はこう考えているわけだよ。『ヨハネの黙示録』に対する預言もそうだし、あるいはノストラダムスに関してもそうだけど、すごい観念でみんな見ていると。だから、観念というものがある限り、正しい解釈はできないと。私は、観念からの脱却にポイントを置いたと。やはり古典的なものというのは、一応オーソドックスなものだから、それをもととして

解釈した方が正しいと思って、本筋から外れるものというのは書いていないんだね、意図的にね。」

V「『エゼキエル書』であった、メセクとトバルというのは、メセクがモスクワとか、トバルはトボルスクとかいわれていますけれども、あのへんのところの解釈も間違っているということ？」

私「間違っているというよりも、それは意味がないということだ。つまり、どういうことかというと、例えばラーメンを作るとしてね、そのラーメンに野菜を入れると。そのときに、ニンジンを十五切れ入れるか、あるいは十六切れ入れるかくらいの問題だということ。そんなことよりも本質――どういう形で人類が滅亡し、――滅亡しというよりも、新しい人類に移行していくかということに焦点を合わせなくてはならないんだ。そこに焦点を合わせない限り、いいものができない。いらぬ末節ばかりを追い掛けていたら、ページ数だけ増大して、しかも読みづらいものになってしまう。――これが私の見解です。で、十分だと思うんだよね。そのゴグ、マゴクがどうこうという一節もちゃんともう文章の中にね、『地上の広い所に上ってきて、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを包囲した。云々……』というのがあるよね。だから、それで十分だと思うんだよ。それから、私の解釈でいくと、その千年というのはアフラ世界の千年だから、果たしてその千年後にソビエトという国が存在しているのかな、と思うね。アフラ世界の千年というと、ものすごく長いよね。M大師、どう思うか、君は？」

M大師「今までの歴史を見たら、それだけ長い間、同じ国が存続したというのはないですね。」

私「あり得ないよね。」

V「いや、私が思ったのは、――この文脈からしますと――ゴグ、マゴクというのは、そういうソ連とかという解釈でなく、別の解釈を採っていますよね。だから、そのへんをはっきりと打ち出すべきだったかな、という感じがしたんです。一般の、要は預言書ファンみたいな、預言書マニアみたいな人間を納得させるために……。」

私「あのね、それに対しては二つの反論があるんだよ。一つはね、預言書ファンなんかどうでもいいということだ。そんなのはたくさん預言書を読んで、頭を錯乱させて、その……要するに魔境に入っているだけだ。そんなのは相手にしてもしょうがないと。」

V「ハッハ、耳が痛いですね。」

私「今のが第一。それからもう一つはね、いろんな本を読んで、この本は正しくないとか、否定する意味がないんじゃないかと。否定してもしょうがないと。つまり、私の見解はこれであると主張すればそれで十分ではないか、と思うんだよ。まあ向こうがね、『これはこうじゃないか』と攻めてきた場合は、それに対しては当然ちゃんとお答えしなきゃなんないけど、そうじゃない場合は、あの本ではこう言っているけど、この本ではこう言っているけど……なんていうのは意味がないということだ。」

◉◉魂の二極化――宇宙が破壊された後の世界

V「はい、わかりました。それとあと一つ。虚空の世界というのがありましたよね。宇宙の創造、維持、破壊の後に虚空が来ると。そうした場合ですね、虚空の時代においても、天界の方に上昇していく魂と地獄に落ちていく魂と二種類あるわけですよね？」

私「いや、もう虚空では固定です。」

V「えっ？」

私「虚空期は固定なんだよ。だから、虚空期に地獄に入っている魂というのは、永遠に地獄なんです。したがって、一カルパの間地獄に落ちたままなんです。」

V「ウップ……。じゃあ宇宙は――。」

私「ないんです。」

V「破壊でなくなってしまって――。」

私「要するに、完璧（かんぺき）に苦悩だけの魂の世界と、安らぎ、あるいは徳によっては喜びだけの世界に分かれます。」

V「あっ、そうですか。二極化するわけですか。」

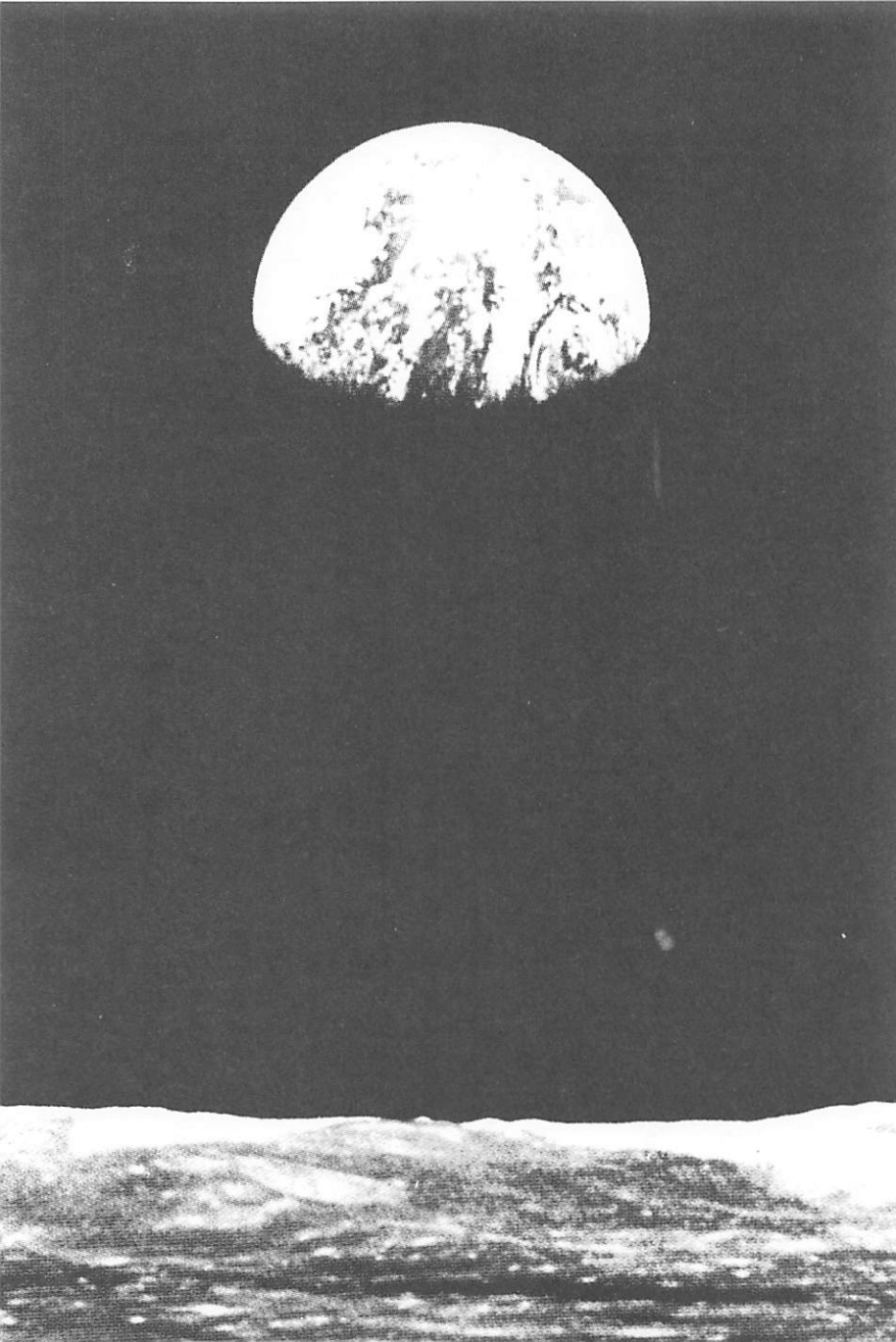
私「二極化します。完璧に二極化します。だからね、そのために人の魂も両極化するんです。悪業を積む者は徹底的に悪業を積むし、善業を積む者は徹底的に善業を積みます。今の時代を見

ても、もうその前兆が出ているのはわかるよね。現代は道徳も何もあったもんじゃない。ところが、一方では、小さいときから殺生もしないで生きている少数の子供達がいるよね。二極化し始めているんです。それから、一つだけ仏典で正しくないことがあるんだよ。上の世界の魂は少なくて、下は多いと言うけれど、あれは正しくないと思う。だいたい、どっこいじゃないかと考えています、私は。その理由は、人間界を基準にしているから。つまり、人間界では質の悪い魂が多いから悪業を積む者も多い。しかし、人間よりも上の阿修羅はどうかと言ったら、もっと功徳を積んでいる。じゃあ、天界の中の第一天界はどうかといったら、それよりもっともっと功徳を積んでいると。つまり、落ちていく魂は少ないんだね、上に行けば行くほど。」

V「しかし、もともとの構成比が違いますよね。例えば天界が百パーセント上に行ったとして、地獄の百パーセントが下に行ったとしたら、それだけでもう上と下の比率は大きく違いますよね。」

私「いやあ、それについてはどう言ったらいいかな？　まず、動物界、餓鬼界、地獄界というのは、確かに魂の数としては多い。それはOKだよね。で、人間界以上は少ないと。それもOKだよね。しかしだ、今までに救済された魂の数はどうだという質問に対して、どう答えるか？　つまり、言い方を換えると、アフラ世界やマハー・ニルヴァーナに住んでいる魂だよ。ほんの一握りの魂ではあるが、確実に救われていく魂があって、最後にはこの地獄界はゼロになっちゃうわけだからね。餓鬼界も……。」

M「既に救済されている魂を含めて、上部に属する魂と考えるわけですね。」
私「そういうことだ。だから、これから迎える次の虚空期に五分五分というんじゃないよ。次の虚空期は下が多いかもしれないけれど、あるいは上が多いかもしれないけれど、それはわからないと私は言いたいんだ。魂が存在しているのは、この欲六界の六道だけじゃないんだよ、っていうこと。」
V「世界をそういうふうに限定してはいけないと……。」
私「そうそう。真我というのは生じもしないし滅しもしない。絶対数は変わらないんだ。それが——何て言うのかな——決められた規定の中でのその経験、修行を越えて少しずつ救済されていくわけだけど、もう既に救済されている魂はあるんだということね。この魂は二度と落ちることはない。ただ、欲六界の魂を見たならば、下に多いと、そういうことなんだ。」
M「そうすると、尊師のすべての魂を引き上げるという、その計画から見て、まあ半分くらいは済んでいるのではないか、という見解ですか？」
私「いや、まだ実際は下の方が多いだろうけれども、しかし、それは言い切れないということだ。そして、私は上と下とを比較する場合、卒業生——つまり既に救済された魂を含めるべきだと考えるから、一概に六道即優位とは言えない、ということを言いたかったんだ。少なくとも二千五百年前に仏陀釈迦牟尼が登場なさったことによって救済された魂もあるだろうし、釈迦牟



尼以前に登場した仏陀によって救われた魂もあるはずだからね。『阿含経』によると、釈迦牟尼以前に七人の仏陀がいたそうだ。」

V「あと、続けていいですか？」

私「はい。」

V「ラトナサンバヴァの次の世界として、アクショブヤ、アミターバ、アモガシッディ、ヴァイローチャナが挙げられていましたよね。ところが、信徒の方が持っているのは、『マハーヤーナ・スートラ』（麻原彰晃著・オウム出版）の宇宙観なんですよ。上位アストラルがあって、上位コーザルがあってと。その対応というのは？」

私「あれは、現在存在している世界の宇宙観じゃないか。破壊されたときの宇宙観は、この『滅亡から虚空へ』で初めて出したんだったよね？　M大師？」

M「ええ、初めてです。」

V「ああ、これは宇宙が破壊された後の世界……。」

私「もちろん、対応させられないことはないよ。『マハーヤーナ・スートラ』の、どの世界であると。しかしね、例えばアストラル世界ですら、凡夫の人智を越えた世界なんだよ。ましていわんや、コーザル世界とアストラル世界がダブッている、この虚空の世界の話はできないよ。だってね、色と不死に近い生命があるから、アストラル世界と言えるだろうと。しかし、一方

で宇宙が破壊されるときは、アストラルも破壊されるという定義がある。そうすると、この二つは矛盾するだろう？　ところが、凡夫の頭で考えて矛盾することでも、それはそれで存在しているんだよ、この虚空の世界には。」

V「あまりにも高い世界なんで、ピンと来ないというのが正直な感想です。」

私「それは経験しなきゃわからないよ。」

V「私の疑問はこんなところだったんですけれど。」

◉◉神の名の意味合いは？

私「じゃあ、S大師は？」

S大師「私はまあ、あのエホバが出てくるところで一つ疑問がありますね。尊師が書かれた文章を読みます。『……この賛美の声の中の神という言葉を、神エホバとしている《ヨハネの黙示録》があって、賛美の言葉はこう書かれていた。――あなた方はヤハを賛美せよ。全能者なるわたしたちの神エホバは、王として支配を始められたからである――と。ところがである。本当はエホバという神は存在しないのだ。』ということで、尊師はヤハウェという神の名を誤読することから生じた、間違った名がエホバであると言っておられますね。そして、『正しい名を使わない限り、神を称えることにもならないし、届きもしない』と。しかし、以前尊師は説

法において、――信徒さんから質問があったわけですが、――意味合いが重要であって、名前はどうでもいいんだという表現をされたことがあるんですけれども。」

私「何の名前だ？」

S「インドのヒンドゥー教でいわれているシヴァ神と、オウムのシヴァ神……。」

私「それは、正確にその問答を教えてほしいね。……私が説明したのは、こういうことだったと思うよ。オウムでいうシヴァ神というのはね、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の状態にある方であると。そして救済者を助けてくれる方で、もう絶対的な四つの無量心をお持ちの方であると。これがオウムのシヴァ神なんだね。そして、ヒンドゥーのシヴァ神と、ずれているところもあるし、まるっきり同じところもあると。――このずれている部分は、実はヒンドゥー教徒がシヴァ神の真実の姿をとらえきれなかったがために生じたものなんだけど、オウムでのシヴァ神とヒンドゥー教でのシヴァ神が違っているわけだ。その場合、名前が同じでもどちらのシヴァ神を指しているのか、帰依しているのか、ということが重要であって名前は関係ないと。こういうことを話したんだと思うんだよね。」

S「あっ、そういうことでした。」

私「『黙示録』ではヤハを賛美せよ、と言っている。賛美というのは、マントラを唱えるのと同じなんだよ。マントラについていうならば、オウムでは、わざわざインドに行って、ものすご

い大金を投入して一つのマントラを得てくる。あるいは、ものすごい時間を要して一つのマントラを習得してくる。マントラは日本にもあるよね。それなのに、どうしてこんなにしてマントラを習得してくるのかといえば、そのヴァイブレーションを重要視しているからに他ならない。例えば、日本では、『オン・バイタレイヤ・ア・ソワカ』と言っていると。あれでは意味ないんだよ。それが、日本の密教界が伸びない、救済ができないと、私が思っているゆえんなんだけどね。どういうことかというと、例えば『オン・バイタレイヤ・ア・ソワカ』というのが、もとはどういうマントラであったのかということを考えるならば、『オーム・マイトレーヤ・スワハ』なんだ。この場合は、マイトレーヤを賛美しているわけだけれども、やはり、正確な発音、正確なヴァイブレーションを使わない限り、通用しないというのが、私の見解なんだよ。」

S「要は、賛美というところに問題があったと考えればいいわけですね。」

私「もう一つ付け加えておこう。私は、ヤハウェという言葉自体も、本当は正しくないと思っているわけだね。シヴァ神と同一なんだから、ヤハーでなければならないと。『新世界訳』では〝ヤハ〟という言葉が出ているけれど、本に引用している『聖書』が日本聖書協会のもので、ヤハウェとなっていたからそれを一応用いたけど、――でも正確にはヤハーですよ、これは。正確な信仰と正確な結果を得るためには、一つ一つを正確にとらえなければならない。」

V「ヤハーがシヴァ神のことをいっているとしたならば、なぜ言葉が違うんでしょう?」

私「それは簡単だよ。要するにヤハーというのは世界を表わしているんだよ。シヴァ神の住んでいらっしゃる、ね。つまり、シヴァ神の住んでいらっしゃる世界を賛美しているんだよ、あれは。ヤーという世界とハーという世界があるんだね。これは君達も知っているとおり、ヤム、ハムというのと同じだよ。そこからきているんだよ。なぜ私がそれをシヴァ神と同一視しているかというと、ヤーそのものがシヴァ神だと考えているから。あるいはハーそのものがシヴァ神だと考えているから。それは、『私はオウムに帰依します』というのと『私は麻原に帰依します』というのが、同一の意味であるのと全く同じことだ。だから、根拠なくして、何でもかんでもシヴァ神に結び付けているわけじゃないんだね。」

V「わかりました。それを聞くとわかりやすいですね。」

◉◉真理の系統——一つの大きなルーツ

私「M大師、質問はありますか?」

M「はい。今回初めてゾロアスター教についての話が出てきたわけですけれども、——それで同じ真理を説いているということがわかったわけですよね。で、何が聞きたいかというと、一つはなぜそのゾロアスター教が今廃れているのか、ということが一つ。もう一つは、つまりここで、ゾロアスター教が出てきた意味合いですね。」

ヤム
バム

私「まず、私の転生がアフラからの転生だったんだけど、そのアフラがどういう世界であるか、ということをまず示す必要があったと。そのためには、ゾロアスターにまでさかのぼらなければならないと。しかし、ゾロアスターにまでさかのぼった場合、次の疑問が出てくると。アフラは阿修羅じゃないか、というね。それについては本文の中でも書いてあるけれどね、インドにおいて誤解されることにおいて、本当のアフラが人々の概念から消されてしまったんだね。そして、その代わりに阿修羅が登場してしまったのだった。で、私としては、それをまずもとに戻す必要があったんだ。そして、人々に本当のアフラ世界というものを知ってもらわなければならなかったんだ。それは、私がこの人間界に生まれてきた大きな役割の一つだったから。それに加えて、オウムの修行のタントラ・ヴァジラヤーナのもとであるマントラ、これがゾロアスター教から出たのだということも確認できたんだったね。つまり、今のオウムの、というより、真言（マントラ）秘密金剛乗（こんごうじょう）の修行を行なっている教団の教えが、仏陀釈迦牟尼以前の……、ゾロアスター教は何年頃だったかな？」

M「BC一二〇〇年となっていますね。」

私「そうか、ありがとう。BC一二〇〇年に成立したゾロアスター教に、起源を発しているというわけだ。そして、もっと正確な言い方をすれば、ゾロアスター以前にもこの系統は存在していたということなんだね。」

M「一つの大きなルーツであるということですね。」

私「そうだ。一つの大きなルーツであると。だから、今のオウムの根本をなしている修行体系というのはものすごく古いんだと。それが今明らかになったということは、私は大きな歴史的発見だと考えているわけだ。」

M「そうですね。しかし、それなのにすごく軽んじられていますよね、ゾロアスター教というものは――。」

私「そうそう。ところが実際はそうではないんだね。しかし、廃れてきたのは当然であると私は思うね。なぜ当然であるのかというと、人間の魂が下降傾向にあったからね。人間が動物化、餓鬼化、地獄化していっているわけだから、当然高い世界のデータというものは受け入れられずに消えていくわけだよ。そして廃れてしまった。しかしね、人類の最後の審判を前に、最後の救済の組織であるオウムが現われた以上、短い期間に真理に到達することができるはずである、と。そして出てきたのが『滅亡の日』、そしてその『滅亡の日』に続く本書『滅亡から虚空へ』だったんだ。」

◉◉後世の加筆を探る——徹底した資料の吟味

V「『黙示録』のですね、後世において加筆された部分があるということなんですが、それはどういうところで判断されたのでしょうか?」

私「まず、文章が違う。」

V「よくわからないんですけれども。」

私「いや、はっきりわかるよ、読んでいて。VにしろSにしろ編集をやっていたら、それがわからないようじゃしょうがないね。例えば二二章。『私イエスは、云々……』から全然タッチが違うから。」

S「こうは考えられないのですか? 先程書いてありましたけれど、これは、もともとギリシャ語を英語に訳して、英語を日本語に訳しているわけですよね。だから、その日本語を見ても判断できないんじゃないですか?」

私「しかし、訳すときは、原文に忠実になるわけだよね。しかし、そこの部分だけの文章が違っているという問題。そんなことあり得ないでしょ。そうすると、まずそこから落とせると。それから、第二番目としては、つじつまが合わないところがあるんだね、瞑想するとはっきりするけれど。そこを落とせると。それから第三としては、直感的なもの。これはおかしい、と。その三つが落とす、つまり加筆だと判断する材料だと言えるね。でも、私は直感的なものとい

うのを極力避けているんだよ。おかしいと思っても、一応は解釈してサッサと通り過ぎた。ただ、その文章上、間違いなくおかしいのは外した、ということなんだ。」

M「いろんな訳で同じようにおかしかったら、やっぱり訳者の個人的なものではないと思いますね。英語を経由していないものもあるんだし。」

私「それはM大師の言うとおりだと思うね。」

S「確かに同じ『聖書』でも、いく種類もの訳があります。しかし、一冊だけしか知らなかったら、訳のことまで考えられませんよ。」

私「そこは、こちら側がサービスしすぎちゃいけないんじゃないか?」

M「尊師と編集の立場の大きく違うところですよね、それは。こういうふうに思う読者もいると思うんだがどうだろうかとか、そういう質問が出てくるのは。」

私「私は、そんなことで紙面を使いたくないよ。つまり、本当にそこまで知りたかったら、それは自分で調べるべきであってね。現に、私は数冊の『聖書』を使っていると言っているわけだから。例えば、いろんな本屋さんに行って探し回れば、いろんな『聖書』があるわけだから、自分で手に入れて比較してみてほしい。そして、麻原の言っているとおりだな、というのを納得してほしいね。」

S「よくわかりました。」

私「私の場合、例えばいったんノストラダムスの予言を解読しようと決めたら、その取り組む姿勢が全く違うと思うね。実際に、予言好きのV大師がやろうとするやり方と全く違っていただろう、V大師？」

V「確かにそうです。私はどうしても日本で出版されている〝原典〟といわれているものや、いろいろな研究者の解釈に目がいってしまう。ところが尊師は、今日本で出ている本を一切無視なさいました。そしてフランスにまで飛び、ノストラダムスの生前に出版された『諸世紀』の初版本のマイクロフィルムをはじめ、膨大な資料を入手されましたからね。この初版本と一五五七年版は、後世の加筆のない本物であるということでしたよね。ノストラダムスの時代のフランス語についての辞書のコピーも合わせて持ち帰るという徹底ぶり。間違いなく、ノストラダムスが彼の言葉を使って書いた詩を、尊師自ら十六世紀のフランス語用の辞書を使って訳す、と。ここまでできる人は他にいませんよ。」

私「『ヨハネの黙示録』についても同じことが言えるよ。その一つの例が、数種類の『聖書』だよね。みんな私が日本語訳をもとに進めてきていると思っているかもしれないけど、英語訳も見ながらやっているんだよ、英文ではどうなっているのか、と。その英語も直接ヘブライ語とか、あるいはアラビア語とか、ギリシャ語とかから訳されているものを用意した。そうした上で、文章のタッチが他の部分と違っているところを、後世の加筆だと判断したということだ。

例えば、二二章を読んでくれるか、私が落とした部分――。」

V「『わたしイエスは、使をつかわして、諸教会のために、これらのことをあなたがたにあかしした。わたしは、ダビデの若枝また子孫であり、輝く明けの明星である。』（一六節）」

私「――ってなってくるよね。それじゃあ、今度はその前の文章を読んでみて。その数行くらい前から。」

V「『いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、自分の着物を洗う者たちは、さいわいである。犬ども、まじないをする者、姦淫を行う者、人殺し、偶像を拝む者、また、偽りを好みかつこれを行う者はみな、外に出されている。』（一四～一五節）」

私「うん。そこから、『わたしイエスは……』と、急にテンポが変わるよね。」

V「そう言われてみれば、確かにそうですね。」

私「わかるよね、言ってることは。おかしいよね。だいたい一人の人間が文章を書くとして、テンポが変わるはずないよね。」

V「うーん。ローマ帝国が、キリスト教を国教化するために『聖書』を整えましたよね。その時点でも、かなり手が加わっていますよね。」

私「加わっていると思うね。それから、もっと後世でも加わっていると思うね、いろいろと。現に、６１６の獣の数字がバイブル（聖書）を表わしているというんだから、そのバイブルを全

面的に信用するのは、軽率だと私は思いますね。」

V「それにしても、６１６がバイブルだという解読はすごかったですね。だれ一人気付いていませんでしたからね。」

私「あれ？　何か編集の方で、同じことを言っている本があるとか言っていなかった？」

M「あ、それは私です。ある信徒の方からの情報なんですが、宇宙人と交信した交信記録を出している会があって、そこが同じ解釈に立っているということだったんです。それは、セムヤーゼという宇宙人と話した結果だそうですが。」

私「もしそれが真実だとしたならば、それと私の読解した智慧とは同じだということになるね。」

M「――要するに、それではですね、キリスト教が獣の宗教であると断定して、で、６６６を獣の数字と言っておるわけです。ただ、彼らは６６６が実際は６１６であったということには気付いていませんから、解釈は論理的ではないんですよ。それでも上っ面だけ見ている人にはですね、解読結果が同じであると見えるでしょうね。」

私「ああ、実際には解読プロセスが全く違っていたのか。――はい、次の質問は？　S大師はどうだ？」

S「な、ないです。」

私「ない？　M大師は？」

M「疑問という意味ではないです。」

◉◉第一次大戦の補記

私「じゃあ、少し補記しなきゃならないところがあると思うんだけど。『滅亡の日』の第一次世界大戦のところで走り過ぎちゃったから……。」

V「第一次大戦に関しては、比較的述べられているんじゃないですかね。」

私「いや、簡単に過ぎた気がするね。例えば飛行機の描写とか。M大師読んでくれ。」

M「第五のラッパのところですね。

『第五の御使が、ラッパを吹き鳴らした。するとわたしは、一つの星が天から地に落ちて来るのを見た。この星に、底知れぬ所の穴を開くかぎが与えられた。そして、この底知れぬ所の穴が開かれた。すると、その穴から煙が大きな炉の煙のように立ちのぼり、その穴の煙で、太陽も空気も暗くなった。その煙の中から、いなごが地上に出てきたが、地のさそりが持っているような力が、彼らに与えられた。彼らは、地の草やすべての青草、またすべての木をそこなってはならないが、額に神の印がない人たちには害を加えてもよいと、言い渡された。彼らは、人間を殺すことはしないで、五か月のあいだ苦しめることだけが許された。彼らの与える苦痛は、人がさそりにさされる時のような苦痛であった。その時には、人々は死を求めても与えら

れず、死にたいと願っても、死は逃げて行くのである。これらのいなごは、出陣の用意のととのえられた馬によく似ており、その頭には金の冠のようなものをつけ、その顔は人間の顔のようであり、また、そのかみの毛は女のかみのようであり、その歯はししの歯のようであった。また、鉄の胸当のような胸当をつけており、その羽の音は、馬に引かれて戦場に急ぐ多くの戦車の響きのようであった。その上、さそりのような尾と針とを持っている。その尾には、五か月のあいだ人間をそこなう力がある。彼らは、底知れぬ所の使を王にいただいており、その名をヘブル語でアバドンと言い、ギリシヤ語ではアポルオンと言う。』（第九章一～一一節）」

私「私がイナゴを飛行機と断定した背景というのは、昔の飛行機というのはイナゴに似ているんじゃないかと思ったからだ。M大師、これについてどう思うか？」

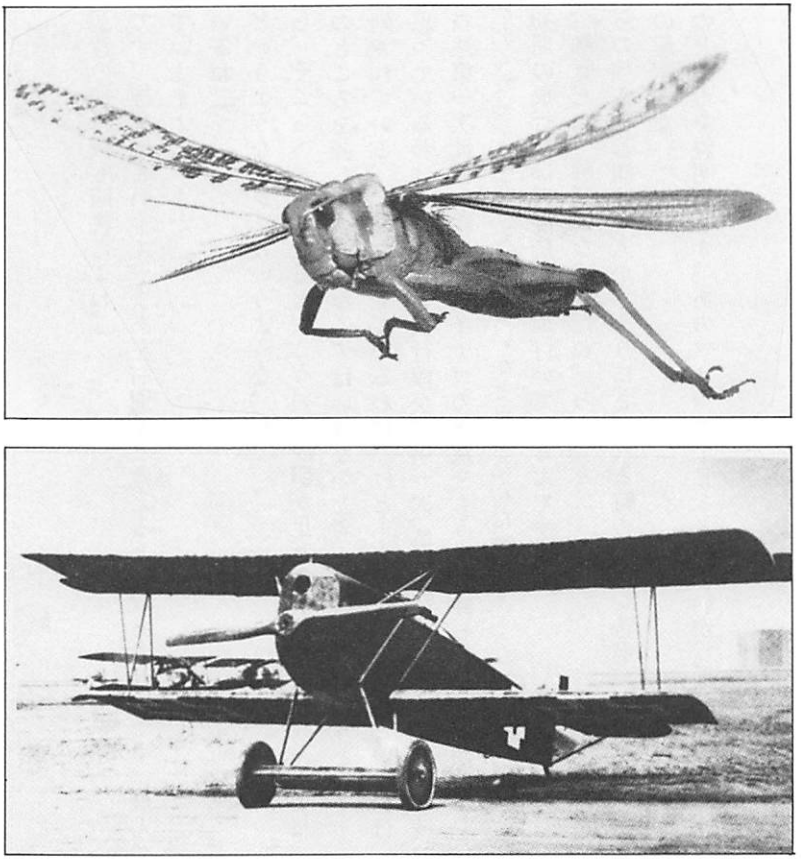
K「昆虫図鑑とか出してみたらどうですかね？」

V「そのへんのところは文句のないところだと思いますけどね、私は。」

M「まず似ているのは――プロペラ機で頭が四角いですよね。そのへんは、イナゴとそっくりですよね。」

私「それと羽の感じが似ているよね？」

M「ええ、胴体が四角くて、昔の布張りのね、飛行機の胴体とそっくりです。羽ですが、昆虫の羽はご存じのように四枚ありますよね。」



●イナゴと旧型飛行機

私「あれ、昔の飛行機も四枚だよね。」
M「そうです。複葉機といって、まあ左右別々と考えると四枚あるわけです。飛んでいるときの音が似ていますよね、また。」
私「似ているね。」
M「ブーというような、ジーというような、ね。」
私「だから、そこらへんを考えると、こういう説明が足りなかったと思うんだよね。どうして私がここのところを詳しく説明しなくてはいけないと考えたのか、というとね――『黙示録』は時代配列されている、と私は考えているわけだけど――飛行機の登場というのは、一つの区切りだと思っているわけだよ。その飛行機が、第一次、第二次、第三次世界大戦と続いていくのだから、当然第一次世界大戦の要のイナゴの解釈をもう少し詳しくしておかないと、その後の信憑性が弱くなってしまうんじゃないかと思ったんだね。」
M「で、初期の飛行機は機関銃が二つ付いているんですね。」
私「ああ、触覚だね。触覚的な感覚だね、ちょっと。」
S「『彼らの与える苦痛は、人がさそりにさされる時のような苦痛であった』とありますね。」
K「そこの解釈はないですね。」
M「そこのところを説明します。あのフォッカーE3というのが、世界で最初にプロペラの回転

と機関銃の発射とを同調させて、プロペラの間を通して弾丸を前方に撃てるようにしたんですね。それまでは撃ったらプロペラに当たる可能性がありまして、大変危険だったわけです。」

S「なんでそれがサソリなんですか？」

私「要するに、サソリにチクッと刺されるよね。その痛みと鉛が撃ち込まれたときの痛み――、しかも死にはしないんだよ、すぐには。それからもう一つあるんだよ。M大師の話だと、サソリはこうシッポを反らして刺すんだって。」

M「そう、前に持ってきて刺す。」

私「ここも、飛行機の機関銃が前に向いているのと似ているよね。」

M「この頃の機銃は、胴体の中心より上にありましてね、それも同じですよね。」

◉◉いきなりジェットエンジン？

V「第一次世界大戦では、今話してきたようにプロペラ機ですね。ところが、『そのかみの毛は女のかみのよう』という言葉の説明が、『ジェットエンジンが開発されて後の飛行機雲』となっていますよね。ここにだけジェットエンジンが出てくるというのは、違和感があるんですけれども。」

私「うん、それについてMどうだ？」

M「あ、確かに間が空きますね、ジェットエンジンまでは。初めて実戦に取り入れられたのは、第二次世界大戦でですね。」

私「一つ言えることは、『黙示録』では飛行機は飛行機として歴史が展開していっているということだよね。」

M「テーマごとに独立しているということですね。」

私「そうそう。だから、それは問題ないと思うけどね。同じように、中国は中国だけが取り扱われていると、アメリカはアメリカ、ソビエトはソビエトとね、こういう歴史の取り上げ方が『黙示録』流なんだな。」

M「あれ？　でも最後の方に『五か月のあいだ人間をそこなう』と書いてありますよ。これはやっぱり第一次大戦じゃないですか？」

私「解釈を読んでみて。」

M「『そのとき、私は〝五か月のあいだ〟という語句が何だったのかはっきりわかった。五カ月とは五年間のことだったのだ。第一次世界大戦は一九一四年から一九一八年までの五年間に渡って繰り広げられていたのである』ということです。ここで第一次大戦と言っている以上、ジェットエンジンというのはちょっとそぐわないですね。」

V「次の文章にもですね、矛盾があります。『そのかみの毛は女のかみのようであり』というの

をジェット機だとすると、『その羽の音は、馬に引かれて戦場に急ぐ多くの戦車の響きのようであった』と、同じ〝その〟という言葉を使って、今度はプロペラ機を指していることになりますよ。ジェット機というのはやっぱり……、ちょっと違和感があるなあ。」

S「M大師はここではどういう意見だったんですか？　ここに『難解ながら三人（麻原・K大師・M大師）の意見でまとまった点を挙げておこう』と尊師が書かれているわけなんですけれども。」

M「いや、私はジェット機というのはどうも……。」

私「M大師が言ったんだよ、これは。」

M「は？　私がジェット機だと言ったんですか？　無責任！（笑）ザンゲします、ザンゲ。」

私「ザンゲか？（笑）」

K「そのときも同じ疑問が出たんですよ。でも、それは飛行機の歴史だからいいじゃないかと尊師がおっしゃって……。」

私「ちゃんとK大師が覚えているね。同じ議論がなされているわけだ。しかも、言い出した本人が疑問を投げ掛けて攻めてきている。（笑）」

K「で、M大師はあのとき納得して『それでいきましょう！』って。（笑）」

私「つまり、そのときの話し合いでは、『これは飛行機の歴史だからいいんじゃないかな』と私が言ったんだ。そのときM大師が『それでいきましょう！』って言ったんだよ。」

M「あの……飛行機雲というのは、ジェット機でないとできないんでしょうかね？」
私「もしできるんだったら、それでOKじゃないか。」
V「あのう飛行機って、どのくらいの高さを飛ぶものなんですか？」
M「昔のやつは低いですけれども、今はだいたい一〇キロくらいですね、一万メーター。」
私「今の話はできないよ。昔の第一次世界大戦の飛行機の話をしているんだから。」
M「はい。」
V「あれ、プロペラってどうやって回ってたんですか？」
M「自動車と同じエンジンです。ピストン式の。」
V「ガソリンかなんかですか？」
M「はい、ガソリンですね。」
V「そこから排気ガスみたいなのは出ますか？」
M「ええ、やはり出る。そうかあ、ジェットエンジンには限らないんだ。」
V「そうなんじゃないですか？　昔の飛行機はね、映画とか見ていますと、やっぱり飛行機雲があったように記憶しているんですよ。」
S「煙を吐いているという感じでしたね。」
V「そうそう、煙がボワーッボワーッと。」

K「ジェットと書かなくても良かったわけですね？」
私「それはじゃあ、訂正だよ、M大師。」
M「ええ、ジェット機改め飛行機！　排気ガス中に、水蒸気とかチリとか含まれておれば、それが核になって雲ができますからね。申し訳ありません。あのとき、資料を提供した私が間違っていました。」

◉◉これからどうしたら……

私「それでは、このへんで一人一人に感想を聞いてみたいな。『滅亡の日』と『滅亡から虚空へ』を通して読んでの感想。これからどうしたらいいか――とかね。」
K「どうしたらいいかということになると、尊師がおっしゃっているような正しい修行をして、カルマを滅していく――、結局それしかないんじゃないかと思うんですけれども。」
私「うん。じゃあ、M大師はどうだ？」
M「『ヨハネの黙示録』の解読だったわけですけれども、これまでの預言が一つ一つ適中していますよね。だから、これから先の預言についても信用して、預言に書かれている現象というのは起こってくるもんだということを、他の人にもはっきり認識してほしいと思うんですね、まずは。そうすると、おのずと今のままではマズイということがわかってくると思います。」

私「V大師は？」
V「やっぱり、今M大師がおっしゃったのと似ているんですが――。結構高い世界のことが書かれていますよね。まず、落ちていく魂というのが、これを信じられないと思うんですね。死んでしまえばそれまでだと思っている。とにかく楽しければそれでいいんだ、というようなことしか考えていない――、いかにそういう魂が気付くかですよね。一つでも多くの魂が、気付くことから始めてほしいなと思いますね。」
私「S大師はどうだ？」
S「これは私が現世にいた頃もそうだったんですけれども、頭ではわかっていても心から納得できないという部分が非常に大きいと思うんです。自分の現在の環境とか生活とかを見てしまうとですね。それで、感情的なものに流されないで、もっと論理的に考えてほしいと思います。例えば、科学者達は地球が破滅するとかいうデータを確実に出し続けているわけですよ。それが普段、テレビを見たり、夫や子供の世話をしたりしていると、実感として感じられない部分というものが非常に多い。しかし、そこをもう少し踏ん張って、考えてみてほしいなという気持ちです。」
私「そうか。」
M「今ね、他の人々にそうなってほしいということを言っているわけだけれど、勝手に気付いて

くれるのを待つというのは無策ですよね。また、本当に気付いてくれるかというと、それもすごく疑問なんです。だいたい読むものといえば、マンガとかで、テレビを見てうろうろしていると。基本的に無智に覆われてますから。」

私「じゃあ、その疑問に対してどう答えるか？」

M「つまり、我々がどうしていくか、ということを考えなくてはならないと思います。」

私「私はこう思うね。まず、今の人達は、放っておいたら駄目であると。駄目であるというのは、一部の魂の汚れ切った者達に、そういうことに気付かされないような教育をされているからね。つまり情報操作されているということだ。それに対応するためには、本当は理想的な世界があるんだ、理想的な世界を形成することができるんだと、まずこの現世で見せる必要があると思うんだね。それで、私はアストラル・ホスピタル（この世の医療を超越し、アストラル世界の医療を導入した病院、およびその治療システム）計画、あるいは真理学園（真理に基づいた教育を行なう学校）の構想、あるいはシャンバラ化構想（真理を実戦する人達が集まって住むことのできる理想的な街作り計画）などのね、実現に向けて活動しているわけなんだよ。——先駆者は大変だよね。というのは、そのひな型を作っていかなくてはならないから。だから、もしオウムが、あるいは他の人でも、そのひな型を作れたらね、素晴らしい救済の火種になるんじゃないかな。なぜこうしなくては駄目かというと、先程S大師が言ったように、みんな頭では気

付いているんだよ。ところが、それを実感させないような情報を大量に放り込まれているわけだよね、無意識のうちに。テレビなんかその代表的な例だと思うね——暴力、セックス、グルメ、スポーツ、お笑いと。」

M「あと、あきらめみたいなものがありますね。自分の力ではどうにもならないと。」

S「それに、まだ時間があるだろうというのもあるんじゃないでしょうか?」

V「ありますね。」

◉◉時を超える——〝不死〟への福音

私「しかし、シヴァ神がおっしゃるとおり、もう時がないんだ。すぐそばにまで危機が来ていることは間違いない。で、もう一つ——『ヨハネの黙示録』が出たのは今から二千年前だといわれている。そうだよね。その二千年前で時がないと言って、二千年過ぎたじゃないか、という疑問があるよね。それについてはどう答えるか?」

S「それは、その解読者が出て初めて預言が解けるのであって、その解読者が出た時点で時がないというんじゃないでしょうかね。」

K「私もそれでいいと思います。この預言は、世紀末へのメッセージであったんじゃないでしょうか?」

私「それが一つだね。K大師、もう一つあるんだけどわかるか？」
K「わかりません。」
私「V大師は？」
V「いや、わかりません。」
私「M大師は？」
M「破滅へ向けてのプログラムが、もう昔から既に進行していたということではないですか？」
私「それもそうだけど、もう一つは神々の時間と人間の時間が違うということだ。神々の一日というのは、人間の時間でいうと相当長いよね。そうすると、神々から見て時がないと言えるだろうね。」
M「そうすると、神々の目から見たら、人間というのは、あっと言う間にボーッと堕落して、ボーッとつぶれていく――なんか花火みたいなもんですね。」
私「そうだよ。うーん、花火というよりは、早送りの映画を見ているような感じだと思うね。」
S「あと、ラトナサンバヴァの世界のことではっきりしなかったんですけど、寿命が一カルパなんですか？　それとも転生しながら――。」
私「寿命が一カルパですよ。」
M「超能力のイメージも変わってしまうと思いますね。スプーン曲げなんかはもうどうでもよい

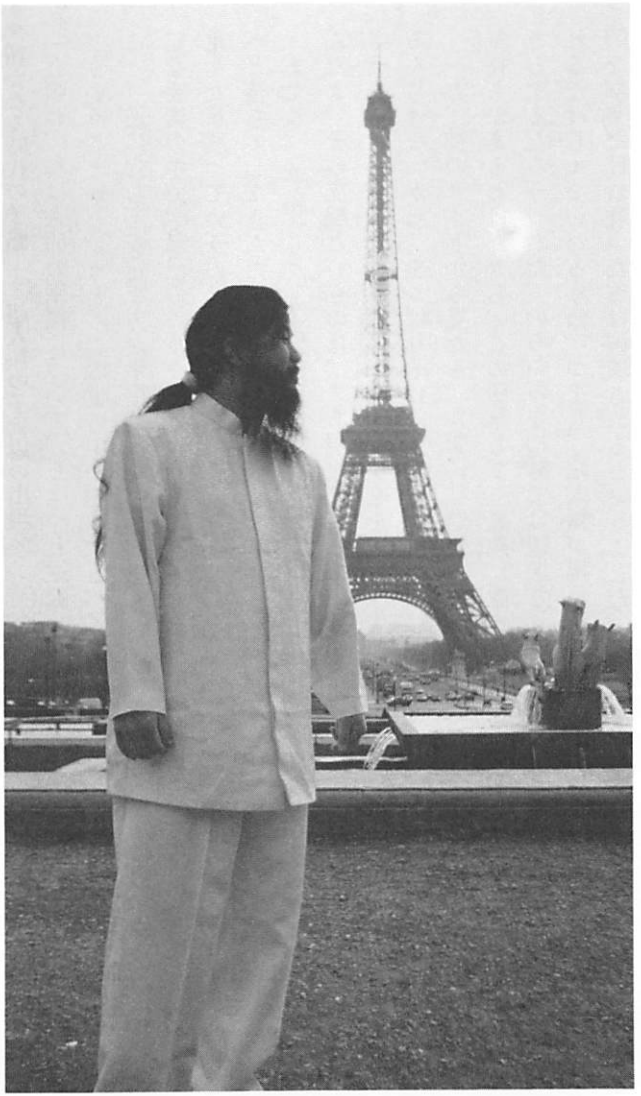
部類だけれど（笑）、せいぜい念力くらいが、今までの超能力という言葉の持つイメージだったと思います。実際、それくらいの超能力を持つ人は多いんじゃないでしょうか？　それが、アストラル世界へと飛べると。それによって死に際しても、また生まれ変わるときにも意識が連続していると。要するに、もう生死を超えているわけですよね。これは、今までにない超能力の概念ではないでしょうか？」

私「そうだね。それについてはね、K大師が今度『マハーヤーナ』に『アストラルへの旅』をお書きになるから、それを読めば、その連続した意識状態というものがどういうものであるか、あるいはアストラル世界がどういうものであるかが、よくわかるんじゃないかね。」

M「また、『滅亡から虚空へ』は不死の概念も変えていると思うんですよね。普通不死といったら、この肉体が死なないということでしょう。それを、転生における意識の連続によって不死を説いている。」

私「そのとおりだね。」

M「すごい福音ですよ。」



◉◉新たなる時代の予感——超人類の子供達の出現

私「近頃ね、私は人間の幸福について、ちょっと逆転した思考を打ち出しているんだね。それはどういうことかというと、この世の中が安定する、イコール幸福ではないんじゃないかということ。逆に少し不安定な方が幸福ではないかと思うんだね。それはなぜかというと、その不安定な要素の中で、自己のカルマを見つめることができるからなんだ。反対に、一見安定して満足した状態っていうのは、単に徳をすり減らしているわけだから、次の転生では当然下の世界へと落ちてしまうんだよね。

またね、〝平和〟という言葉にも私は疑問がある。平和というものの背景には、支配があるんだよ。その支配というのは、まあ現代に関していえば、物質主義に固定化させて真理を浸透させないということ。私達は一時的な快楽をもらう代わりに、ものすごく大きな損失をしているんじゃないかね。やっぱりそれに気付くべきだね。

一方、神のサイドから見たら、人間には進化して高い世界へと生まれ変わってほしいという気持ちがあるわけだから、この堕落して三悪趣に生まれ変わっていくような世の中は破壊しようとするだろう。ただ、いろいろな神話では破壊されて終わりになっているけれども、破壊されるだけじゃないだろうね。つまり、超人類が現われて、その超人類は生き残り、残りの一時的な享楽だけに耽った魂は破壊されるということだ。これが人類滅亡のシナリオじゃないかと

思うんだね。

私は今回『黙示録』の解読をしてみて、それを痛切に感じたんだよ。実際、神々に近い子供達が生まれてきているね。例えば、オウム真理教の子供達〇歳～小学生くらいを見ていると、平気で四〇度～四三度の高熱を出すよね。で、病院に連れていかなきゃと思うと、あっと言う間に熱は下がってしまっている。そして、逆に熱によって体が強くなっていくと。これは、ヨーガの言葉を使うならば、トゥモというわけなんだけれども、これは体の火元素が異常に強い状態だ。火のエネルギーが非常に強い状態だ。――で、考えてみたら、神々の世界は火元素優位の世界なんだね。だから、こういう火元素の強い子供達が生まれ変わってきているのは、〝滅亡の日〟に向けての神々の仕掛けじゃないだろうか？　この子供達が超人類として変貌を遂げていくんじゃないかね。

ここで、私が今最も興味を持っているノストラダムスの予言詩を引用しておこう。

神々が人類に姿を現わす
彼は大きな戦争の首謀者となる
神の前に静まり返って見える軍事と攻撃
左手に向かってもっと大きな衝突を起こす

（『諸世紀』第一章九一）

この詩はね、〝神が大きな戦争の首謀者となる〟となっていて、『ヨハネの黙示録』の解読結果と一致しているんだよ。そして、その時代は近い。だから、私達が今何をしなくてはならないのかというと、どちら側の陣営に立つのかという選択だ。つまり、一時的な享楽を味わって滅亡していく方を選ぶか、あるいは神々の陣営のお手伝いをするかのどちらか、ということになるね。私個人としては、先程も言ったけれども、神々の陣営のお手伝いが少しでもできればいい、と思っている。

じゃあ麻原、何の手伝いができるんだ、というならば、今回の『ヨハネの黙示録』だけではなくて、『ノストラダムスの予言詩集』だとか、『死海写本』だとか、あるいは手に入るのだったならば『大聖パドマサンバヴァの予言』とか、こういうものを一つ一つひもといていきたいと。人類の未来はこのように予言されているよ、ということを呈示したいなと考えている。もちろん、その他にも私のできるお手伝いがあったらしたいですね。」

S「すみません、もう一つ疑問があったんですけど、虚空の時代が一カルパの後終わりますよね。そのとき、ラトナサンバヴァの世界を含む五つの虚空の世界がすべて消滅して、そこの魂は現象界に転生するということだったんですけど、またレベルが下がっちゃうということですか?」

私「――ではないんだよ。アフラ・マズダーの神話にあるように、アフラ・マズダーとアフリマンとの戦いがまた始まるんだよ。その戦いとは、カルマの悪い魂が上昇していき、カルマの良

KRIEG
FRIEDE

い魂が下降していって戦うものなんだ。そして、カルマの悪い魂は、カルマの悪い方に引っ張り込もうとする。カルマの良い魂は、上の方へ引っ張り上げて解脱させようとする。それを繰り返しながら、魂は少しずつマハー・ニルヴァーナに入っていくんです。」

S「救済のために、新しくできた現象界に転生するというのですね。」

私「そう、救済者として上の連中が降りてくると。私はシャンバラ、つまりアフラ世界も救済者が集う世界だと言ったけど、こちらはマハー・ニルヴァーナに入る資格を持つ最終解脱者が行く世界。それに対して、虚空の世界の方はそのレベルにまで達していない救済者の世界と言えるね。まあ、修行中の救済者と。いずれはマハー・ニルヴァーナへ入る資格を得るだろうけど、まだ途中の段階だということだね。」

◉◉大破局まであとわずか——運命の選択は今！

私「では最後に、それぞれが目指している救済というものを聞いて終わりにしようか。K大師、K大師が目指している救済は？」

K「はい。最も理想とする救済は、すべての人がちゃんとカルマの法則に気付き、修行して高い世界に行くということだと思うんですけれども、それは現実問題として不可能ですね。だから、まずはいろいろな手段を使って気付かせることが一つの救済ではないかと——。そうすれば、

縁のある人とかカルマの良い人は気付くことによって修行を始めることになるでしょう。その他の人は、残念ながら気付かずに落ちていってしまうわけですけれども、それでも何らかの真理に対する縁というものを植え付けておく必要があるんじゃないでしょうか。最終解脱者である尊師がいらっしゃるわけだから、それができるんじゃないかと思いますね。強烈な印象を残すとか……。そうすれば、すべての人に対する救済の因を残したということになると思います。」

私「M大師いこうか。」

M「そうですね、今一般の人々が見聞きしている世界、これ以外にちゃんと真実の世界があるんだということを、もちろん尊師の救済活動のお手伝いとしてですけれども、みんなに示す必要があると考えております。今は科学時代といいますか、科学がすべてみたいなところがありますから、例えば光を発する水の実験のように、精神世界の神秘を科学で実証できる研究を進めていくのが、一つ私の仕事だと考えております。その他に、やはり言うだけではなくて、救済する側としての力を持たなければならないと思います。そのための研究ですね、これを進めていきたいですね。人類の幸福、あるいはすべての世界の幸福のために、自分の能力を生かして研究したいという人が、もっとオウムに来てくれたらいいですね。」

私「じゃあV大師は？」

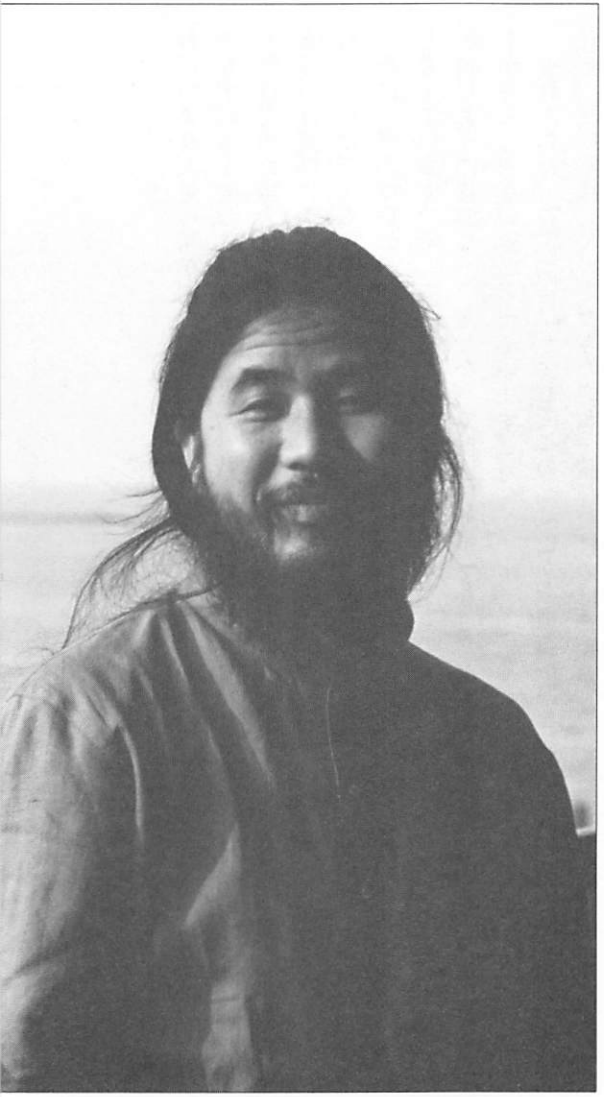
V「先に言われた方とあまり変わらないんですけれども……。みんな薄々感じているんじゃない

かと思うんですね、滅亡に近付いていると。滅亡に近付いているとはわからないまでも、なんか人類がおかしな方向に行っているな、という感じくらいは。だから、そういうところをしっかりと認識させてあげるということがまず一つですね。そして、そうなってしまったのは何が悪かったのか、つまり今までの教育から始まるいろいろな観念ですね、それが真理に基づいたものではなかったからだということに気付かせてあげられればいいですね。それができたらですね、その魂がたとえ今生で真理の道に入れなくて下の世界に落ちてしまったとしても、やがては真理の道に気付くことができるという因を作ってあげるのが、今大事なんじゃないかと思いますね。そのためにも、尊師のお手伝いとして、今のポジションでもっとプロパガンダ的なところをやらなくてはいけないな、という感じがします。」

私「はい、S大師。」

S「私も真理を伝えるという面で編集の仕事に携わらせていただいていますが、しっかりと救済という自覚を持って、できるだけ多くの魂に気付いていただくために頑張っていきたいと思っています。また、例えば自主的に気付かない方がいらしてもですね、そこにいるだけで引き上げられるような空間を作っていけたらと思います。同じ世界にいるわけですから。まず我々が頑張って修行して、少しでも他の人を引き上げられるようにしていきたいですね。」

私「では、最後に私だ。私はね、まあ、人類がおかしくなった根本的な原因が、自分の喜びしか



考えず、他人の苦しみを考えていないというところにあると思うんだね。だから、みんなが他の苦しみに対してもっと敏感になって、自分の少しばかりの幸福でさえ他人に分け与えるようになったならば、もっと変わってくるに違いないね。で、やはりそれができるようになってもらうためには、先程Ｖ大師が言ったとおり、大量のね、プロパガンダが必要じゃないだろうか。どういうプロパガンダが必要かというと、今の主流である物質主義に対してアンチ物質主義の

ね、つまり大量の精神主義的なプロパガンダが必要なんじゃないかと。まず、それをやるだけでもずいぶん変わるだろうと思うんだね。そして、できるだけその方向で救済すると。それでも駄目だった場合は、先程意見として出ていたことだけれども、いずれ高い世界に転生できる、あるいは真理に巡り合えるような因をね、いろいろな形で作っていけたらいいなと考えているね。それはできるんじゃないかと思っているよ。いや、やらなきゃいけないことなんだ。そのために、例えば自分の肉体あるいは魂が傷付いたり、また死んだとしても、それは本望であると考えています。そして、私だけでなく、今のオウムの大師、シッシャ、そして信徒の皆さんが同じように意識し、一丸となって救済活動ができるんだったら素晴らしいね。救済の成果が上がるんじゃないかと考えています。

それからね、『滅亡の日』、そしてこの『滅亡から虚空へ』を読んだ人にお願いがあるんだけれど、ぜひ実践していただきたいね。読むだけでは意味がないんだ。読むだけでなく実践し、魂の向上に役立たせていただきたい。これは、私の他の著作に関しても同じです。もちろん、理想的にはオウム真理教に入信なさって、そして私の教えを実践なさるというのが一番いいわけだけれど、それができない人でもね、本を読んで、自分のできる範囲内でその教えを実践なさったら、少なからず恩恵はあるんじゃないかな、と考えています。

もう一度繰り返すことになるけれども、あまり時間は残されていないんだ。人類滅亡、大破

局に至るまで――。数々の予（預）言者や予（預）言書もそういう予言をしているし、科学者達もそういう警告を発し続けている。そして、私自身が見たアストラル・ヴィジョンも、それを示している。私はもう、大破局は避けられないと思っているわけだ。必ず近い未来に、私達人類は大破局の瞬間を迎えることになるだろう。だったら、今の私達に何ができるんだということを考えるならば、二つの道の一つを選択するしかない。

一つは、堕落し、シヴァ神の怒りを受けて破滅していく道、そしてもう一つは、神に帰依して魂の向上を図り、超能力を身に付け、神々の陣営の一員として邪と闘う道。こちらは超人類としての幸福が約束されていたわけだね、『黙示録』で――。で、私は現在既に神々に近い子供達が生まれてきているというところに、破局へ向けての神々の計画が着実に進んでいるということを感じていると。また、『黙示録』の予言どおりに破局の前兆がこの世の中に現われてきていると。それは癌・海洋汚染・放射能汚染・干ばつ・エイズ・石油危機であり、その後にハルマゲドンが勃発することになっている（『滅亡の日』参照）。あとはもう、一人一人の選択次第だ。

ハルマゲドンが終わっても、歴史は続く。だけど、二つの道のうちのどちらを進むかという選択に迫られているのは今なのだ。今や、それぞれの魂の運命を決定するよう定められた時期を迎えているんだね。そこのところを真剣に考えていただきたいと思います。」

究極の真理はここに！

オウム真理教

二千五百年の時を経て甦った真理が、今ここにある
幸福な人生への懸け橋は渡された
魂の飛翔への道筋は示された
究極の真理をつかむか否かは、あなた次第だ！

日本でただ一人の最終解脱者、
麻原彰晃尊師が主宰する
「オウム真理教」は、あなたに、
●病苦からの解放
●この世での幸福
●より良い転生
●悟り、解脱
をお約束します

始めよう！　真理の実践

◉入信されたすべての方に…

①道場の利用

既にご利用いただいている富士山総本部、東京本部、大阪支部、さらにニューヨーク支部、ボン支部等、日本全国世界各地の神聖な道場をご利用いただけます。

②月刊書籍の無料進呈

麻原彰晃尊師監修による月刊誌『マハーヤーナ』（定価一二〇〇円）と『実践真理』（頒価一五〇円）を毎月無料でお送りします。尊師の説法、特別寄稿、成就者の貴重な体験談、人生相談、信徒の方々の体験談など、精神世界の情報・真理の言葉を満載しています。

なお、ご希望により、テープによる『良い子の真理』（〇～六歳向け）『小学生の真理』（七～十二歳向け）『青年真理』（十三～十八歳向け）『声の実践真理』（ご老人・目の不自由な方向け）をお届けいたします。

③「ヒヒイロカネ」の無料進呈

尊師のエネルギーを込めた神秘の霊石「ヒヒイロカネ」を差し上げます。ヒヒイロカネから放射される尊師のエネルギーは修行を速やかに進め、あなたの霊性を向上させます。

④大師による電話相談
あなたの質問に大師が電話でお答えします。修行につきものの個人差等からくる疑問をどこにお住まいの方でも解消でき、成就者の神聖なヴァイブレーションを感じることができます。

⑤運命鑑定
尊師があみだした驚異の適中率を誇る「大宇宙占星学」で、あなたの運命を予知します。それにより的確なアドバイスをし、鑑定書としてお渡しします。

※加えて、選択されたコースにより、それぞれの特徴がございます。詳しくは各コースの案内をご覧ください。

●日本で唯一の最終解脱者　麻原彰晃尊師が指導する
ヨーガタントラ・コース
Yoga Tantra Course

解脱し悟りを得、絶対自由・絶対幸福の世界であるマハー・ニルヴァーナへと魂を進化させることを望まれる方のコースです。
八八年、八九年に、五十二名の成就者を誕生させた最終解脱者麻原彰晃尊師および成就した弟子達が、責任を持って指導いたします。

古来からの秘儀と最新の科学を駆使し、あなたの霊性を驚異的なスピードで向上させます。
このプログラムに習熟すれば、二年足らずで成就することが可能です。

【コース全体の特徴】

①麻原彰晃尊師が独自の修行法に加えて、インドの聖者や上位アストラル界の偉大な師より授かった数々の秘法を伝授（イニシエーション）いたします。

②成就者の神聖なエネルギーを注入し、速やかにクンダリニーを覚醒させる「シャクティーパット」および、「成就し、仏陀になるための無上ヨーガ」のイニシエーションを受ける資格を得ることができます。

③自宅修行システムも充実しています。入信と同時に、奥儀書、行法テープを差し上げます。

④真理の法をわかりやすく語った尊師の説法テープを二カ月に一度お送りします。

【コースとセミナー】

①イニシエーション準備クラス（初級・中級・上級）
アーサナ、プラーナーヤーマ、ムドラー、瞑想の指導をいたします。

②集中セミナー
麻原彰晃尊師説法、質疑応答に加え、秘伝の行法・瞑想法を直接伝授いたします。

③深夜セミナー
忙しくて集中セミナーに参加できない方々のための夜間集中修行です。

※通信講座もございます。地方にお住まいの方、お時間のない方はご利用ください。

◎資料請求について

詳細について知りたいとお望みの方は、下記の資料請求券を添付したハガキ、または電話にて、最寄りの本部、支部道場までお申し込みください。詳しい入信案内および申し込み書をお送りいたします。

麻原彰晃尊師が、その秘法のすべてを駆使してあなたをスーパーマンに!

◉体力、知力、精神力が飛躍的に向上!

・一日三時間の超短眠法・ストレスを五分で完全に解消する・一日中エネルギッシュに・一度覚えたら忘れない超記憶力・驚くほど頭の回転が良くなる・ここ一発に強くなる集中力・鋭いインスピレーション・土壇場でも動じない強靭な精神力

◉あらゆる超能力を獲得!

・重力からの解放——空中浮揚・透視能力・百発百中のテレパシー・部屋をも震わせる念力・肉

(キリトリ線)
資料請求券
滅亡から虚空へ

体からの解放――幽体離脱・異次元の世界へ

【コース全体の特徴】

①完璧なプログラム。成就者は超能力を知り尽くしていますので、他の団体にみられないほど、速やかに超能力が身に付きます。これは、超能力開発の最大のポイントです。

②総合超能力プログラムの一つのクラスを修了するたびに「シッディ・イニシエーション」を受ける資格が得られます。シッディ・イニシエーションとは、各種超能力に関する秘儀伝授のことです。

③自宅修行システムも充実しています。入信と同時に、奥儀書、テープを差し上げます。

④さらに、あなたが獲得したい超能力を開発する秘伝のマントラ（真言）を大師が伝授します。

【基礎修行、コースとセミナー】

①総合超能力プログラム

定期セミナー（三カ月×6クラス）、テキストに沿った自宅練習で、様々な能力とあらゆる超能力を総合的に開発します。

②超能力セミナー

麻原彰晃尊師、または大師の直接指導によるチャクラ開発中心のセミナーです。毎月一回開催します。参加者全員にエネルギーを込めた特製「マントラ・プルシャ」が贈られます。

※通信講座もございます。地方にお住まいの方、お時間のない方はご利用ください。

◎資料請求について

詳細について知りたいとお望みの方は、下記の資料請求券を添付したハガキ、または電話にて、

（キリトリ線）

滅亡から解脱へ

資料請求券

最寄りの本部、支部道場までお申し込みください。詳しい入信案内および申し込み書をお送りいたします。

◉安らぎと繁栄はすぐそこに
ポア・コース *Poa Course*

現実生活において幸福になり、来世では高い世界に生まれ変わることを望まれる方のためのコースです。

ご自身やご家族の健康、心の安定、ご子孫の末長い繁栄、解脱者の導きによる幸福な転生（ポア）をお約束します。

社会的に重要な地位にあり修行に集中できない方、高齢のためハードな行法ができない方も、このコースで真理の実践をすることができます。

◆今から二千五百年前、仏陀釈迦牟尼は、出家して修行に専念することのできなかった在家修行者に対して、布施・持戒と簡単な瞑想を実践し、来世で天界に生まれ変わるための法を説いています。

今生で解脱できなくとも真理を実践することで、必ず幸福と良い転生を得ることができるのです。安らぎに満ちた生活。それは、真理を土台にしたときにこそ築かれるのです。

【コース全体の特徴】

①入信と同時に奥儀書、アストラル音楽テープ「幸福へのシンフォニー」を差し上げます。

②一切の迷いを解く尊師の説法テープを二カ月に一度お送りします。

【基礎修行とセミナー】

年齢、あるいは肉体的条件により、激しい行法のできない方でも無理なく消化することのできるプログラムです。

①基礎修行

自宅修行の教材として、今生と来世の幸福への道程を明かす奥儀書をお渡しします。毎日、わずかの修行を繰り返すだけで、幸福と良い転生が得られます。

②ポアの集い

毎月一回、本部・各支部で「ポアの集い」が開催されます。尊師または大師による講話、甘露水による「水の祭典」、「ポア・ブレッシング」などが行なわれます。

◎資料請求について

詳細について知りたいとお望みの方は、下記の資料請求券を添付したハガキ、または電話にて、最寄りの本部、支部道場までお申し込みください。詳しい入信案内および申し込み書をお送りいたします。

（キリトリ線）

滅亡から虚空へ

資料請求券

飛躍的に霊性が向上
オウムの修行アップシステム

★シャクティーパット……高レベルの成就者が、あなたに直接エネルギーを移入し、クンダリニーを速やかに覚醒させます。また、成就者の透明なエネルギーによって、心は浄化され、修行が促進します。イニシエーションの中でも、最も高度なものの一つです。

★プルシャ……神秘のセラミックス「ハーン」に尊師のエネルギーを込めました。生命エネルギーを強化し、悟りに必要な潜在意識へのアプローチを可能にします。

★プルシャ型たまて箱……古代エジプトの秘儀に基づく神秘の香りを込めたペンダント型たまて箱です。地元素を浄化し、ムーラダーラ・チャクラを活性化します。

★甘露水……尊師自ら修法した、高次元のエネルギーが込められた聖水です。水元素を浄化し、スヴァディスターナ・チャクラを活性化します。「甘露水」「超甘露水」「超純粋甘露水」「サットプラーナ神水」「ミラクル・ポンド」等があります。

★アストラル音楽テープ……尊師が高次元の世界から引き出したメロディーで作られた音楽の数々。チャクラを開き、アストラル体を浄化するだけでなく、心に働きかけるので情操教育にもうってつけです。

★アストラル・イニシエーション……尊師のマントラを音源とし、それを超高精度でデジタル化することによって、五大元素すべてを浄化することに成功しました。修行を飛躍的にアップします。

◆各道場のご案内

- 富士山総本部　〒418-02 静岡県富士宮市人穴381-1　☎0544(54)1267
- 東京本部　〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5杉田村松ビル1F　☎03(327)8565
- 大阪支部　〒532 大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14八光ビル2F　☎06(397)1022
- 福岡支部　〒812 福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15第一渡部ビル6F　☎092(474)2877
- 名古屋支部　〒460 愛知県名古屋市中区栄5-8-14万国ビル3F　☎052(252)0709
- 札幌支部　〒060 北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1札幌三博ビル201号　☎011(241)4938
- 京都支部　〒600 京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384松本ビル2F　☎075(371)3759
- 仙台支部　〒982 宮城県仙台市若林区河原町1-4-20十全会ビル2F　☎022(268)3904
- 金沢支部　〒920 石川県金沢市京町25-20ソフトオフィスビル2+4 2F　☎0762(51)8457
- 高知支部　〒780 高知県高知市はりまや町2-8-8安藤ビル2F　☎0888(84)8286
- 広島支部　〒732 広島県広島市南区西蟹屋4-4-18和田ビル3F　☎082(264)6250

〈海外支部〉

- ニューヨーク支部　53 Crosby St. Main Floor. New York. N.Y. 10012　☎212(431)8789
- ボン支部　Auf dem Hügel 48, 5300 Bonn 1, Endenich　☎(0228)616647

絶対幸福の鍵を解く

生死を超える

改訂版

現実生活の苦悩から修行を志し、ついに解脱するに至った麻原彰晃尊師の貴重な体験をもとに、釈迦牟尼の「縁起の法」が、実はクンダリニー・ヨーガのプロセスそのものであったことを説き明かした名著「生死を超える」。

八十六年十二月発売以来、宗教、精神世界に関心を持つ読者に絶大な支持を受け、解脱を目指す修行者にとって、手放すことのできない〝バイブル〟となっております。新たに八人の体験談をまじえて贈る全面改訂版。

麻原彰晃

◎誰にも書けなかった知られざる世界が今ここに！
◎真実を求めるあなた、人生の悩み、苦しみを乗り越えたいあなたに贈るヨーガ、仏教の真髄！
◎修行者二十一人の豊富な体験談も満載！

麻原彰晃著／B6判／定価1854円(本体1800円)

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。(送料300円)

●オウム出版● 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話：03(323)9294/郵便振替：東京2-109325

黙示録が示す、滅亡のタイムテーブル

1999年まであとわずか。真実を知り、選択するのはあなただ！

麻原彰晃 **滅亡の日** 最新刊!!

すべてが今明らかにされる！
獣の数字666、アメリカ・ソ連の趨勢、
ハルマゲドン……

謎の預言書
『ヨハネの黙示録』が語る
近未来図

この本には戦慄の内容が書かれている。したがって、
1. 心臓の弱い者／2. 精神病の気がある者／3. 自律神経失調症の疑いのある者
4. 心の惑いやすい者／5. 現世で楽しく生きたい者は
これを開いてはならない……

『マンガ・滅亡の日』絶賛発売中！

滅亡の日――麻原彰晃「黙示録大預言」の秘密のベールを剝ぐ
麻原彰晃著／B6判／定価1854円 ご注文は書店にてお願いいたします。
直接弊社にお申し込みの場合は下記まで（送料300円）。
オウム出版 〒154東京都世田谷区世田谷2－8－17 TEL 03(323)9294 郵便振替 東京2－109325

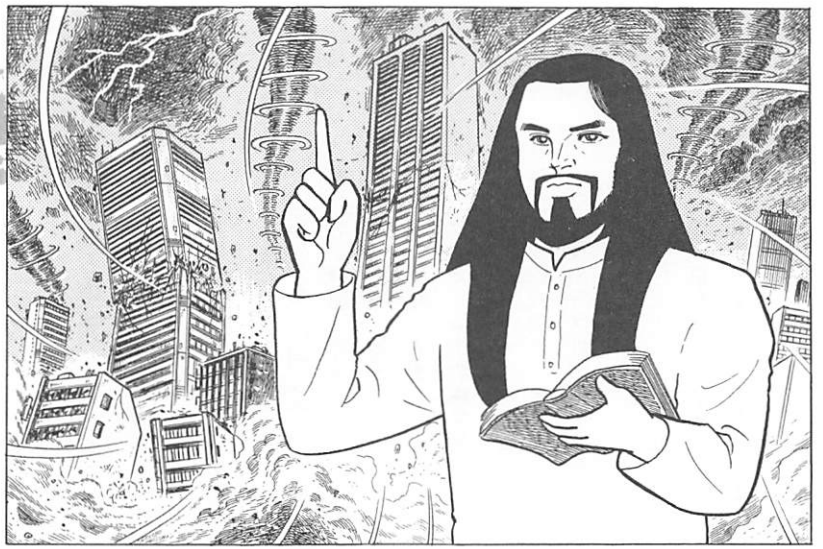
あの謎の預言書、「ヨハネの黙示録」がよりリアルに、わかりやすく……

原作 麻原彰晃

滅亡の日

マンガ版!!

刻々と迫る人類最期の日。私たちが生き残る道はあるのか？
戦慄の未来預言をあなたの目で確かめてみないか？



マンガ「滅亡の日」　原作:麻原彰晃/作画:ダビデの星
A5判/定価824円(本体800円)

ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで（送料300円）
オウム出版　〒154東京都世田谷区世田谷2－8－17
TEL 03（323）9294
郵便振替　東京2－109325

滅亡から虚空へ（続・滅亡の日）
麻原彰晃の「黙示録大預言」完全解読

一九八九年五月三十一日　初版発行

定価一九〇〇円（本体一八四五円）
著　者　麻原　彰晃
発行者　松本　知子
　　石井　久子
編　集　オウム出版編集部
印刷所　東京書籍印刷株式会社
発行所　株式会社　オウム
東京都世田谷区世田谷二―八―十七
郵便番号　一五四
電　話　〇三―三二三―九二九四
振　替　東京二―一〇九三二五
乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

©Shoko Asahara 1989
ISBN4-900497-28-2 C0014 P1900E

滅亡から虚空へ

この本には戦慄の内容が書かれている。
したがって、

1. 心臓の弱い者。
2. 精神病の気がある者。
3. 自律神経失調症の疑いのある者。
4. 心の惑いやすい者。
5. 現世で楽しく生きたい者は、

これを開いてはならない……。

ISBN4-900497-28-2 C0014 P1900E
定価1900円(本体1845円)